令和５年度

自己点検・自己評価報告書

吉 備 国 際 大 学

評 価 委 員

（敬称略）

所　属	職　名	氏　名
高梁市	政策監	川内野　徳夫
高梁市教育委員会	教育長	小田　幸伸
高梁商工会議所	会　頭	藤岡　　孝
岡山県立高梁高等学校	校　長	鳥越　信行
順正学園	監　事	山﨑　貴夫

自己点検・自己評価報告

建学の理念・教育目標の具現化 ・・・ 1
学生確保 ・・・・・・・・・・・・・・ 1
教育の充実（教育改善・向上）・・・・ 4
教育の充実（学生支援の充実）・・・・ 8
教育の充実（キャリア支援の強化）・・ 10
教育の充実（図書館の活用）・・・・・ 12
教育の充実（学修環境の整備）・・・・ 13
研究推進 ・・・・・・・・・・・・・・ 14
大学運営（持続可能性の追求） ・・・ 16
大学運営（職能開発の強化） ・・・・ 17
大学運営（人権・安全への配慮の充実）・ 19
大学運営（法人部門との連携の円滑化）・ 20
大学運営（財政基盤の確立）・・・・・ 21
大学運営（適正な会計処理の実施） ・ 21
内部質保証 ・・・・・・・・・・・・・ 22
地域連携・地域貢献の推進・・・・・・ 24
国際化の推進 ・・・・・・・・・・・・ 26
社会科学部 ・・・・・・・・・・・・・ 29
経営社会学科 ・・・・・・・・・・・・ 32
スポーツ社会学科 ・・・・・・・・・・ 35
保健医療福祉学部 ・・・・・・・・・・ 39
看護学科 ・・・・・・・・・・・・・・ 42
理学療法学科 ・・・・・・・・・・・・ 44
作業療法学科 ・・・・・・・・・・・・ 47
心理学部 ・・・・・・・・・・・・・・ 50
心理学科 ・・・・・・・・・・・・・・ 52
子ども発達教育学科 ・・・・・・・・・ 55
農学部 ・・・・・・・・・・・・・・・ 57
地域創成農学科 ・・・・・・・・・・・ 60
醸造学科 ・・・・・・・・・・・・・・ 63
海洋水産生物学科 ・・・・・・・・・・ 65
外国語学部 外国学科 ・・・・・・・・ 68
アニメーション文化学部
アニメーション文化学科 ・・・・・・・ 73
通信教育部心理学部
子ども発達教育学科 ・・・・・・・・・ 77
社会学研究科 ・・・・・・・・・・・・ 80
保健科学研究科 ・・・・・・・・・・・ 83
（通信制）保健科学研究科 ・・・・・・ 85
心理学研究科 ・・・・・・・・・・・・ 87
（通信制）心理学研究科 ・・・・・・・ 90
地域創成農学研究科 ・・・・・・・・・ 92
（通信制）連合国際協力研究科 ・・・・ 94
留学生別科 ・・・・・・・・・・・・・ 96
外部評価 ・・・・・・・・・・・・・・ 99

吉備国際大学

Ⅰ．建学の理念・教育目標の具現化について

1．大学の使命・目的及び教育目標の周知徹底

吉備国際大学は、開学以来「学生一人ひとりのもつ能力を最大限に引き出し引き伸ばし、社会に有為な人材を養成する」という建学の理念のもと、地域密着型総合大学として、地域に根差した人材の育成に取り組んできた。また、国際化時代を予見し、開学当初から留学生を積極的に受け入れるとともに海外の大学と教育交流協定を締結し、教育・文化交流を図ることにより、学生に国際性を備えた豊かな人間性を身につけさせることに努めてきた。本学の教育の特色と強みはこれからも「地域連携・地域貢献」と「国際化」にある。

開学30周年を迎えた2020年に、建学の理念をより具体的に実現するべく、吉備国際大学ブランドビジョン「実践的な知識を自ら学ぶ力、多様化する社会で生きぬく力、自分の可能性を信じる力を引き伸ばします。」を新たに策定した。このブランドビジョンにより、本学が育成する能力を具体的な三つの力で表し、各学科においてそれぞれをディプロマ・ポリシーに明確に定めて教育を行っている。本学はこのブランドビジョンを教育目標と定めて全教職員が共有し、それを具現化する質の高い教育を展開して、学生の三つの力を引き伸ばす。

〈今年度の取り組み状況〉

令和5（2023）年度から始まった第三期中期目標・中期計画の初年度となった。

【教職員に対する周知】

1．ガルーントップページのバナー、ネームホルダー、名刺など至る所にブランドビジョンを表示して全教職員で教育目標を共有した。

2．令和5年4月15日に自己点検・自己評価会議を実施して前年度の自己点検・自己評価を行い、その結果を受けて今年度の目標・計画の作成を行った。

【ステークホルダーに対する周知】

1．学外に対しては、学生便覧や大学案内、ホームページ等のメディアの内容を充実させて周知した。

2．オープンキャンパスや保護者会、入学前説明会、入学宣誓式、学位記授与式等の機会において説明を実施した。

〈次年度へ向けて〉

建学の理念に基づくブランドビジョンを教育目標と定めて全教職員が共有し、それを具現化する質の高い教育を展開して、学生の三つの力を引き伸ばす。

教職員に対する周知としては、ガルーントップページのバナー、ネームホルダー、名刺など至る所にブランドビジョンを表示して全教職員で教育目標を共有する。また、教育目標に基づき4月に自己点検・自己評価会議を実施して令和5（2023）年度の自己点検・自己評価を行うとともに、令和6（2024）年度の目標・計画の作成を行う。

ステークホルダーに対する周知としては、学外に対して学生便覧や大学案内、ホームページ等のメディアの内容を充実させて周知する。またオープンキャンパスや保護者会、入学前説明会、入学宣誓式、学位記授与式等の機会において説明を実施する。

Ⅱ．学生確保について

1．ブランディングの強化

〈今年度の取り組み状況〉

学長を委員長とした「ブランディング実行委員会」を設置して、委員は各学科及び各部署の若手・中堅層を中心とし、職位を問わず優れた意見を改革に反映できる体制でブランディングを推進している。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

１．ブランドビジョン＝教育目標であり、それを具現化する本学の教育の特色が「地域連携・地域貢献」と「国際化」にあることを、あらゆる機会を通じて周知する。
　学内外のイベントでの挨拶やインタビュー等の機会に、学長をはじめ各担当者が本学のブランドビジョン（教育目標）と、その目標を達成するための２つの柱が「地域連携・地域貢献」と「国際化」であることを発信している。
２．インスタグラムなどのSNSを通して各学科の魅力を発信する。
各学科の学生スタッフが、SNSに所属学科の様子がよくわかる写真や動画を掲載し、魅力を発信している。また、全学的な行事等についても都度SNSに掲載し大学の特色を発信している。
３．ホームページは常に最新の内容に更新して、特に本学の教育の特徴である「地域連携・地域貢献」と「国際化」について積極的に発信する。
　地域と連携した行事や研究の状況、国際交流の行事や留学の状況については、都度ホームページに掲載し広く発信している。

〈次年度への課題〉

　学長を委員長とした「ブランディング実行委員会」を継続して、三つの活動を強化する。委員は各学科及び各部署の若手・中堅層を中心とし、職位を問わず優れた意見を改革に反映できる体制でブランディングを推進する。また、学生参画を推進するために、ブランディング実行委員会に学生の参加を求めていく。

２．入学者受入れ方針（ＡＰ）の明確化

〈今年度の取り組み状況〉

１．一般選抜前期A方式の中で学力の3要素を多面的・総合的に評価を行う選考方法を導入し、全学部・学科対象に実施した。
２．一般選抜前期C方式の中で、全学部・学科を対象に国際化に向けた入学者選抜として資格・検定試験を活用し、英語4技能を評価する選抜を行った。
３．2025年度入学者選抜に向けて、新学習指導要領に対応した選抜方法を検討した。
４．入試代議員教授会で、入試制度の妥当性を検証した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

１．一般選抜前期A-Ⅱ方式入試を新たに導入し、10名の志願者があった。2科目選択の学力試験、小論文、高等学校評定値点数化による選考方法で、学力の3要素を総合的・多面的に評価を行った。
２．一般選抜前期C-Ⅱ方式を新たに導入し、10名の志願者があった。1科目選択の学力試験、英語学部検定試験の点数化による選考方法で、英語の4技能の評価を行った。
３．2025年度入試に向けて、他大学との動向をみて各科目等の出題科目・出題範囲を検討し、入試代議員教授会で決定後、次年度5月以降に公表することとした。
４．入試代議員教授会で、2020年度生のGPAに基づき入試検証を行い、妥当であると判断した。その後、内部質保証委員から改善指示があり、再度入試代議員教授会で入試制度の妥当性について検討した。

〈次年度への課題〉

１．一般選抜前期A-Ⅱ方式入試について、ここ何年かは一般選抜入試の改善を行わなかったが、2024年度入試で一般選抜の総合評価型入試を実施することができたので、2025年度入試も引き続き実施していく。
２．一般選抜C-Ⅱ方式入試について、英語4技能を判定する為に英語外部検定試験を点数化し実施することができたので、2025年度も引き続き実施していく。また、専願入試に外部英語検定試験を導入することも検討していきたい。
３．2025年度入試に向けて出題科目が大きく変更することはないが、新学習指導要領に基づき、各科目の出題範囲をチェックし、入試問題の準備をしていく。
４．入試制度の妥当性について、2020年度入試以前の入学者選抜は、入試改革前の選考方法で実施している。2021年度以降の入試より入学者選抜の見直しと変更を行っており、また更なる入試制度の改善をしている段階である。2025年度に向けては、AO総合選抜や専願入試の面接について、本学のアドミッションポリシーの理解度を確認事項に追加する。

３．収容定員の充足

【収容定員充足に向けた募集活動】

〈今年度の取り組み状況〉

１．ブランドビジョンを柱に各学部・学科の情報発信を行い、入学定員充足を目指した。
２．オープンキャンパス参加者数を増やし、専願入試（AO総合選抜・指定校・特別推薦）の入学者を昨年以上に増やすために、高校訪問、進学ガイダンスや出張講義、高校単位での見学会などを行い、特に4月～8月までの広報を強化した。
３．オープンキャンパスへの参加や出願促進を目的として、Web広告やダイレクトメール等を積極的に活用し、受験生等をホームページへ誘導する試みをした。
４．本学のホームページやインスタグラムでの情報発信を充実した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

１．ホームページの内容を充実させるために、各学部・学科での学びを中心に情報発信を行った。学部・学科からの情報提供を受け、「キビコクNEWS」としてトップページから誘導できるように工夫した。
２．高校生対象の高校内ガイダンスの会場型ガイダンスに積極的に参加したことで昨年度より接触者数も増えて、オープンキャンパス参加者数も大幅に増加した。（カッコ内は昨年度）
高校内ガイダンス【入試広報室】65校（62校）、高校内ガイダンス・出張講義【教員】79校(69校)、会場型ガイダンス【入試広報室】30会場（36会場）接触者数（参加者数）1,891名(1,495名)
オープンキャンパスを全8回実施し、参加者数（カッコ内は昨年度）は、受験生・高校生1,068名（849名）と増加した。
３．本学の認知度アップ、オープンキャンパス告知、特別奨学金制度・新設学科告知など目的としてWeb広告やダイレクトメール等を積極的に活用し、本学ホームページ等へ誘導して、オープンキャンパスへの参加につなげた。
４．各学科の学生広報スタッフにより、インスタグラムへの情報発信が積極的に行えた。大学生の生活（イベント参加、学外活動）の視点から最新の学科情報を速やかに発信できた。

〈次年度への課題〉

１．2025年度募集に向けて、昨年度と同様にホームページの内容を充実させ、各学部・学科等の新着情報を発信していく。
２．2025年度学生確保について、オープンキャンパスの参加者数を増やして、年内入試で確保するために、引き続き高校訪問、進学ガイダンスや出張講義などを行い、更なる広報強化を行う。
３．Web広告やダイレクトメール等を積極的に活用し、オープンキャンパスへの参加、受験に結びつける。
４．来年度も、ホームページやインスタグラムを利用して最新の情報発信を行い、入学者確保につなげていく。

【改組等による適切な学科編成】

〈今年度の取り組み状況〉

心理学部心理学科、保健医療福祉学部理学療法学科及び作業療法学科を改組して令和6年度に開設する人間科学部の周知を今年度当初よりホームページ内にバナーを設け、オープンキャンパス及び高校訪問でPRするためにリーフレットも作成して周知を図る。また、看護学科は学部名称を「看護学部」に変更を行うことで「看護師」養成を行っている大学を改めて周知する。

「高梁市特別奨学金制度」、「南あわじ市入学金制度」周知浸透を引き続き進める。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

心理学部心理学科、保健医療福祉学部理学療法学科及び作業療法学科を改組して令和6年度に開設する人間科学部の周知を今年度当初よりホームページ内に専用のバナーを設け、オープンキャンパス及び高校訪問でPRするためにリーフレットも作成して周知を図った。

また、看護学科は学部名称を「看護学部」に変更を行うことで「看護師」養成を行っている大学であることを周知した。さらに「高梁市特別奨学金制度」、「南あわじ市入学奨励金制度」の周知浸透も行った。

〈次年度への課題〉

人間科学部人間科学科について、心理学、理学療法学、作業療法学の分野を学ぶことができるということを、ホームページやオープンキャンパス、高校訪問などで引き続き周知していく。

看護学部についても、引き続き「看護師」養成を行っている大学であることをＰＲしていく。さらに、「高梁市特別奨学金制度」、「南あわじ市入学奨励金制度」、「外国語学部給付型奨学金制度」の周知をしていく。

Ⅲ．教育の充実について

１．教育改善・向上

ブランドビジョン実現に向けた教育課程の充実

〈今年度の取り組み状況〉

(1) 本学の特色である“地域”と“国際”を軸とした全学的な教育プログラムの策定

まず準備段階として、全学教養教育委員会において2022年度スタートの教養科目の授業内容と履修状況の検証を行った。また各種学生・卒業生等のアンケート結果をもとに来年度以降、必修の「人間力育成科目」を起点とした課題解決型のプログラムの創設を目指す。

(2) 情報教育の推進と語学教育の充実

情報教育については、2022年度入学生より導入したBYOD（パソコン必携化）の実態調査を行い、学科ごとの授業でのパソコンの活用状況を取りまとめ、内部質保証委員会に報告した。

また「AI戦略2019の育成目標」で、すべての大学生が必要とされるリテラシーレベルのデータ活用能力を身につけることを目標に、2022年度から教養科目で導入した「数理・データ活用科目」2科目、英語力向上を目指し同じく教養科目に導入したネイティブ。スピーカーによる英語科目の「レベルアップ英語Ⅰ・Ⅱ」等の履修状況を検証した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

卒業時アンケートや就職先アンケート等の結果から、問題解決力、行動力、ICT活用・語学・プレゼンテーション能力に関する学生の自己評価が低く、反面、卒業生や就職先からはこれらの能力が社会で必要であると回答されていることが分かった。この結果報告を受け、内部質保証委員会より、本学のDP7の「自己効力感」の育成及びICTの活用・語学・プレゼンテーション能力の育成に有効な方策を具体的に提案するよう改善指示が出され、3月には各学科、委員会で検討した改善計画が内部質保証委員会に提出されている。

また新たな教養科目の履修状況については、「数理・データ活用科目」では、大学全体の履修者が、「数理・データサイエンス・AI基礎」が20名、「数理・データサイエンス・AI応用」が15名と非常に少なかったことから、秋学期の在学生オリエンテーションにおいて科目の必要性を説明したチラシを作成して配付し、受講を推奨したことにより、今年度秋学期の「数理・データサイエンス・AI基礎」の履修者が大学全体で92名と大幅に増加した。語学教育については、今年度初めて開講したネイティブスピーカーによる英語科目の「レベルアップ英語Ⅰ・Ⅱ」の履修者は、高梁・南あわじ志知キャンパスの合計で、「レベルアップ英語Ⅰ」22名、「レベルアップ英語Ⅱ」15名で、学科の偏りも見受けられた。オリエンテーションを通じて、科目の目的などを学生に周知し、特に海外留学を目指す学生などが積極的に受講するよう働きかける必要がある。（数理・データサイエンス・AIについては別紙参照のこと）

〈次年度への課題〉

“地域”と“国際”を軸とした全学的な教育プログラムの策定を全学教養教育科目を中心に検討を進めていく。特に“地域”については、高梁市や南あわじ市との連携を含め、課題解決型（PBL）の授業を取り入れ、今年度検討した本学のDPにある「自己効力感」を高めることができる内容を検討する。また、これからの社会に必要とされる情報教育と語学教育については、今後も教育内容の充実と履修者増の取組みを実施するとともに、情報教育においては、BYODを推し、2024年5月には、文部科学省の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度」に計画どおり申請する計画である。

学修支援の強化

〈今年度の取り組み状況〉

(1) 学修時間の延伸に向けた方策の検討

本学では入学時から卒業後まで各種学生アンケートを実施している。本学の学生の学修時間については、入学時アンケートから高校段階から学習時間が少なく、学習習慣が身についていないことが明らかになった。また今年度秋に実施した「学生の学修及び生活に関するアンケート」によれば、1週間の授業以外の学修時間は、「ほとんどしない」が27.7%、「１～5時間」が48.8%で、全国平均を大きく下回っていることが分かった。

この結果を受け、内部質保証委員会から、その他の生活時間との関係性などアンケート結果を分析し、初年次から学修習慣を身につけるための方策を検討するよう指示が出され、内部質保証委員会において今年度中に取りまとめ、改善を実施する計画である。

(2) 国家試験対策の根本的な見直し

令和４年度の自己点検・自己評価結果を受け、国家資格の取得を目的としている保健医療福祉学部看護学科、理学療法学科、作業療法学科について、内部質保証委員会より国家試験対策の根本的な見直しの改善指示を行い、8月開催の内部質保証委員会において各学科長より改善計画が報告された。改善にあたっては、3学科での情報共有や協働体制のもと、１年次から４年次までの体系的な対策が提案され、これに基づき学生指導が行われた。

(3) 外国人留学生の学修支援

外国人留学生を対象とした「KIUグローカル人材養成留学生就職促進プログラム」を新たに構築し、文部科学省「留学生就職促進教育プログラム認定制度」に申請し、10月末に認定された。この認定制度は、外国人留学生に対する敬語やビジネスマナーを含む「日本語教育」、「キャリア教育」、「インターンシップ」を一体として提供する質の高い教育プログラムを文部科学省が認定し外国人留学生の国内企業等への就職を一層促進するもので、プログラムを修了した学生には修了証明書が発行され就職活動に活用することができる。また日本語能力が十分でない留学生のための補習授業として、ラーニングサポートセンターが実施する日本語能力試験対策講座を、週2コマ開講するなど、トップアップとボトムアップの両面から支援し、留学生全体のレベルアップを図った。

(4) 退学者対策の実施

精神的に問題を抱える学生の状況を早期に把握し、支援策を講じることを目的に、例年通り新入生面談ウィークとして、オリエンテーション時に実施した心理テストの結果なども活用して、入学時に個人面談を全学で実施した。また、 2 週連続授業欠席データを活用しての早期対応も継続して実施しているが、10月からは、毎月、各学科の欠席者の状況を取りまとめ、学長、副学長、学部長及び担当部局に報告し、情報共有を図る取組みを新たに実施している。

増加傾向にある留学生の退学・除籍について、留学生別科、学部の各入学試験において個人面接を実施し、大学入学の目的や意思確認を必ず実施することとした。また、コロナ禍でここ数年十分にできなかった留学生別科の学生と各学科との交流イベントの実施やキャンパス行事への参加など、留学生別科の学生の大学入学への意欲を醸成する取り組みを積極的に行った。

学力不足による学修意欲の低下を防ぐため、入学前教育及び入学後の基礎学力向上のツールとして導入しているkiuiドリルについて、学生の実施状況データからその妥当性について各学科の意見を取りまとめ、内部質保証委員会に報告した。2025年度入学生の入学前教育実施に向けて継続して担当委員会で検討、審議し、来年度5月末までに改善案を提出する予定である。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

(1) 学修時間延伸の方策は各種アンケートもとに計画的に進められている。

(2) 国家試験の結果（合格率）

看護師：	87.9%（全国平均93.2%）	保健師：	100%（全国平均97.7%）
理学療法士：	100%（全国平均95.2%）	作業療法士：	100%（全国平均91.3%）

作業療法士は2年連続100%、理学療法士は昨年の69.6%から100%と大幅に向上した。さらに保健師についても100%、看護師は87.9%と全国平均を下回ったが、国家試験対策の全面的な見直しによる成果がみられた。

(3) 外国人留学生を対象とした文部科学省「留学生就職促進教育プログラム認定制度」については、全国でも国公立大学を含め現在までに20数校、岡山県内の大学では初めての認定である。日本国内での就職を希望する優秀な留学生の就職支援として活用が期待される。

(4) 退学者数・除籍者数等（通学制学部・大学院の合計）】※R5年度は3月19日時点（受理分）

	退学者数	除籍者数	合　計	退学率	除籍率	退学・除籍率
令和4年度	81	20	101	5.1%	1.2%	6.3%
令和5年度	43	9	52	2.8%	0.6%	3.4%

3月19日時点であるため、今後、退学者及び学納金未納の除籍者の追加が見込まれるものの、昨年度に比べ大幅に減少した。特に留学生の退学・除籍者が53名から17名に減少しており、対策による一定の効果を得た。ただし、入学時より問題を抱えた学生が増加傾向にあるため、1年次の早い段階で授業を欠席したり、休学や退学となるケースが増えている。

〈次年度への課題〉

外国人留学生の学修支援として新たに構築した「KIUグローカル人材養成留学生就職促進プログラム」を大学ホームページやオリエンテーションなどを通じて学内外に情報発信し、留学生の日本国内への就職活動支援や留学生募集などに役立てていく。

退学者対策については、入学段階及び入学後の対人・学修などに関する不安など、各段階で精神的に問題を抱える学生への有効な支援方法を検討する必要がある。

学修成果の可視化の推進と教育改善

〈今年度の取り組み状況〉

(1) アセスメントプランに基づく三つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価と改善

アセスメントプランに基づく令和5年度アセスメント実施計画を策定し、計画どおり実施した。これまでに、入学時アンケート、卒業時アンケート、卒業生及び就職先アンケート、学生の学修及び生活に関するアンケート、学生による授業評価アンケートの各種アンケートの実施及び検証結果報告、また各種資格取得率、修業年限内卒業率、退学理由分析、成績分布等の各種IRデータの集計報告、さらに今年度から新たにジェネリックスキル測定テスト（PROGテスト）を実施し、客観的評価による学修成果の可視化を可能とした。

(2) ジェネリックスキル測定テスト（PROGテスト）を新たに導入

学生のジェネリックスキルを客観的に測定することができる「PROGテスト」を１年生及び４年生を対象に新たに実施した。学生へのフィードバックは、1年生は「キャリアデザインⅠ」の授業内で個人結果を返却して解説会を実施し、4年生はゼミ単位でフィードバックした。また大学全体の集計結果については、内部質保証委員会に報告するとともに、FD研修会として全教職員を対象に解説会を実施し、本学学生の強み・弱みなど分析結果を共有した。

(3) 学修ポートフォリオとルーブリック評価の実施

昨年度、１年生から実施している学修ポートフォリオは、今年度は２年生までを対象に実施した。昨年度、演習及び卒業論文（研究）科目で導入したルーブリック評価については、評価項目等について見直しを実施し、今年度末には、試験的に一部の学科において、卒業論文のルーブリック評価をデータ集計し、ＤＰとの紐づけによる学修の達成度について検証する計画である。

(4) 教育改善の取組みへの学生の参画

卒業する学生にカリキュラムについて意見を聴取して改善に取り組む「カリキュラム・コンサルタント」について、実施案を策定し、教育開発・研究推進中核センター会議に提案した。来年度より一部の学科で試験的に実施する計画である。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

アセスメントプランは、毎年、実施時期や点検内容、アンケート実施方法等について見直しを行った上で、計画通り実施できている。特に、新たに導入した客観テストである「PROGテスト」については、これまで学生アンケート等の自己評価が中心であった学生の能力に関する評価について、客観的なテストにより測れるようになったことで、学修成果の可視化としてより正確に検証できるようになったと考える。

〈次年度への課題〉

「PROGテスト」のデータを活用し、DPの達成度、各種アンケート結果との相関性など、データの分析と検証を行い、教育改善の基礎データとする。将来的には1年次と4年次のテスト結果を比較し、能力の伸長を確認して学修成果の可視化を進める。また学生へのフィードバックを丁寧に行い、学生が自らの能力を確認し、大学生活や将来の目標設定、就職活動に役立てられるようにする。

学修ポートフォリオについては、継続して実施し、就職活動に結びつけられるようキャリア教育との連携を検討している。

教育改善の取組みへの学生の参画

〈今年度の取り組み状況〉

1．春学期末と悪学期末に、「学生による授業評価アンケート」を実施したが、その結果については授業担当教員へフィードバックするとともに、次年度に向けた授業改善報告書を作成し、高梁キャンパス教務課や各キャンパスの事務局等において学内限定で学生が閲覧できるようにしている。
2．卒業する学生にカリキュラムについて意見を聴取して教育改善に取り組む「カリキュラム・コンサルタント」について、実施案を作成し、教育開発・研究推進中核センター会議に提案した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

1．「学生による授業評価アンケート」ならびに「授業改善報告書」の作成・開示を計画通り実施できたことは評価できるが、「授業改善報告書」については閲覧者が少なく十分に周知されていないため、開示方法について完投する必要がある。
2．「カリキュラム・コンサルタント」については、実施案が作成されたことは評価できるが、今後計画どおりに実施する必要がある。

〈次年度への課題〉

1．「学生による授業アンケート」の結果を踏まえて教員が作成する「授業改善報告書」については、書面による学内限定公開から、学生が参画する授業構築の観点から、より広く学生に周知するために、ユニバーサルパスポートによる学生・教職員への開示を検討する。
2．「カリキュラム・コンサルタント」については、今年度３月卒業予定学生を対象として、一部の学科で試行的に行う方向で実施方法・時期等について検討する。

大学院教育の転換と受入れの拡大

〈今年度の取り組み状況〉

1．各研究科で「学生による授業評価アンケート」を実施し、結果を踏まえて教員が「授業改善報告書」を作成して教育改善に取り組んでいるが、大学全体として大学院の教育内容や授業方法等について見直しの検討は行っていない。
2．今年度より２名の大学院生を新たにTAとして採用しているが、通学制大学院の在学生が減少する中、TAの活用が困難となっている。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

1．各研究科の「授業改善」の取り組みは評価できるが、大学全体として大学院教育の点検並びに改善に向けた取り組みが必要である。
2．TAについては複数の新規採用者があることは評価できるが、大学における教育経験を培う環境としては不十分である。

〈次年度への課題〉

1．通学制・通信制ともにメディアを活用した授業手法の活用推進や、社会人を対象とした学位取得、リスキリング等、様々なニーズに対応した教育課程や授業方法等について、大学院教育の在り方について全学的に検討する。
2．TAなどの活用を推進し、大学院学生に対して、将来教育を担うものとしての自覚や意識の涵養と、教育方法等について学ぶ場の拡充を検討する。

２．学生支援の充実

学生の意見・要望への対応の強化

〈今年度の取り組み状況〉

例年各キャンパスの学友会と理事長、学長との意見交換会を行い、施設設備、学生サービスに関して可能な件についての対応を行っている。令和５年度については、意見交換会と共にユニバーサルパスポートのアンケート機能を活用し各キャンパスにおける学生から本学に対する意見・要望を幅広く集め対応している。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

理事長、学長と各キャンパスの学友会執行委員との意見交換会は令和6年1月23日に開催した。その祭、前年度の意見交換会において学生から要望があった本学の設備等の改善点についてのフィードバックを行った。アンケート調査については、IR推進委員会が実施するアンケートと質問項目を整理・統合し実施した。その後、内部質保証委員会から指摘があった改善項目について学生満足度向上委員会において精査し令和6年度に向けての改善案を作成した。

〈次年度への課題〉

集計結果の正確性を向上させていくために質問内容の精査が必要である。（学生が保護者から受け取る仕送に関する質問での自宅生の扱いやアルバイトと課外活動の関係が可視化できる内容など）

また、新入生、卒業生に対するアンケートの集計データと共に健康管理センター等、各部門が保存する学生支援の記録との連携もさらに行う事が必要である。

学生の相談体制の見直しと充実

〈今年度の取り組み状況〉

キャリアサポートセンター、教務部などの学生支援部署との連携を通じた学生支援体制の再構築を図っている。特に留学生に対しては、入学時のオリエンテーションからアルバイトなどの生活相談、成績に関する情報など共有しているデータを活用し入学から卒業までの流れを意識した支援に取り組んでいる。留学生の窓口対応においてアルバイトを希望する学生にエントリー方法を指導すると共に、高梁市内の企業と就業希望者（アルバイトを含む）を対象とした説明会に学生課職員が参加し情報収集を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

学生課、留学生課、保健室の窓口やメールによる相談に適切に連携し対応できた。合理的配慮を必要とする学生への支援については、担当教員、健康管理センター、教務部などの関係部署と連携を図り個別支援を行うなど一定の成果を上げていると言える。留学生への窓口対応についても入学直後のオリエンテーションにおいて学生生活を送るために必要なルール説明と共にアルバイトの斡旋についての内容を盛り込んだ。このことにより学生課へ来室した何名かの留学生に斡旋することができ就業が実現した。

〈次年度への課題〉

学生が気軽に相談できるように、学生部窓口や保健室での対応を今まで通り丁寧に行うとともに、メールなどで相談できる相談員制度を含む相談方法に関する広報を強化する。

留学生の中で日本語能力の低い学生に対して、卒業までに必要となる単位取得に関する知識、学外で日常生活を送るために必要な日常的ルール、求められるモラルについての理解を如何に伝えるかが留学生支援の大きな課題となっている。学内外でトラブルを起こしてしまう留学生は日本語能力が低く日常生活を送るうえでのルールを理解していないケースが多い。これを改善するためオリエンテーション、窓口対応について翻訳ソフトなどのツールを活用して意思疎通を図り、支援対象となる留学生の来室者を増加させていく。

課外活動の活性化（クラブ活動）

〈今年度の取り組み状況〉

クラブ活動全般の活動や学園祭などの行事はコロナ禍以前とほぼ同等のレベルにまで回復してきた。令和5年度は、学友会、学園祭実行員会のスタッフの増員、体育部会・文化部会など各組織全体の立て直しに取り組むことができている。その過程で継承されてこなかったデータ化されていない慣例などについての指導を行うことで組織の活性化を図っている。高梁キャンパス、岡山キャンパス、南あわじ志知キャンパスの学生レベルでの交流も見られた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

年度当初より学友会並びに伊賀祭実行委員の学生と打ち合わせを重ね、新入生に対する両委員の広報・勧誘活動を実施し前年度より執行委員、実行委員のメンバーを増加させることができ、クラブ部員数も増加することができた。また、新入生への対応、学友会が開催するスポーツ大会などのイベント開催前に昨年度までのトラブル事例について学生部より説明・指導を行いイベントの精度を向上させることができた。さらに、伊賀祭開催についても行政へ提出する必要がある各種手続書類作成を（備北保健所・高梁市役所・高梁消防署）学生自身が作成し提出を行うことができた。

〈次年度への課題〉

クラブ活動については、文科系のサークルが新規発足し、体育会系のクラブについてもコロナ禍以前の活動水準に戻ったと言える。学友会、学園祭については委員長が主導し自立した活動が出来る組織が構築されつつある。一方で体育部会、文化部会の組織再編については、未達成の点が多く令和6年度に対応しなければならない課題となっている。休部になる場合や新規に立ち上げるクラブ活動に対する支援も手厚くする必要がある。顧問の連携についても対応したい。

課外活動の活性化（地域社会との連携）

〈今年度の取り組み状況〉

高梁キャンパスにおいては本学学生と地域社会の各種団体との交流をコロナ禍以前の規模に再開し新規に伊賀祭へ招聘するなどの連携強化に取り組んでいる。新年会でも有意義な交流が見られた。また、南あわじ志知キャンパスについては、従来から続いている地域社会との連携を継続すると共に新学科開設に伴い新規の連携事業を展開している。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

昨年度より開催している留学生を主体としたインターナショナルフェスタに高梁市内の小中学生を招き本学在学生との交流を行うことができた。さらに、学友会・伊賀祭実行委員会の要請に地元ボランティア団体が応え伊賀祭などの行事に出店するなど市民と学生の交流がコロナ禍以前に回復した。南あわじ志知キャンパスについては、海洋水産生物学科の教員と学生が海岸のクリーンアップ行事に参加するなど地域社会への貢献活動が開始された。

〈次年度への課題〉

地域との交流は増えてきているので、学生の代表の意見を重視していきたい。留学生を主体としたインターナショナルフェスタについては、令和6年度は開催時期を見直し12月の開催とし学友会のクリスマス行事との合同開催となった。開催規模は未定であるが、学生の自主性を大切にすることと行事の継続性についてどの様に擦り合わせていくかが課題と言える。

キャンパス間交流の充実

〈今年度の取り組み状況〉

令和4年度に続き、各キャンパスにおいて実施している学園祭への相互出展とキャンパスが立地する地域のＰＲに取り組む。また、各キャンパスにおいて実施している他の行事、インターナショナルフェスタ、ハロウィン、クリスマスなどの行事についても可能な限りの交流を行う。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

伊賀祭では、南あわじ志知Ｃの並びに岡山Ｃの在学生が参加、出店、くにうみ祭においては高梁Ｃ並びに岡山Ｃの学生が模擬店を出店した。さらに、高梁市栄町商店街において開催されたカレーフェスタに３キャンパスの学生が合同で出店を行った。内容は、南あわじ志知Ｃで栽培した野菜を使用し岡山Ｃの学生オリジナルのベジタブルカレーを調理し合同で販売を行い、高梁Ｃの学生は留学生と共に民族衣装での記念撮影、各国の民族舞踊などの披露を行った。

〈次年度への課題〉

南あわじ志知キャンパスのさなぶり祭への岡山キャンパス並びに高梁キャンパスからの参加、学園祭への各キャンパスの相互出店については、週末の大学行事であることから学生の参加が比較的に多いが、平日（授業日）に開催される行事へ他のキャンパスから参加するにはスケジュールの調整が課題となる。また、学外で開催される地域行事への合同参加については、毎年変化する学生のニーズと地域からの要望について行事参加の継続性が課題となる。

３．キャリア支援の強化

キャリア教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

学生の主体的・積極的なキャリア形成を支援してくため、1年次から3年次までのキャリア教育において以下の方策を重点的に行った。

1. 「キャリアとは何か」「大学で何を習得していくのか」を考え主体的に実行できるよう、情報提供や実践的なキャリア教育を行う。
2. 社会的及び職業的自立に必要な能力である基礎的・汎用的能力（人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、キャリア・デザイン能力）を高める演習やグループワークを行う。
3. 就職活動に必要な情報の収集、業界研究・企業研究、各種書類の作成、試験や面接に関する知識やスキルを教授する。
4. 学生の主体的なキャリア形成や進路選択に活用するため、「キャリアデザインノート」や「キャリアプラン」の作成を支援する。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

1. 2022年度から新カリキュラムとなり、キャリア教育の内容も一新した。1年次必修科目「キャリアデザインⅠ」の初回に「キャリアとは何か」を教授して自分の将来の生き方をイメージし、大学4年間の目標やそれを実現するための生活を考えることができるよう、講義や演習を実施した。
2. 1年次「キャリアデザインⅠ」の中で、自己理解を深める演習を繰り返し実施した。また、外部講師として、卒業生やボランティアセンター職員を招聘し、社会と繋がっていく自分をイメージし、実際に活動していくことを推し進めた。さらに、2年次「キャリアデザインⅡ」においても、自分の社会人基礎力や就職基礎力を自覚できるような演習を取り入れ、自己理解を深めることができた。
3. 就職活動に必要な情報収集をするため、3年次「キャリア開発Ⅱ」の授業内で情報サイト会社6社による登録会を実施した。業界研究・企業研究においては、県内の企業から職業教育をはじめ働き方や仕事に対するの考え方を学ぶ時間を設け、働き方について理解を深めた。各種書類の作成や面接については、授業内で基本的な内容を伝え、その後各学科教員やキャリアサポートセンターのスタッフが履歴書やエントリーシート添削及び面接練習等を行った。
4. 1年次「キャリアデザインⅠ」の最終回には、それまでのキャリア実践活動や自己理解の記録を整理して「キャリアデザインノート」を作成した。さらに、2年次「キャリアデザインⅡ」では、将来の生活を意識した「キャリアプラン」を考える時間を設け、進路選択や就職活動に繋げる資料を作成できた。

〈次年度への課題〉

1. 今年度の内容を継続しながら、自分のキャリアについて具体的なイメージをもつことができるよう、自己理解の演習を多くする。

2. 「キャリアデザインⅠ」では、社会人基礎力を高めるため、特に人間関係形成やコミュニケーションに関する演習を取り入れる。ボランティア活動についても、実際に参加できる身近な活動を紹介して参加を促進させる。キャリアデザインⅡでは、キャリアビジョンを具体化し将来の夢や卒業後の目標から今年度の目標を立て、振り返りを行う。
3. 次年度からは3年次の「キャリア実践Ⅰ」が必修科目となるため、就職に限らずキャリア実践の在り方や将来の働き方について考える内容を充実させる。就職希望の学生に対しては、例年通り、情報サイト会社による登録会を実施する。
4. キャリアデザインⅠで作成したキャリアデザインノートが、2年次以降のキャリアプラン作成やその後の進路選択に繋がるよう、振り返りとブラッシュアップを行う。

キャリア支援における連携体制の構築

〈今年度の取り組み状況〉

学生及び採用企業のニーズや社会情勢の把握に努めながら、「就職率100%」並びに「就職・進学率90%以上」を目指し、以下の対策を重点的に取り組んだ。

1. オープンカンパニーやインターンシップへの参加を勧める。
2. 就職関連行事及び就職説明会等の周知を徹底し、積極的な参加を働きかける。
3. 動画やオンラインによる面接、グループディスカッションの対策を強化する。
4. 「キャリア開発Ⅱ」の授業も活用し、3年次生の就職活動や書類作成を実践的に支援する。
5. 日本での就職を希望する留学生に対して、積極的な情報提供や就職ガイダンスを行う。
6. 学生の能力や個性を卒業後のキャリアに活かすため、学生部と連携した支援を進める。

各キャンパスにおいて実施した主なガイダンス及びイベント、参加人数は以下の通りである。

4月24日	スタートアップ講座　（志知）36名
6月12日・19日	業界研究　（志知）59名
10月3日	秋学期就職準備ガイダンス　（志知）12名
7月21日	留学生対象企業見学　7名
10月20日	就職ガイダンス「秋冬にしておくべき就職準備」4名
11月13日	吉備国際大学学内インターンシップ説明会・業界研究会 岡山県中小企業団体中央会協力：参加事業10社　参加学生35名
12月8日	就職ガイダンス「応募書類・面接攻略講座」8名
1月19日	就職ガイダンス「就活準備最終確認講座」12名
1月24日	就職ガイダンス　２年生対象（岡山）5名
3月1日	合同説明会　大阪（高梁・岡山・志知）28名
3月7日・8日	岡山県合同企業説明会ジップアリーナ　岡山 8名
3月12日	アジア地域出身留学生対象企業説明会岡山コンベンションセンター 6名

〈今年度の結果についての点検・評価〉

本学の学部学科の特徴を紹介する採用担当者向けのパンフレットを作成して発送し、採用企業への情報発信に努めた結果、4月から2月末まで本学学生を求める企業からの単独説明会申込数は107事業所であった。

2024年3月29日現在、2023年度の就職状況は就職率が91.2%(昨年同時期89.9%)であり、昨年度に比べて高くなっている。また、就職・進学率については93.1%である。

1. 企業等からキャリアサポートセンターに届いたオープンカンパニー及びインターンシップの情報をユニバーサルパスポート及び求人検索NAVIの「インターンシップ求人」にて学生へ周知した。講義やガイダンスでは、情報サイト会社からインターンシップの意義や申し込み方法等を説明していただき周知した。
2. 学内では、単独説明会の依頼があった企業による説明会を実施し、少人数ではあるが就職内定に繋げることができた。各イベントの実施にあたって、ユニバーサルパスポートやキャリアサポートセンターの掲示板、各学科教員からのチラシ配布によってに参加を促したが、想定以上に参加学生が少ない状況であった。

3. キャリアサポートセンターが導入している求人検索NAVIの個人（グループ）面談予約から申し込みのあった学生に対して、進路相談をはじめ面接の練習、履歴書添削などオンラインも活用して実施した。予約時間については学生の休憩時間を考え、昼休み時間にも対応できるよう工夫した。
4. 3年次のキャリア開発Ⅱでは、就職に対して実践的な講義を実施した。卒業生アンケートの意見から、学生時代に強化したい内容を外部講師に伝え、講義内容に取り入れた。
5. キャリアサポートセンター内に留学生コーナーを設置し、就職情報や就職に関する図書の貸し出しを行った。また、留学生を採用している企業に来学していただき、学内での単独説明会を実施した。就職活動の準備等についてのガイダンスも実施し、履歴書に記載する日本語や誤字等に関する練習用のプリントを用いて支援した。
6. キャリアサポートセンターが実施するイベントやセミナーについて学生課や留学生課へ情報提供を行い、各課と連携して学生支援に取り組んだ。

〈次年度への課題〉

1. キャリアサポートセンターに届くオープンカンパニー、インターンシップの情報が学生に伝わるよう、キャリアデザインⅡ・キャリア実践Ⅰの授業内で説明と周知を行う。
2. 学内での単独説明会参加の意義やメリットを伝え、説明会への参加人数を増やす。また、学生が参加しやすい日程を考え、コロナ前に実施していた学内面談会も企画する。
3. 就職支援の予約について学生へ周知徹底を行い、スムーズに対応できるよう取り組んでいく。
4. 次年度から3年次にキャリア実践Ⅰ（必修）とキャリア実践Ⅱ（選択）が開講となるため、選択科目であるキャリア実践Ⅱを履修してもらう工夫が必要である。
5. 留学生を採用できる企業の開拓及び学内での企業説明会の実施。ガイダンスの強化、留学生に特化したガイダンスを強化する。
6. 留学生にとっては、キャリアサポートセンターよりも留学生課からの連絡の方がスムーズにいくことが多いため、次年度も就職に関する情報提供について留学生課と連携していく。また、近年障害学生に対する支援が増えているため、次年度はより一層障害学生に対する支援を充実させる。

４．図書館の活用

図書館環境の充実

【所蔵図書の新陳代謝の促進】

〈今年度の取り組み状況〉

2023年度の蔵書冊数は247,239冊（内洋書38,200冊）、年間受入れ図書は1,583冊であった。学術雑誌については、所蔵雑誌種類846種（内外国雑誌396種）、年間受け入れ雑誌101種（うち外国雑誌5種）である。購入図書の選定にあたっては、教員や学生からの推薦・希望を受け付けることとし、教育研究に資する図書の充実などに努めている。また、図書の除籍や雑誌の購入継続・廃棄などに関しては、図書館運営・研究紀要編集委員会において審議されている。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

概ね順調な業務ができた。10号館図書館の閉館を含め、図書館の物理的な受入れ可能量があるので、昨年度に引き続き除籍・無償譲渡・廃棄を進めた。選択と集中を念頭に、適時適切に除籍を進める必要がある。

〈次年度への課題〉

選択と集中を念頭に、計画的な除籍作業や適切な資料管理に取り組む。

【図書館ホームページの更新とデジタルコンテンツの拡充】

〈今年度の取り組み状況〉

図書館ホームページの更新内容は、南あわじ志知キャンパス図書館のコンテンツ追加、高梁キャンパス館内Mapの修正、図書館ガイド・図書館利用案内(電子版)の刷新を行った。高梁キャンパス図書館の蔵書構築を大幅に変更し、所蔵館のデータ修正を行う事で、資料の所蔵場所検索を簡素化し、利用者の利便性を図った。外部からの攻撃を受けたため、学園内関係部署の協力を得ながら、セキュリティ対策の強化を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

図書館利用案内資料の電子化に積極的に取り組み、デジタルコンテンツを拡充することができた。

〈次年度への課題〉

外部からの攻撃を防ぐため、引き続き学園内関係部署の協力を得ながら、セキュリティ対策の一層の強化が求められる。今後も利用者のニーズに応じて引き続き、図書館ホームページの更新作業、蔵書構築の再検討を進めて行く。

【ラーニングコモンズ企画展示の実施】

〈今年度の取り組み状況〉

事業所、学科等との連携事業、交流事業、イベントと連動した企画展示の実施を行った。2023年度の企画内容は「雛祭り展示(4月)」「アニメーション文化学科 作品展(5月8日～6月9日)」「UNICEF東京事務所によるオンラインイベント(5月17日)」「うぇるふぇあ・障害者アート展(6/15～7/14)」「高梁市市内の小・中学生を招いたイベント(7月7日)」「認知症サポーター企画展示(7月26日～8月28日)」「旭川荘ギャラリーアート展(11月1日～11月30日)」である。また、企画展示に応じた図書館資料の展示を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

活動内容は、年々多様化しており、内容も充実してきているのは評価できる。企画展示に応じた図書館資料の展示を行うことで、資料の利用促進にも繋がった。ラーニングコモンズの活動が認知されていると判断できる。

〈次年度への課題〉

自主的で多様な活動を目指し、今後も新たな活動が展開できるように検討することが必要である。図書館資料の利用促進やラーニングコモンズの施設機能の活用を進める。

【その他】

〈今年度の取り組み状況〉

ビックリユース等図書館企画は、コロナ禍前の状態に戻し実施した。2023年度の総入館者数は45,450人（内訳：高梁キャンパス43,159人・南あわじ志知キャンパス1,457人・岡山キャンパス834人）であり、図書の貸出冊数は2,153点であった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

10号館図書館の閉館作業はあったが、図書館としてできることは可能な限り実施した。南あわじ志知キャンパスの総入館者数(前年比207.85%)、貸出冊数(前年比138.96%)は増加した。

〈次年度への課題〉

図書館システム、蔵書構築の更新を実施し、利用者サービスの向上と業務の効率化を図る。
図書館システムの更新が完了したため、運用を適切に行っていく。選択と集中を念頭に、物理的な受け入れ可能量をもとに紙媒体の除籍を進め、オンラインコンテンツへの移行も積極的に行う。

5．学修環境の整備

施設・設備の整備

1．安全性に配慮した環境整備

〈今年度の取り組み状況〉

1）和田町の学生駐車場出入口にミラーを設置した。
2）学園橋から8号館入口までの街路灯を水銀灯からLEDに交換した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

１）ミラーを設置したことで駐車場への出入りの際の安全性が向上した。
２）街路灯をLEDに交換したことにより、照度が上がり日没後の学生の通行の安全性が向上した。

〈次年度への課題〉

街路灯の設置がまだ充分ではないため、次年度も引き続き街路灯の交換、増設が必要である。

２．教育効果・学生の満足度向上に資する環境整備

〈今年度の取り組み状況〉

１）私立学校施設整備費補助金（ICT活用推進事業）を活用し、岡山キャンパスと南あわじ志知キャンパスのネットワークの見直し及び整備を行った。
２）令和４年度から導入したパソコンの必携化による教育効果を高めるため、私立大学等研究設備整備費等補助金を活用し南あわじ志知キャンパスの情報処理室のリプレイスを行った。
３）旧漁協の施設を改修し、農学部海洋水産生物学科臨海実習棟の整備を行った。
４）高梁市楢井サッカー場の人工芝張替え工事を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

１）令和4年度からのパソコンの必携化の導入と機器の老朽化による接続の遅延や不安定な状況が改善され、ネットワーク環境が向上した。
２）単にパソコンを配列した情報処理室ではなく、ノートパソコンと大型提示装置やタブレット等多様なICT機器を連携させることにより、アクティブラーニングが可能となった。また、備え付けのパソコンを学生が持つパソコンの標準より高スペックとすることで高いコンピュータ処理性能を必要とするデータ解析や画像処理等が可能となった。
３）令和５年４月に開設した海洋水産生物学科の実習が令和６年度から始まるにあたり、南あわじ市阿那賀にある旧漁協の建物を改修することで、目前が海、実習船も目の前という当該学科に最適の環境下に実習棟を整備することができた。
４）サッカー場の陥没箇所も修繕でき、学生が安全な環境で授業や課外活動を行うことが可能となった。

〈次年度への課題〉

臨海実習棟の建屋は完成したが、養殖に必要な屋外水槽設備の整備は間に合わず、次年度に行うこととなった。

３．省エネルギーに配慮した環境整備

〈今年度の取り組み状況〉

１）高梁キャンパス１４号館、南あわじ志知キャンパスの事務室の照明器具をLEDに交換した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

１）照明器具をLED化することで消費電力・光熱費の削減につながった。

〈次年度への課題〉

ほぼ終日点灯している照明器具をLEDに交換することで、消費電力・光熱費ともに削減できるが、南あわじ志知キャンパスのLED化が遅れていることが課題である。

Ⅳ．研究推進について

１．研究力の強化

〈今年度の取り組み状況〉

① 5月31日（水）に科学研究費補助金採択率の向上を目的として、「科学研究費補助金研究計画調書の書き方きほんの「き」」と題して講習会を行った。
② 8月26日（水）に科学研究費公募要領等説明会を開催した。

③ 令和5年度は、科学研究費は新規の応募が23件あり、新規採択件数は2件であった。新規応募に対する採択率は8.7%であった。なお、継続も含めた採択件数は15件であった。また、本学の教員が科学研究費の分担研究者として11件の研究が進められている。科学研究費補助金以外では、研究助成金・受託研究等14件が助成を受けて研究が進められている。
④ 学内共同研究費の配分については6件の研究について研究費を配分した。加えて、SDGs教育研究活動助成金2件、地域貢献教育研究活動助成金2件を助成した。
⑤ 研究部門自己点検・自己評価報告書を作成し、外部評価委員からの評価を受けた。
⑥ 令和5年度は全学で学術論文81件、雑誌投稿等7件、講演・口頭発表189件、著書・作品21件の研究成果が発表された。
⑦ 全教員が年2回のresearchmap更新を実施し、研究成果を発信した。
⑧ 3月14日（木）に順正学園学術研究交流会を開催して研究交流の推進を図った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

科学研究費は継続も含めた採択件数は15件であった。全体的には研究費の獲得も評価することができる。一方、新規の応募に対する採択率が8.7%と非常に低くなっている。令和5年度は、学術論文は81件であり令和4年度の82件とほぼ同じであったものの、講演・口頭発表は令和4年度の165件から189件へと増加している。今年度も活発な研究活動が行われたと評価できる。

研究部門自己点検・自己評価は評価報告書を作成し、外部評価委員からも評価をいただき、計画通りに実施できた。

順正学園学術研究交流会は、学園内の研究活動の情報共有と活性化に貢献していると高く評価できる。

〈次年度への課題〉

科学研究費補助金の新規採択率が8.7%と非常に低いことが課題である。科学研究費補助金採択率の向上を目的として、今年度開催した科学研究費補助金研究計画調書の書き方講習会の成果を検討し、次年度の方策を検討する。さらに、科学研究費公募説明会を充実させ、学内共同研究費の効果的配分を行うことにより、科学研究費補助金の採択数向上を目指す。

全教員が年2回のresearchmap更新を確実に実施し、研究成果を発信する。また、順正学園学術研究交流会の内容を充実させ、研究交流の推進を図る。

2．社会実装の推進

〈今年度の取り組み状況〉

① それぞれの教員が自治体・産業界・他大学等と産学官連携研究を推進しているが、大学、学部単位での連携は出来なかった。
② リサーチパーク研究発表会は1件の発表を行った。
③ 地域貢献教育研究活動助成金2件及びSDGs教育研究活動助成金2件に研究費を配分し、地域志向研究を推進した。
④ 地域連携研究および地域社会の課題解決を目指した学科単位での研究は一部の学科にとどまった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

大学、学部単位での産学官連携研究ができなかった。また、リサーチパーク研究発表会での発表は1件にとどまった。学外との研究連携は個々の教員の連携にとどまっており、大学全体としての連携が出来ていないことが課題である。

地域貢献教育研究活動助成金及びSDGs教育研究活動助成金を充実させ地域志向研究を推進することは出来たが、さらに地域連携研究および地域社会の課題解決を目指した研究を推進する必要がある。

〈次年度への課題〉

大学あるいは学部単位での産学官連携研究の推進が課題である。学部の専門性を活かした研究会を設置し、共同研究を実施する体制を整備する必要がある。リサーチパーク研究発表会などによる学外との研究連携は引き続き推進する。

地域貢献教育研究活動助成金及びSDGs教育研究活動助成金による地域志向研究を推進するとともに、地域と連携した研究を推進する。

3．研究倫理・コンプライアンスの充実

〈今年度の取り組み状況〉

① 5月31日（水）にコンプライアンス教育・研究倫理教育を実施した。今年度も研究倫理違反はなかった。
②「コンプライアンス教育・啓発活動実施計画」に基づき研修会を開催すると共に、学長が研究規範の遵守等についてメッセージを発信し、コンプライアンス違反ゼロを継続した。
③ 動物実験の自己点検・自己評価を行い、9月5日（火）に動物実験外部検証現地個別相談を受けた。その結果を受けて吉備国際大学動物実験規程を改定した。
④ 11月7日（火）に動物実験に関する教育を行うとともに、実験動物慰霊祭を開催した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

コンプライアンス教育･研究倫理教育については、研修会を開催すると共に、学長が研究規範の遵守等についてメッセージを発信した。また、学生に対しては演習科目等の授業で研究倫理教育を行うことをシラバスに記載し、演習科目等において各学科が研究倫理教育を行った。コンプライアンス教育と研究倫理教育は適切に推進できていると評価できる。

動物実験については、令和6年度に外部検証を受審するための準備を行った。その際、規程の不備があったため、動物実験規程を改定した。

〈次年度への課題〉

コンプライアンス関連規程および研究倫理関連規程の周知と違反の予防を図る。研究倫理教育を一層充実させ、倫理違反ゼロを継続する。また、コンプライアンス教育・啓発活動を充実させ、コンプライアンス違反ゼロを継続する。

令和5年度動物実験自己点検・自己評価書を作成し、令和6年度に日本実験動物学会の外部検証を受審する。

4．安全への配慮等

〈今年度の取り組み状況〉

① 化学物質についてのリスク管理を徹底し、事故等の未然防止に努めた。
② 毒劇物、麻薬類、放射性物質等について、法令に基づき管理を徹底した。
③ 組換えDNA実験安全管理規程の確実な遵守を呼びかけ、DNA実験等の安全管理に努めた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

化学物質の実験上の安全への配慮については、環境マネジメントに一環として化学物質の管理を行っている。

組換えDNA実験については、組換えDNA実験安全管理規程の確実な遵守を呼びかけた。

〈次年度への課題〉

実験の安全管理については、法令遵守を基本として、徹底したい。

Ⅴ．大学運営について

1．持続可能性の追求

ＳＤＧ’ｓ達成を目指した活動の推進

〈今年度の取り組み状況〉

① 教員の研究活動をSDGsに紐付けし、持続可能性に寄与する研究の推進を目指す予定であったが、実施することが出来なかった。
② SDGsを指向した教育研究を推進するため、SDGs教育研究活動助成金で2件の研究を助成した。研究成果は「吉備国際大学研究部門自己点検・自己評価書」に掲載した。
③ 大学の組織活動をSDGsのゴールに紐付けする予定であったが、実施できなかった。
④ 全ての授業内容をSDGsの17の目標に紐付けしてシラバスに記載し、持続可能性に寄与する人材を育成している。
⑤ 吉備国際大学のSDGsへの取り組みについてはホームページに掲載しているが、SDGs活動の評価システム及び情報公開システムの構築は出来なかった。

⑥ 8月2日(水)、3日（木）に開催された「おかやまSDGsフェア」に出展し、本学の取り組みを紹介した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

今年度は研究活動についてSDGsの17の目標との紐付けを行う予定であったが、実施することが出来なかった。SDGs教育研究推進経費によるSDGs教育研究の推進は2件を助成したが、教員へのSDGs推進に対する意識の向上が課題である。

全ての授業科目について、各授業がSDGsのどのゴールに関係しているのかについて紐付けを行い、シラバスに掲載した。学生教育においてSDGsを意識した教育ができたと考えられる。

大学の組織活動のSDGsへの紐付けも実施することが出来なかった。吉備国際大学のSDGsへの取り組みについてはホームページに掲載しているが、SDGs活動の評価システム及び情報公開システムの構築は出来なかった。一方、「おかやまSDGsフェア」に出展し、本学の取り組みを紹介することが出来た。

〈次年度への課題〉

SDGs活動に関する情報公開ができていない。「サステナビリティレポート」の発行を目指すとともに、ホームページでの情報公開と情報発信を行う。

個々の研究活動をSDGsに紐付けし、持続可能性に寄与する研究の推進を目指す。また、大学の組織活動をSDGsのゴールに紐付けし、全ての活動を持続可能性に向ける。

引き続き、全ての授業においてSDGsを意識した持続可能性に寄与する人材を育成する。

環境マネジメントの推進

〈今年度の取り組み状況〉

① 年平均1%以上のエネルギー消費量の削減を目指して、省エネ活動を行った。
② 学内照明のLED化の年次計画を作成し、LED化を実施した。
③ 啓蒙活動により省エネ活動を実施した。
④ 2030年温室効果ガス排出量-46%(2013年度比)に向けた取組を行っている。
⑤ EMS活動計画の確認、環境目標設定の明示、前年度取り組み状況の報告等、EMS委員による情報交換を行った。教授会やガルーン掲示板を通じて、全学的にEMS活動の周知と取り組みの推進、活動実績の公表を行った。
⑥ 環境負荷項目のデータ収集と解析、各学科の活動把握（環境教育，環境美化，化学物質保管状況）、環境目標設定に対する達成状況の算定を行った。
⑦ 海洋水産生物学科が設置されたことに伴い、南あわじ志知キャンパスにおけるEMS活動の推進と情報収集の継続的取り組みを行った。
⑧ オリエンテーションの時に新入生に対して環境マネジメント教育を実施した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

環境マネジメントについては、例年通りデータの収集と解析を行った。電力消費・廃棄物発生量・印刷用紙使用量の増加が確認されるなど、目標未達成の状況が見られた。

新入生に対するEMS教育は継続して実施しており、環境意識の醸成に繋がっていると思われる。

〈次年度への課題〉

環境マネジメントの取り組みを継続して推進し、年平均1%以上のエネルギー消費量の削減を達成する。

南あわじ志知キャンパスの環境マネジメント活動の推進と情報収集の継続的取り組みを行っていく。

新入生に対するEMS教育を継続して行う。

２．職能開発の強化

ＦＤ・ＳＤの充実

〈今年度の取り組み状況〉

建学の理念に基づき、教育目的および教育目標（ブランドビジョン）を具現化すべくFD･SDに取り組んでいる。授業の内容および方法の改善を図り、教育研究活動等を適切かつ効果的に推進するための組織的な研修機会を設けている。今年度は以下の通り研修会を開催し、教職員の資質向上と能力開発を進めてきた。

1. 全学FD･SD研修会

［日時］

令和5年8月23日(水)14時00分～15時30分（春学期）

［方法］

Microsoft Teamsによるオンライン開催

［対象者］

吉備国際大学に所属する教職員及び大学院博士後期課程在学生

［目的］

社会で求められる汎用的な能力・態度・志向等のジェネリックスキルを測定・育成するため、PROGテストを今年度から導入し、学修成果可視化に取り組んでいる。7月には学生らに対して結果のフィードバックが行われている。本研修会では、PROGテストの内容および詳細な分析結果のフィードバック等に関して教職員らが知識を身につけ、理解を深め、本学の教育目標（ブランドビジョン）の達成に寄与し、今後の教育に役立てることを目的とする。

［内容］

講演テーマ　学修成果可視化のためのPROGテストの活用

講師　石川純一 氏（株式会社リアセック キャリア総合研究所 主任研究員）

2. 学科別FD研修会

［日時］

令和5年10月～令和6年3月（秋学期）

［方法］

研修内容は各学科のFD・SD推進委員が学科長と相談しながら検討し、各学科の状況を鑑み学科の特色に応じたFD研修会を以下の手順に沿って実施

(1) 実施案の提出

研修内容の決定後、各学科のFD・SD推進委員は同委員会へ実施案を提出

(2) 学科別FD 研修会の実施

実施案に沿って学科別FD研修会を開催

(3) 実施報告の提出

研究会の実施後、各学科のFD・SD推進委員は同委員会へ実施報告を提出

欠席者に対しては動画資料や資料配布等の代替措置を講じ、全教員が参加できるように配慮

［対象者］

各学科の教員

［目的］

学科別FD研修会を開催し、学科の特色に沿った内容について組織的な研修を行い、教育あるいは授業内容および方法等の改善を目的とする。

［内容］

各学科の実施内容は以下の通り。

・経営社会学科

テーマ　教学マネジメントセミナー：改革を推進するためのマネジメントとリーダーシップ

・スポーツ社会学科

テーマ　基礎演習改善の評価について

・看護学科

テーマ　最新の看護師国家試験動向と学生対応について

・理学療法学科

テーマ　授業に適応しない学生や、学修者として適性の低い学生への対応

・作業療法学科

テーマ　授業改善のための授業分析

・心理学科

テーマ　生成AIの理解と授業での活用

・アニメーション文化学科

テーマ　高校デザインの現状～アニメーションの制作の導入

・地域創成農学科・海洋水産生物学科

テーマ　学生満足度向上に向けた学生配慮と教育・研究の両立方法を学ぶ

・外国学科
テーマ　スタディーアブロード事前指導における学生らの留学準備状況の把握、発表およびグループワーク等のアクティブラーニングの向上

以上の通り研修会を実施した。このほか、SD研修の一環として研究推進部門が中心となりコンプライアンス教育・研究倫理教育研修会を開催した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

春学期には全学FD･SD研修会を開催し、秋学期には学科別FD研修会を開催した。全学FD･SD研修会では、全学が抱える共通課題を取り上げ、学科別FD研修会では、学科の特色に応じた課題を取り上げ、組織的な研修機会を設け、教職員の資質向上と能力開発に努めている。

全学FD･SD研修会では、本学は学修成果可視化のためPROGテスト（社会で求められるジェネリックスキルを測定するためのテスト）を今年度から実施していることから、この分析結果およびフィードバック等について、教職員が知識と理解を深め、今後の教育に役立てている。

学科別FD研修会では、学科によって専門分野が異なることから、学科の特色に応じた研修会を開催した。各学科のFD・SD推進委員が学科長と相談しながらテーマ、内容、方法等を検討し実施している。実施案および実施報告書はFD・SD推進委員会で情報共有し、他学科教員も当該学科の研修会へ参加できるようにしている。

以上の通り、教職員の資質向上と能力開発に資する研修会を実施できた。

〈次年度への課題〉

建学の理念、教育目的および教育目標(ブランドビジョン)を実現するために、FD・SDを充実していく。職能開発の強化については、FD・SD推進委員会が中心となって、教育研究および授業の改善、本学の特色である地域連携・地域貢献ならびに国際化、大学運営に必要な知識の習得と情報共有等に関し、全学あるいは学科別の組織的な研修の機会を設け、教職員の資質と能力の向上に取り組んでいく。

3．人権・安全への配慮の充実

労働環境の整備、充実

〈今年度の取り組み状況〉

・公益通報等
公益通報に関してコンプライアンス窓口を設け、通報者に不利益が生じないよう公益通報者保護の制度を整備し適切に機能させている。

・職場環境セルフチェック
職場に健康管理・安全衛生上の問題がないかどうかをチェックする職場巡視について、衛生委員会においてチェックリストを準備し、個人研究室を中心に自主的にチェックしていただいた結果に基づき環境改善の参考とする取り組みを行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

「公益通報等に関する規程」に則り、コンプライアンス窓口を法人本部総務部総務課及び大学庶務部庶務課に設置して体制を整備している。なお、今年度に関しては窓口への通報はなかった。

〈次年度への課題〉

引き続き、公益通報に関する体制を整備し適切に機能させる。また、そのほか労働環境の整備、充実に努めていく。

職場巡視について、個人研究室を中心にセルフチェックを実施しているが、共有部分のチェック体制の確立が課題である。

人権関連の研修の充実

〈今年度の取り組み状況〉

・人権教育推進
岡山県大学人権・同和教育懇談会の書面による研修会に参加した。資料が取りまとめられ次第、本学人権教育委員会で情報共有を図り、岡山県内の大学の取組状況結果をもとに本学の人権教育について見直し等を行う予定である。

・人権教育研修会（学生対象）
学生を対象とした人権教育にかかる研修会については、来年度から実施される全学空きコマを活用して、SNSの誹謗中傷などをテーマに検討を進めている。

・キャンパスハラスメントの防止
例年通り、ポスターを作成して啓発活動を実施した。
また、教職員一人ひとりがハラスメントへの理解を深め、学内全体でハラスメント行為を発生させない環境づくりに努めるため、全教職員を対象とした「ハラスメント防止研修会」を法律事務所の弁護士を講師として招き、令和５年８月３０日（水）に開催した。

・障がいのある学生への配慮
「合理的配慮ハンドブック（独立行政法人日本学生支援機構）」を教職員に配布し、障がいのある学生への配慮と支援方法の周知徹底を図った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

人権教育については、教職員に対しては例年通り実施できた。学生の人権教育研修会は、コロナ禍でしばらく実施できていなかったため、来年度の実施に向けて準備を進めている。
キャンパスハラスメントについても例年通り啓発活動を行うとともに、相談事例についても適切な対応を行った。

〈次年度への課題〉

人権に関して配慮が必要な事項が多様化する中、学生及び教職員に対して適切な教育、研修が必要となってきている。本学でも障がい学生、LGBTQ等の学生、外国人留学生など、多様な学生を受け入れており、必要な対応ガイドラインなどの整備や人権教育により、差別のない環境づくりが今後の課題となる。
また、キャンパスハラスメント防止研修会は全構成員を対象とするが、相談員を対象とする相談対応法などの研修の実施を検討する。

４．法人部門との連携の円滑化

管理運営機関の連携と相互チェック

〈今年度の取り組み状況〉

理事会には学長が理事に就任し、また評議員会には副学長、学部長、附属図書館長等の大学教職員が評議員に就任しており、学園の意思決定において大学の意見を述べている。
また、学園協議会により設置校間に共通する重要事項を協議し相互の連携強化と業務の円滑化を図っている。大学協議会により大学の教学に関する重要事項の決定について理事会との意見調整を行い意思決定の円滑化を図っている。事務部門においては、事務連絡会議により理事長、学長、校長出席のもと学園全体の全事務部門が情報共有を行い業務の円滑化を図っている。
さらに、これらの理事会、評議員会、学園協議会及び大学協議会等の組織構成により相互チェックの体制を整備し、大学から法人経営に参画するなど相互チェック機能を機能させている。
監事は理事会、評議員会に出席してその運営を監査するとともに、法人の業務若しくは財産の状況又は理事の業務執行状況について意見を述べている。また、ガバナンス・コードにもとづき常勤監事１名を置き、会計監査や業務監査を実施してその結果を理事長に報告している。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

理事会、評議員会を定例、臨時に開催しており、学長は理事として、副学長、学部長等は評議員として、それぞれ出席し学園の意思決定に大学の意見を述べている。また、５月と12月に学園協議会を開催し、設置校間に共通する議題を協議するとともに連携強化を図っている。事務部門では、理事長出席のもと毎月、事務連絡会議を開催して情報共有を行い業務の円滑化に努めている。さらに、これらの会議体を適切に運営することで相互チェック機能を果たしている。
監事は理事会、評議員会に出席するとともに、常勤監事１名は、法人本部に週２日出勤して、監査計画にもとづき監査を行っている。監査にあたっては内部監査部門である法人本部総務部や監査法人と連携して業務にあたっている。

〈次年度への課題〉

引き続き、法人レベル、大学レベルで使命・目的の達成に向けて意思疎通ができるよう管理運営組織の体制を整備し機能させる。また、経営部門と教学部門との連携強化を図るとともに、相互チェック体制を整え機能させていく。

5．財政基盤の確立

中期的な計画に基づく財務運営と安定した財務基盤の確立

〈今年度の取り組み状況〉

今後の学園の財務状況の推移を把握するため、決算にもとづき現状に即した中期財務計画へと見直しを行った。

収支バランスを確保するため学納金収入の増加、経費の削減に積極的に取り組んでいる。令和６年度には吉備国際大学心理学部心理学科、保健医療福祉学部作業療法学科及び理学療法学科を改組し、新たに人間科学部人間科学科を開設するなど改組を含めた収支改善にも取り組んでいる。

また、吉備国際大学高梁キャンパスの高梁市・順正学園特別奨学金制度や、九州保健福祉大学及び九州保健福祉大学総合医療専門学校の令和６年度の名称変更を広報し学生定員確保に努めている。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

令和４年度決算をもとに中期財務計画を見直し、学園の今後の財政状況の推移を把握している。

また、収支改善の取り組みとして、令和６年度にむけて各設置校において様々な改組等に着手するとともに、積極的に広報活動を展開し、定員確保を目指して学生募集に取り組んでいる。（吉備国際大学では人間科学部開設、看護学部への改組、九州保健福祉大学では九州医療科学大学への名称変更、スポーツ健康福祉学科の救急救命コース等開設、通信教育部社会福祉学部スポーツ健康福祉学科開設及びハイブリッドコース開設、九州保健福祉大学総合医療専門学校では九州医療科学大学専門学校への名称変更、そのほか応援学費や奨学金制度など）経費削減についても徹底しているが、令和６年度に向けた様々な取り組みのため、吉備国際大学農学部海洋水産生物学科の臨海実習棟改修、楢井グランド改修、九州保健福祉大学１号棟他改修、九州保健福祉大学総合医療専門学校改修など単年度の特別な支出が発生している。これらもまた中・長期的に見て必ず学生募集等に良い効果をもたらすものであり、今後一層、教育充実や広報活動強化を図っていく。

〈次年度への課題〉

引き続き、学園の財政状況について的確な現状把握に努め、実態に即した中期財務計画へと見直しを行い、計画にもとづき、安定した財務基盤の確立を目指して取り組んでいく。外部資金の獲得や、人件費及び経費の削減も積極的に推進するが、収支バランスを確保するためには、全設置校において学生定員充足による学納金収入の増加が喫緊の課題である。

6．適正な会計処理の実施

職員の知識向上

〈今年度の取り組み状況〉

８月に広島で開催された日本私立大学協会中国・四国支部経理部課長相当者分科会に会計担当者が参加し他大学の担当者と協議を行った。また、オンラインで開催された日本私立大学協会の全国レベルでの経理部課長相当者研修会に参加した。

大学の事務職員全体に向けてはインボイス制度の説明会を行い、本学での会計処理上のルール等について周知を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

他大学と協議することで新たな情報を得ることができ、本学の会計処理方法改善の参考となった。また、オンライン研修の受講により会計担当者個々の知識が深まった。

事務職員に向けてインボイス制度の説明会を行ったことでより、処理方法の徹底ができ、起票時の課税区分については、より正確な処理が行われるよう改善された。

〈次年度への課題〉

より適正なミスのない会計処理を行うためには、会計担当職員だけでなく、全職員がある程度の知識を身につける必要があるが、現状では不充分なため研修をする必要がある。

会計監査の厳正な実施

〈今年度の取り組み状況〉

１）監査法人による会計監査

５月から３月までの間、１１日の期末・期中監査、高梁キャンパスでの実査を含めた監査法人による会計監査が行われた。この中では理事長と監事への面談及び監事への監査概要報告も行われた。

２）公的研究費の監査

常勤監事が公的研究費全件について、稟議書・証憑書類の監査を実施し、監査結果が３月２７日開催の大学協議会で報告された。また、内部監査部門である総務部が、４件を抽出し特別監査を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

監査法人による監査、公的研究費の監査を滞りなく行い、適正な会計処理を行った。

〈次年度への課題〉

次年度も引き続き、監査法人及び監事に会計監査を継続的に実施する。

諸規定に則った適正な会計処理

〈今年度の取り組み状況〉

令和５年度の学校法人全体の予算編成方針に従い、大学においても各部門で目的別に積算し編成した予算をシステムに登録し、効果的な予算執行管理を行った。

会計処理を行うにあたり研究費の使用マニュアルを更新し、学校法人会計基準、順正学園経理規程に沿った会計処理のルールの共通認識の徹底を行った。また、会計処理に関する各部門からの相談には、監査法人等に確認の上対応した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

監査法人、監事、内部監査部門の監査結果報告に記されているとおり、全体的に適正な会計処理を行った。

〈次年度への課題〉

教職員に対して、ガルーンを活用し、会計処理に関する情報提供を綿密に行う必要がある。

Ⅵ．内部質保証について

１．内部質保証体制の確立

〈今年度の取り組み状況〉

(1) 中期目標・中期計画を起点としたPDCAサイクルの実現

令和5年3月に、令和5年度から令和9年度までの第3期中期目標・中期計画書を策定し、実行に移した。第3期中期目標・中期計画書の策定にあたっては、全面的に様式の見直しを実施し、大学機関別認証評価の評価項目に沿った項目で目標を設定した。また、中期目標・中期計画を各年度の事業計画に落とし込み、

各年度事業計画（P）⇒計画実行（D）⇒自己点検・自己評価（C）⇒改善指示（A）⇒翌年度事業計画策定（P）

というPDCAサイクルを実現し、内部質保証体制の確立を図った。

さらに、「キックオフミーティング」と「自己点検・自己評価委員会総会」を統合して、「自己点検・自己評価会議」として新たに実施し、学科・部門等の発表と質疑応答、外部評価委員との意見交換などを実施し、外部評価委員の評価を受けた自己点検・自己評価報告書と自己点検・自己評価会議の議論をもとに、毎年の事業計画を立案するという新たなしくみを構築した。

(2) 教学IRの取組み

令和4年1月に「吉備国際大学内部質保証推進規程」ならびに「吉備国際大学内部質保証の方針」を定め、内部質保証システム体制を構築した。さらに令和4年2月には「吉備国際大学アセス メントプラン」とその実行性を高めるための「アセスメント実施計画」を策定したが、点検項目の追加や実施時期の見直しを行い、内容の充実を図った。アセスメントプランの実施にあたっては、教育イノベーション課を中心に、計画に基づき各種アンケート、データの収集・分析等を実施し、担当委員会での検証を経て内部質保証委員会に報告した。すでに、授業アンケート、卒業時、入学時、卒業生、就職先の各アンケート、学生の学修及び生活に関するアンケートを実施し、その他各種データの分析結果も併せて、8月、11月に委員会に報告を行った。これらの結果から、必要な改善指示が内部質保証委員会から各学科、担当委員会に対して発出され、改善計画が報告されている。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

中期目標・中期計画を起点とした毎年度の事業計画の立案、さらには自己点検・自己評価による事業計画の見直し、というPDCAサイクルが構築された。

またアセスメントプラン実施計画に基づく点検と検証が計画通り実行され、内部質保証委員会による改善指示と改善計画策定という教学マネジメントが機能し、内部質保証の体制が確立しつつある。

〈次年度への課題〉

(1) アセスメントプランによる教育改善の実現

「吉備国際大学アセスメントプラン」に基づく「アセスメントプラン実施計画」は、見直しを行いながら、確実に実施できるようになっている。しかし、検証結果から導き出された“課題”を“改善”へと繋げるための改革のエンジンがまだまだ不十分だと考える。各委員会での議論を活性化し、内部質保証委員会の改善指示のもと改善案を策定し、必ず実行に移す。

(2) 教学IRデータの情報共有

収集したデータを共有フォルダ等に蓄積し、各学科や部局がカリキュラムや教育改善を検討する際に、いつでもデータが取り出せるよう情報共有する仕組みを準備中である。

【参考資料】内部質保証委員会の審議状況（令和5年度）

第1回（5/19）
・令和4年度教職課程自己点検評価報告書について
・令和4年度自己点検・自己評価報告書について
・令和5年度事業計画（案）について

第2回（6/ 7）
・理学療法学科並びに作業療法学科の「令和5年度教員資格及び教育内容等の自己評価書」の評価について
・令和5年度の退学者対策について

第3回（7/ 5）
・吉備国際大学の改組等について

第4回（8/ 2）
・情報の公表に伴うガバナンスコード実施状況報告書について
・保健医療福祉学部における国家試験対策の報告について
・2023年度学生生活等に関するアンケートの実施について
・学修成果可視化に関するデータの学科での検討結果報告について
・2023年度春学期の入学時アンケートの実施結果について
・2023年3月の卒業時アンケートの実施結果について
・アセスメントプランに基づく学修成果の可視化について
①学位授与率の推移　②国家試験合格率の推移　③中退率及び中退理由の推移　④入学前教育教科別全体実績について
・2023年度ジェネリックスキルテスト(PROGテスト)の実施結果について

第5回（8/21）　・ガバナンスコードの実施状況報告書（案）について
第6回（10/4）　・アニメーション文化学部アニメーション文化学科のカリキュラム変更に伴う吉備国際大学学則の一部変更について
第7回（11/8）　・心理学研究科博士（後期）課程のカリキュラム変更に伴う吉備国際大学大学院学則の一部変更について
・通信制心理学研究科博士（後期）課程のカリキュラム変更に伴う吉備国際大学大学院（通信制）規程の一部変更について
・学修成果可視化に関するデータの学科での検討結果報告について
・アセスメントプランに基づく各種データ集計結果の報告について
①2020年度入学生における入試制度の妥当性の検証について
②2023年度の入学時アンケートの実施結果について
③2023年3月及び9月の卒業時アンケートの実施結果について
④入学時アンケートと卒業時アンケートのDP達成度の比較について
⑤2023年度の卒業生・就職先アンケートの実施結果について
⑥2023年度教養科目履修率について
第8回(12/11)　・農学部地域創成農学科のカリキュラム変更に伴う吉備国際大学学則の一部変更について
・令和５年度自己点検・自己評価の実施について

Ⅶ．地域連携・地域貢献の推進について

１．地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

① 「地域連携・地域貢献の基本方針」を基にして、全学部、全学科が地域連携活動及び地域貢献活動に取り組んだ。
② 高梁キャンパス、南あわじ志知キャンパス、岡山キャンパスの各地域連携センター間の連携強化、3キャンパスの地域連携センターを統括する「地域貢献推進センター会議」を定例開催（第1水曜日）し、各キャンパスの地域連携、地域貢献の取り組みに関する情報共有をきめ細かく行った。
③ 「地域貢献教育研究活動助成金」により、教員の地域貢献活動を支援した。令和5年度は2件の地域貢献教育研究活動に対して助成した。
④ 自治体、産業界と連携協力協定は締結に至らなかった。
⑤ ボランティアセンターを始め、各教員、学生サークルがボランティア活動に参加した。
⑥ 高梁市、高梁商工会議所と産・官・学連絡会議を2ヶ月に1回開催した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

地域貢献推進センター会議を毎月開催し、各キャンパスの地域連携、地域貢献の取り組みに関する情報共有をきめ細かく行うことができたが、各キャンパス地域連携センターの活性化が課題として残った。
地域貢献教育研究活動助成金により、教員の地域貢献活動を支援することが出来た。自治体との間で新規の連携協力協定は締結に至らなかった。
ボランティアセンターを始め、各教員、学生サークルがボランティア活動に参加した。多くの地域連携・地域貢献活動が行われているが、活動の整理が必要である。
高梁市、高梁商工会議所開催している産・官・学連絡会議により、情報交換が出来ている。

〈次年度への課題〉

引き続き「地域連携・地域貢献の基本方針」を基にして、全学部、全学科が地域連携活動及び地域貢献活動に取り組む。地域貢献教育研究活動助成金は令和6年度も継続し、教員が担う地域貢献活動の活性化を目指す。
多くの地域連携・地域貢献活動が行われており、活動結果報告してもらっているが、活動の整理が出来ていないことから、次年度は活動の整理が必要である。
地域連携・地域貢献活動の活性化のために、地域のニーズと大学のシーズを一致させる仕組みを検討する必要がある。

２．大学の持つ知の地域への還元

〈今年度の取り組み状況〉

① 高梁キャンパスで開催された「公開講座まちなかゼミナール」については、高梁・岡山キャンパス所属の教員により、前期8講座、後期8講座、計16講座を開催した。南あわじ志知キャンパスで開催された「地域創成生涯学習講座」は4講座を開催した。大学全体で計20の公開講座を提供した。
② 出張講義等については、出張講義が可能なリストを作成しホームページに公開しており、高等学校等からの依頼の都度対応している。
③ 学部単位でのフォーラム、講演会等の開催を目指したが、今年度は開催できなかった。
④ 大学コンソーシアム岡山の各事業を通じた地域連携・地域貢献活動としては、吉備創生カレッジへの講座の提供、「日ようび子ども大学」へのブース出展などを行った。
⑤ 第29回吉備国際大学英語スピーチコンテストを開催した。今後も国際大学として地域の高校生の皆さんに英語学習の成果を披露する場を提供する。
⑥ 大学公式ホームページを改善して地域連携・地域貢献活動を掲載したが、地域連携に関する情報発信欄を設置することが出来なかった。
⑦「地域連携・地域貢献活動事例集」を500部作成し、地域連携・地域貢献活動報告会で配付した。今後は高等学校等に配付する予定である。また、デジタル冊子を大学ホームページに掲載した。
⑧ 令和6年2月10日（土）に吉備国際大学地域連携・地域貢献活動報告会を開催した。参加者は56名であった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

公開講座の開催、出張講義については計画通りに開催することが出来た。大学の持つ知の社会への還元については評価できる。一方、学部単位でのフォーラム、講演会等は開催できず、地域貢献が教員個々の活動に留まっている。

大学コンソーシアム岡山の各事業を通じた地域連携・地域貢献活動としては、吉備創生カレッジへの講座の提供、「日ようび子ども大学」へのブース出展などを行った。

高大連携についても出張講義を活用した出前授業、英語スピーチコンテストの開催により地域の高校生の支援が出来ている。

情報公開については、吉備国際大学地域連携・地域貢献活動報告会を開催した。また、大学公式ホームページを改善して地域連携・地域貢献活動を掲載したが、地域連携に関する情報発信欄を設置することが出来なかった。加えて、「地域連携・地域貢献活動事例集」を500部作成した。

〈次年度への課題〉

公開講座の開催等、大学の持つ知の社会への還元は出来ているが、教員個々の活動が中心であることから、大学全体及び学部としての講演会等の開催が課題である。

また、地域連携・地域貢献活動は活発に行われているが、情報の整理と情報公開に課題がある。また、ホームページ等を活用した情報公開が出来ていないことから、今後より効果的な情報公開方策を検討する。

本年度は「地域連携・地域貢献活動事例集」を作成すると共に、吉備国際大学地域連携・地域貢献活動報告会を開催した。次年度以降も開催する予定である。

３．地域貢献人材の育成

〈今年度の取り組み状況〉

① 学科専門科目の中での、地域課題解決人材を育成する授業の開講は出来なかった。
② 地域課題解決の担い手を養成・輩出する「地域貢献人材育成プログラム」の開設を目指したが出来なかった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

学科専門科目の中での、地域課題解決人材を育成する授業の開講は出来なかった。また、地域課題解決の担い手を養成・輩出する「地域貢献人材育成プログラム」の開設も出来なかった。

〈次年度への課題〉

地域課題解決の担い手を養成・輩出する「地域貢献人材育成プログラム」の開設を目指す。

Ⅷ．国際化の推進について

１．国際化に向けた科目内容の充実

〈今年度の取り組み状況〉

１．国際化に向けた英語学修の充実と異文化・国際事情理解の推進
① 2022年度から全学共通教養科目として導入した「人間力育成科目群(きびこく学、SDGs概論、グローバルスタディーズ入門、課題解決演習)」を引き続き実施した。
② 今年度は複数のネイティブスピーカー(外国学部専任教員と非常勤講師)による英語教育(必修3科目、選択3科目)を実施した。
③英語以外の外国語や文化を学ぶ科目として、「中国語と中国文化Ⅰ・Ⅱ」、「フランス語とフランス文化Ⅰ・Ⅱ」、「ドイツ語とドイツ文化Ⅰ・Ⅱ」を開講した。
２．海外留学・短期研修の促進
① 海外留学・短期研修については、昨年同様主に外国語学部の学生を対象とするプログラムを実施した。
３．留学生に対する学習支援の充実と生活環境の整備
① 留学生に対しては、正課の日本語関係科目のほかに春学期・秋学期に「日本語能力試験N2対策講座」を毎週2コマ開講して日本語の学修支援を実施した。また、ラーニングサポートセンターでは、毎月「おしゃべりカフェ」を開催して、日本人学生と留学生が自由に話し合い国際交流を深め、グローバルな視野で考える力を育んでいる。
② 生活基盤の安定化を図るための種々の支援(市民生活・住宅・アルバイト情報の提供等)を行った。
③ 留学生の母国語対応による支援体制としては、留学生課に中国、韓国、スリランカ国籍の職員を配置し、留学生の母国語対応を行った。
４．国際社会で活躍できる職能教育と留学生に対する就職支援
① 令和5年10月に文部科学省の「留学生就職促進教育プログラム認定制度」に、本学の「KIUグローカル人材養成留学生就職促進プログラム」が認定された。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

１．国際化に向けた英語学修の充実と異文化・国際事情理解の推進については、英語学修を中心として、複数の言語や文化について学ぶことができる教養科目群を開講していることは評価できる。ただ、必修科目を除いて履修者が少ないため、今後積極的に取り組む学修態度の涵養が必要である。
２．海外留学・短期研修の促進については、外国語学部の学生を対象とするプログラムが多く、受け入れ人数的にも他学部の学生参加が限られる状況であり、今後は全学的に参加が可能なプログラムの促進を図る必要がある。
３．留学生に対する学習支援の充実と生活環境の整備については、種々の日本語学修の機会を用意し、留学生の日本語能力の向上に努めていることは評価できる。また、生活基盤の安定化を図る各種の支援についても評価できる。今後は、留学生のニーズを把握し、的確な情報提供を促進する必要がある。
４．国際社会で活躍できる職能教育と留学生に対する就職支援については、文部科学省の「留学生就職促進教育プログラム認定制度」に、本学の「KIUグローカル人材養成留学生就職促進プログラム」が認定されたことは評価できる。今後の活用が期待される。

〈次年度への課題〉

１．国際化に向けた英語学習の充実と異文化・国際事情理解の推進については、外国語学部以外の学部(高梁キャンパス・南あわじ志知キャンパス)の英語教育については、卒業生のアンケートにおいても「十分身についていない」という自己分析が多くなっているため、2022年度導入の教養科目における英語の必修化、ネイティブスピーカーによる英語授業内容の充実化を図るとともに、英語の外部標準テストの導入も検討したい。また、本学の教育の特色である「地域連携・地域貢献」と「国際化」を軸としたグローカル教育プログラムを検討する。
２．海外留学・短期研修の促進については、外国語学部の学生を対象とするプログラムが多く、受け入れ人数的にも他学部の学生参加が限られるため、今後は海外留学・短期研修プログラムを充実させ、外国語学部以外の学生の参加が可能なプログラムの促進を図る必要がある。合わせて短期留学・研修先の確保及び参加者の募集方法を検討する必要がある。また、外国語以外の学部において、TOEIC Program IPテストの導入を検討し、海外留学に向けた英語力向上の意欲を高める。

３．留学生に対する学修支援の充実については、日本語能力が十分でない学生のための補習授業等の充実と参加率の向上を図る。生活環境の整備については、生活基盤の安定化を図る支援(市民生活・住宅・アルバイト情報の提供等)の促進を図る。また、留学生の母国語対応による支援体制の充実を図るとともに、引き続き留学生のニーズを把握し、学生が求める情報を提供していきたい。また、留学生の母国語対応による支援体制としては、今後は、他国(インドネシア、ベトナム、ネパール等)の言語への対応を検討する必要がある。また、利用率の低い留学生の相談コーナーは廃止し、新たなコミュニケーションツールを検討する必要がある。

４．国際社会で活躍できる職能教育と留学生に対する就職支援については、文部科学省の「留学生就職促進教育プログラム認定制度」に認定された、本学の「KIUグローカル人材養成留学生就職促進プログラム」を活用して、日本企業への就職意欲が高い留学生の受け入れ体制の強化を図る。また、授業科目「キャリア開発Ⅰ・キャリアデザインⅠ」の学修成果を検証して、今後の授業内容の充実を図る。

２．国際交流の充実

〈今年度の取り組み状況〉

令和５年7月に実施したインターナショナルフェスタに高梁市内の中学校を招聘して国際交流を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

インターナショナルフェスタを開催し、高梁市内の中学生を招待して国際交流を行ったことは評価できる。

〈次年度への課題〉

今後はインターナショナルフェスタに地域の小・中学生を招待して、地域社会全体を視野に入れたの国際交流活動の実施に取り組むとともに、インターナショナルフェスタに加えて、松山踊り交流会を実施し、高梁の伝統文化に触れることで地域交流の場を与えるきっかけづくりに寄与する。また、来年度から加計学園と合同での海外研修団受け入れが決定したため、積極的に交流を推進し、在学生に対して海外留学を奨励すると共に海外からの留学生、研修団の受入れに積極的に取り組む。

社会科学部の自己点検・自己評価

学部長　　竹内　研

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

経営社会学科では、日本人学生の確保を重要課題として、学科リーフレットの活用、SNSでの情報発信、オープンキャンパスでのイベント開催、高大連携での学科のアピールなどに取り組んだ。スポーツ社会学科では、近隣の競合校との比較分析を行い、同学科の独自性・優位性の洗い出しに関する検討を、学科をあげて行った。健康スポーツ分野においては、近隣の大学の中でも、同学科は長年取り組んできている、稀な存在であった。競技スポーツでの学生確保をねらいとして、特に男子サッカー部の指導者確保に当たった。SNSでの学科情報発信にも取り組んだ。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

経営社会学科においては、23年秋学期の新入生12名、24年度春学期新入生48名、1年次編入生41名、2年次編入生7名、転学科生3名であった。退学者数・除籍者数に関しては、昨年度よりは改善を見た。スポーツ社会学科においても、定員充足は達成できず、かつ志願者の減少となった。経営社会学科では今後、日本人学生の確保が必須の課題であると言える。スポーツ社会学科に関しては、競合校が増えつつある状況下で、当学科の高校生のニーズに合った独自性を確立することが課題である。

〈次年度への課題〉

経営社会学科については、近隣に経営分野の学科などが設立されている状況において、当学科の独自性を確立することが課題である。それは、これからの時代にマッチした教学内容であり、経営実践力を具えた人材育成であると考える。また、起業志向の強い昨今、起業ノウハウを具えた人材育成も志向されるべきであろう。より目的意識の明確な留学生確保は、継続して強化する。スポーツ社会学科においては、高校生の入学段階においては、競技志向性が強く、この点において、当学科は硬式野球およびサッカーへの依存度が高い。競技志向の学生確保には、どうしても環境整備が必要であるが、これらを勘案して、現状の競技志向の高校生確保は維持しつつ、スポーツ関連分野における現在の社会情勢を見極めた上での、スポーツ関連のプロフェショナルの育成を確立することが必要である。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

経営社会学科では、地域と連携しての教育実践、社会調査実習の進展、IT教育の充実化、インターンシップの拡充に取り組んだ。基礎演習などを中心として、個々の学生に対応した教育実践を図った。留学生教育においては、就学の目標意識の涵養かつ持続を重視した。スポーツ社会学科では、オンラインを活用した教員採用試験対策、資格試験対策などを実施した。IT教育の充実化を図った。学年単位での交流行事の実施、個々の面談などの実施、などによって、退学防止対策に取り組んだ。学科独自の入学前教育を試みた。スポーツマネジメント教育を強化することを目的として、関係のスポーツ組織との事業実施を検討。カリキュラムのスリム化・合理化に関する検討を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

経営社会学科においては、社会調査実習の実習方向書を作成し、社会調査士資格取得者8名であった。相当数の留学生と加えて日本人学生が在籍することから、多文化理解を含める学科としての取り組みが進んだ。社会現場との連携教育を進展させたことにより、実践力育成への刺激、社会認識の向上、就活への意識づけなどについて、取り組むことができた。スポーツ社会学科については、学科が掲げる資格のいずれにおいても、資格取得を希望する学生が、年次で減少する傾向が見られる。個々に対応する教育によって、退学者数などは、歯止めが利いている。学生の学科への満足度は一定の水準が確保されていると思われる。

〈次年度への課題〉

経営社会学科は「グローカル社会・ビジネスの実践的学び」が可能な教育課程が認められた。この点は、今後の当学科のコンセプトとして有力なコンセプトとなると考えられる。高梁市との包括連携協定も活用した地域連携教育の推進は、同学科の大きなブランドになると考えられる。新カリキュラム検討の過程で、これからの社会のニーズにかなった人材の育成、特にマーケティングの実践能力を具えた人材育成は、現状では近隣大学に見られない、独自性となろう。こうしたコンセプトの打ち出しができると、本学ならではのマネジメント教育として、社会や高校生にアピールできると考えられる。スポーツ社会学科では、資格取得のモチベーションの持続が大きな課題となる。キャリア教育において、スポーツ関連分野に関心を持っている学生に対して、スポーツ・キャリア・デザインを描くことを中心的な課題とすべきである。当学科として、現在そして近未来社会において、どの様なスポーツ人材が必要とされるか、社会課題を解決するスポーツ人材とは、などについて検討して、当学科が育成する人材のビジョンの構築が必要である。それによってのみ、競合校との差別化が可能になるであろう。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

両学科における研究実績は、学科長報告にある通り。両学科とも、多忙な学科業務の中、研究推進に取り組まれたと考える。科研費獲得への取り組みも、積極的に行われた。また、学科単位での、または地域連携での研究取り組みも見られ始めた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

経営社会学科では、当学科の専門性の特性より、調査研究が主体となるが、コロナ渦の影響もあり、この点抑制されていたが、今後活性化すると思われる。個々の学科教員の研究活動は、持続的に行われ、一定の成果が見られた。研究成果の公表・可視化について、今後の改善の余地を認めた。スポーツ社会学科においては、まずは高梁市との共同事業である健康教室をベースにした研究活動が、昨年度以上に活性化し、遂行できたことが評価されよう。個々の学科教員の研究活動は、持続的に行われた。また、若手教員を中心とした、新しい研究取り組みの萌芽もみられた。

〈次年度への課題〉

それぞれの学科、それぞれの教員による研究活動は、継続的に行われている。加えて、本学部が社会科学をベースとする故、経営学とスポーツ科学・健康科学における、社会問題の解決に資する観点より、学部を挙げての研究テーマの打ち出しが実現することは、学部としての社会貢献としても、そして何より本学部の存在感を明示する上で、有益であると思われる。言うなれば、学部の社会的ミッションであると考えられる。学部としての研究成果を、社会に発信する試みが、学部単位で取り組むことが望ましい。本大学のブランディングテーマである国際化、言換えればグローバルに基づき、学部としても国際的な連携での研究活動も、模索することは課題であろう。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

今年度の取り組みに関しては、両学科長の報告にある通り。両学科共に、地域貢献活動に活発に取り組まれた。経営社会学科の特性から、各種地域事業への取り組みは、広範囲の領域で可能性があり、いくつかの事業種について、実践がみられた。スポーツ社会学科の代表的な地域貢献活動である、高梁市保健福祉部健康づくり課との連携事業である健康教室などが、定着した感がある。加えて、硬式野球部や女子サッカー部による、野球やサッカーといったスポーツ種目を介した、地域貢献活動が行われ、こちらも地域に定着している。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

本学部所属の教員は、多忙の中、地域貢献活動に尽力された。個々の活動は、既に地域に定着したとみなされる。おのおの、行政組織との連携であったり、行政レベルでそれらの活動が認知されている。この点、高く評価されるし、今後の発展の礎となるであろう。また、取り組みの中には、これからの社会情勢に鑑みた、先駆的かつ志向的な活動が見られた。

〈次年度への課題〉

学部長として、本年度も、地域のしかるべき組織や行政より、地域課題の解決を目標とする活動の構築を、本学と共同でできないかという提案をいただいた。こうした課題であったりニーズは、様々存在すると思われる。今後、地域のニーズをヒアリングする機会を、しかるべき組織や機関との連携の下、実施することは有益であると考える。本年度実施された、地域貢献活動を公開する試みは、継続されることが必要である。高梁市の現状の特性を鑑みるに、地域移住・定住に資する地域貢献活動という方向性を、軸ととらえることが肝要であろう。経営社会学科では、グローバルな視点を持つ地域貢献活動の可能性があるであろう。スポーツ社会学科では、昨今の重要社会課題である、中学校運動部活動の地域移行に関して、貢献するというミッションが存在する。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

両学科の取り組みについては、両学科長の報告にあるとおり。コロナ渦の影響が残る中、海外との人的交流は抑制された。そうした状況下であっても、オンラインを活用した、海外との情報発信・交換が実施された。経営社会学科では、留学生対象の交流事業が、積極的に行われた。スポーツ社会学科では、1名の海外留学生を輩出した。この様に、国際交流の制限因子がある中でも、今後の可能性を伺わせる、国際交流のきっかけが見られた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

現状の中でも、国際交流のきっかけを見出し、それに沿って、当面可能な形式・方法での実施が行われたことは、評価されるであろう。国際化のゴールは、実際の人的交流が不可欠である。それに向けての取り組みを模索する方向性を、改めて確認することが必要と考える。インターネット時代であるので、国際交流のチャンスは限りなく広がっており、本学部の国際化の戦略や手段は、以前とは異なる視点に立つことは、重要であろう。本学部の特性は、国際的な領域においても、諸外国の課題解決やニーズにマッチさせることは可能であると考える。

〈次年度への課題〉

オンラインを十分に活用することによって、海外へ両学科のコンセプトやポリシーやコンテンツなどを発信可能である。英語への翻訳の課題さえクリアできれば、極めて大きな国際化の扉を開くチャンスとなるであろう。また、日本国内にも多数、それぞれの学科のコンテンツに応じた、海外チャンネルを持つ組織や器官が存在する。そうしたルートを視野に入れることも、これからの国際交流ひいては国際化の鍵であろう。また別の視点として、日本在住の外国籍人材を活用しての、本学部教員と合同でのシンポジウムなどの開催も、国際化の足掛けとなり得るであろう。

経営社会学科の自己点検・自己評価

学科長　　李　分一

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

◎実社会に仕える実用教育・修学を前面に出し、最も重要で現実的な懸案の学生学保に取り組んできた。
①学科紹介リーフレットとFacebook等SNSの活用のIT情報を発信した。
②オープンキャンパスでは、日本人学生確保を目指す各種のイベントに取り込んだ（アクティブラーニング模擬授業・学生主体プロジェクト紹介、学生個別相談ブース）。
③地域内の高大連携を通じて、本学科への進学を促した。
④退学者などの学生情報を学科で共有しながら、チームワークで対応した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

◎新入学生(定員100名)：23年秋学期新入生12名（その他、多数の編入生）と、24年度春学期新入生48名（1年次生41名、2年次生7名）、その他、日本人転学科生3名がいる。
①ユニークで魅力あるITの情報発信と高大連携事業（出前授業等）を行った。
②オープンキャンパスでは、教員・在学生と協力し、学科魅力をアピールしてきた。特に、在学生との交流時間を増やし、参加者の疑問・質疑等を高校生の目線で説明した。
③留学生退学者・除籍者の抑制：　昨年度の退学率15.9%・除籍率4.0%（計19.9%）から退学率3.6%・除籍率2.40%（計6.0%）へと顕著に減少した。

〈次年度への課題〉

◎定員充足率をさらに高める（100%）。高校生目線での募集活動を通して学生確保を一層強化する。特に、日本人高校生の確保に全力を尽くす。
①高校生向きの活発な対面広報と非対面・オンライン情報発信をさらに強化する。
②オープンキャンパスのイベント内容について、体験型のものを増やすなど、より魅力あるものにしてゆく。HP・SNS内容のさらなる充実化と学科広報策を再検討し実行する。
③退学者対応など、学生個々に合わせたフォローとその情報共有に努める。特に、留学生に対する懇切丁寧な個別指導を強化する。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

◎各々の授業における学生の実践的な知識と主体的な学び、そして学生個々の可能性を伸ばせる配慮型の指導とともに、国際環境・条件の中でも生きぬく教育を行ってきた。
①多種・多元的な地域貢献事業に取り込んできた。まず、高大接触での探求学修ができるように、高梁市高校等との連携をも図ってきた。また、高梁市役所との連携を図ってきた。そして、インターンシップに参加しやすい環境づくりを行った。
②必修科目の基礎演習Ⅰ・Ⅱ（1年次生）・基礎演習Ⅲ・Ⅳ（2年次生）運営の充実化を図ってきた。1年生の場合、学外活動の「シャルム応援」と「高梁散策」を行い、また2年生交流活動の「チーム作り」と「チーム対抗ワーク」を行った。学生同士の学びや主体的、探求的な学びに努めてきた。
③社会調査実習において、計量的分析調査研究を行った（標本数400以上であり、昨年度より増加することができた）。
④新たなIT関係授業の開始と多種多様な現場教育とインターンシップを行った。
⑤「日本を知り、世界に目を向ける」、いわば異文化教育の充実化を図ってきた。
⑥2025年4月より開始する学科新カリキュラム検討の開始（12月11日、カリキュラム関連の学科FD研修会の実施）。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

◎学科教員が連携して学生指導に取り込んで学生満足度は高まり、その結果、留学生の退学者・除籍者は顕著に減少した。
①地域との連携を強めた。
②1年次生と2年次生必修科目の基礎演習Ⅰ・Ⅱと基礎演習Ⅲ・Ⅳは、担当者全員で取り込んできた。その過程で、学生目線での内容のさらなる充実化と、学生とともに考え実行できる多様多元的な体験学修を行った。
③社会調査実習での調査成果の「実習報告書」をまとめた（社会調査士資格取得８名）。
④授業の参加者はそれほど多くはなかったものの、近年のITの進歩に合わせたユニークな授業は出来てきた。また、多種・多様な現場教育とインターンシップは多数の受講生が参加し評判も良かった。
⑤留学生が多い学科の特性上、「多様化する社会で生き抜く力」を養うためにも、一層の多文化共生の教育を模索してきた。
⑥より鮮明な学科学びの特色となる経営学と社会学を結び付けて、実社会に仕える新カリキュラム作成に取り組んできた。

〈次年度への課題〉

◎経営学と社会学を学び、持続可能な経済社会を担う人材を養う。新教育課程（新カリキュラム）実施準備（2025年実施予定）を行う。
①地域包括連携協定を結んだ高梁市周辺との繋がりをさらに強め、学修効果を高める。
②基礎演習Ⅰ・Ⅱとキャリア開発等の授業では、先輩たちの学び成功の体験を活かすことによって、1年生の学び動機をさらに強めてゆく（初年次教育の強化）。基礎演習Ⅲ・Ⅳにおいては、相互交流とコミュニケーション力の向上を図ってゆく。
③社会調査士資格取得のメリット等を学生にアピールできるよう関係科目での授業を工夫する。
④デジタル経済社会に対応できる情報活用能力を養う。そのため、IT授業を強化する。
⑤教員同士の連携を深めながら、多文化学修環境の中で、学生の主体的・体験的学びを支援してゆく。
⑥新カリキュラムに基づく、一層の「グローカル社会・ビジネスの実践的学びを深める」ように努める。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

◎今年度の研究活動実績は、学術論文（５編）、講演・口頭発表（３編）、著書・編著（４編）、その他（科学研究費金助成を含む１編）になっている。
①科学研究費（基盤C）、22k02085、地理情報システム（GIS）を活用した地域アセスメント手法の構築（2022～継続）
②国内外学会（対面・非対面）発表
③高梁地域連携の研究

〈今年度の結果についての点検・評価〉

◎コロナ禍ゆえの現地調査などの一定の制約が残っているものの、それなりの研究成果はあった。
①教育現場で使える実用的な研究をさらに進めてゆく必要があった。
②これまでの様々な調査データに基づいた学会発表と、もっと論文・著書の執筆などの成果で可視化する必要があった。
③より多くの「地域」と「国際」を繋げるグローカルの研究が必要であった。

〈次年度への課題〉

◎ディプロマポリシー（自ら学ぶ力、生きぬく力、可能性を信じる力）教育に繋げる研究力を向上させる。
①教育現場で活かせる実用的な研究を奨励かつ促す。
②年１回以上、学会に出席し、発表するように促す。
③研究成果を可視化（論文、書籍の執筆）する。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

◎今年度の公式的な地域連携・地域貢献活動の実施は、16件（5名）である。
①多様多元的な地域貢献事業の実施と高大連携を強化した。
②インターンシップに参加しやすい環境づくりを行った。
③高梁市の社会福祉関係機関との共同研究および、「子育てカレッジ」に参加した。
④様々な地域関連の専門委員などに参加した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

◎各種の地域連携・貢献活動ができて充実な結果になった。
①方谷賞（卒業生）を受賞した。
②地域との連携が進み、学生の挑戦しやすい環境づくりが出来てきた。
③地域貢献や共同研究で培った高梁市内の社会福祉専門機関との繋がりを下に、専門科目の授業に実務家を招き、学生が地域課題について検討する事例検討型授業を展開した。
④様々な地域関連の専門委員等に参加し、地域との密接な連携を強めてきた。

〈次年度への課題〉

◎今年度と同様に、様々な取り組みを一層強めてゆく。
①次年度は、インターンシップが行いやすい地域連携仕組み、今後の高大連携のキモとなる地域クラブについての構想や実施し関係を深めてゆく。
②研究・地域貢献の内容とともに、学生が日々学ぶ授業内容との接続性をより高める。
③社会調査実習で得られたデータ分析結果は、町づくり関連の学外イベントで報告する。
④地域関連の専門委員を奨励してゆく。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

◎今年度の国際化の推進とその主な取り組みは、下記の通りである。
①日本人学生と留学生がともに学びあう出会いや交流プログラムの一貫として「シャルム応援」と「高梁散策」等を行った。
②ゼミ生の中では、留学等の越境（国際）学修に関心を持つ学生が増え始めた（外なる国際化）。留学生の場合、日本国内７か所にインターンシップに行くなど、日本人・留学生問わず、異なるエリアで学べる環境を作った（内なる国際化）。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

◎地域連携・地域貢献と比べて、国際化の推進・取り組みは相対的に乏しかった。
①内なる国際交流活動の学外活動「シャルム応援」と「高梁散策」の評判は良かった。
②交換留学（「双方向の国際化うち外」）は乏しかった。

〈次年度への課題〉

◎特色ある双方向国際化（「国際化うち外」）教育・交流を多角的に推進する。
①グローカル教育の再構築とその実用化の点検とともに、さらなる「グローカル融合教育」の充実化を推進してゆく。
②多文化教育の充実化と異文化交流の充実化を促進してゆく。

スポーツ社会学科の自己点検・自己評価

学科長　　山口 英峰

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

①入学定員充足：入試広報室との連携を強化する
・入学予定者数:49名(定員:80名)，入学定員充足率:61.3%（昨年度：91.2%）
・近隣他大学との学費，特待制度，資格等の比較に加えて，本学科における過去10年間の志願者，入学者数(入試区分別等)，男女比，強化クラブ比率等について学科での検討，入試広報室と連携し，本学科における志願者・入学者の特徴を分析した.また，5年先(1年目)を見据えた取り組みを学科教員で議論し，入試広報室と共有した.

②情報発信活動を継続して実施する
・学科Instagram，Facebookの充実:365記事(毎日更新，昨年度365記事)
主としてSNSを活用し，教育研究活動，学生の大学生活について情報を発信した.各教員が研究室単位においても積極的に最新知見，研究室学生の様子を更新した.

③広報活動を強化する
・高校訪問等:103校(昨年度:118校)
岡山県:17校，中国地方:20校，四国地方:15校，九州地方:31校
近畿地方:15校，その他:5校
・高校進路ガイダンス，模擬授業等:10校（昨年度：4校）
(小豆島中央高等学校，津山東高等学校，勝山高等学校，方谷學舎高校，岡山商科大学附属高等学校，銀河学院高等学校，神辺高等学校，作陽学園高等学校，吉備高原学園高校，藤井学園寒川高等学校)

〈今年度の結果についての点検・評価〉

①入学定員，入試広報室との連携
・昨年度と比較して入学者数は減少し，目標である定員充足は未達成となった.
これまで以上に入試広報室と連携して，継続的に検討していく必要がある．定員充足の新しい取り組みとして，学科としての根本的な解決にはならないが，女子硬式野球創部に向けて取り組めたことには一定の評価ができる.

②情報発信活動
・情報発信に関してはSNS担当教員を中心に毎日,Instgramを更新したことは評価できる.

③広報活動
・高校訪問，出張高校進路ガイダンスについて昨年の2倍以上の依頼があった.高校訪問時には可能な限り体育教官室に加えて進路指導部に積極的に出向き，本学科以外の学科についても紹介した.高校進路ガイダンス，模擬授業に関しても積極的に活動でき，依頼があった全ての広報活動に参加できたことに一定の評価ができる.

〈次年度への課題〉

①入学定員，入試広報室との連携
・今年度と同様，入試広報室と連携する．令和7年度女子硬式野球部創部に伴う広報活動についても入試広報室と協力して強化する.

②情報発信活動
・今年度と同様，来年度においても情報発信を積極的に実施する.

③広報活動
・オープンキャンパス(OC)に来校した生徒の本学科への受験率が高いことからOCの更なる充実を図ると共に，OCに来てもらえる工夫が必要である.入学者数，OCに来校する生徒が減少していることから具体的な対策が急務である.スポーツに関わる学科特性として，高校進路指導担当者に加えて保健体育教官室への情報提供が必須である.課題に対する向上方策として，入試広報室と相談の上，昨年に引き続き，保健体育教官室宛の郵送物配布(OCの案内，学科紹介，女子野球部創部資料)の実現に向けて動いていきたい.

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

①各種資格試験，教員採用試験における合格率向上に向けた支援体制システムの構築
・Microsoft Formsを活用した模擬試験(教員作成)の実施
・Microsoft Teamsを活用した集団および個別指導の実施
・動画を活用した実技試験対策の実施
・グループLINEを活用し，資格に関する情報の提供
・成績不振者に対する個別指導の実施

②退学者対策
・少人数のチューター制度を活用し，定期的な個別面談を実施(オンライン併用)
・3回連続欠席学生の把握と対応，GPAが低い学生に関しては，個人面談に加えて保護者にも早い段階で連絡した.
・演習科目やイベントを中心に「縦・横・全体のつながり」を強化した.

③その他
・学科の新カリキュラム導入についてコース制度の有無，講義のスリム化について学科教員で数回にわたり議論し，概ねの方向性について学科教員で共有した.
・入学前教育において，kiuiドリルに加えて学科独自の教材使用を試みた.
・スポーツマネジメント教育の強化:吉備国際大学Charme岡山高梁と本学科の連携により，Charmeの運営，体力測定，コンディショニング，トレーニング指導，マネジメント業務補助等でスタッフ参加して，実務経験を積めるプログラムを展開できるかを検討した.

〈今年度の結果についての点検・評価〉

①各種資格試験，教員採用試験における合格率向上に向けた支援体制システムの構築
・中高教員採用試験(保健体育):現役合格者の輩出，一次試験合格率目標50%
(結果:現役合格者の輩出0名，現役私学高校合格者1名，一次試験合格率目標0%(0/1名))
・健康運動実践指導者資格試験合格率目標:100%(全国平均：61.7%，本学結果:66.7%)
・健康運動指導士合格率目標:全国平均以上(養成校合格率73.7%，本学結果:50%)
・日本スポーツ協会認定資格試験合格率目標:100%(結果:受験者0名)
・日本サッカー協会公認C級コーチライセンス合格率目標:100%(結果:100%)
＊目標達成した資格，未達成の資格があった.教職免許状を取得することを目的にする学生，教員になることを目標にする学生がおり，モチベーションの違いが確認された.

②退学者対策
・退学者数:5名(退学率:2.0%)
今年度は5名の退学者，2名の除籍者が確認されており，目標は未達成であった.退学理由の多くは入学時に将来を迷っている学生「進路変更」であった.

③その他
・学科の新カリキュラム導入についてコース制度の有無，講義のスリム化について学科教員で数回にわたり議論し，概ねの方向性について学科教員で共有した.
・スポーツマネジメント教育の強化:Charmeと本学科の連携により，体力測定補助でスタッフ参加はしたものの，実務経験を積めるプログラムの展開には至っていない.

〈次年度への課題〉

①各種資格試験，教員採用試験における合格率向上に向けた支援体制システムの構築
・教職を除く資格については受験者数が激減している．各種資格の説明に加えて，資格と就職との関連性についても具体的な事例を出しながらの説明を実施する.
・教職に関しては，目的によってモチベーションが異なることから，各目標に対応した指導方法が必要である．また，入学時の教職希望者が途中離脱するケースも見受けられることから，教員という職業に対する素晴らしさ，やりがい，楽しさを経験できる取り組みを1年次から実施する．解決策の一つとして教職担当者を2名から3名に増員する.

②退学者対策
・教務課との連携に加えて，学年を超えたつながりがもてるような取り組みが必要である．GPAが低い学生，欠席が多い学生に関しては今まで以上に早い段階での面談，個別指導が必要となる．本学科での学びが将来の職業にどのように展開していくかを1年次から具体的な事例をだしながら進めていく．例年実施していたチューター，学年，部活動の枠を超えたレクリエーションや食事会を再開する.

③その他
・吉備国際大学Charme岡山高梁と本学科の連携により，Charmeの運営，体力測定，コンディショニング，トレーニング指導，マネジメント業務補助等でスタッフ参加して，実務経験を積めるプログラムを展開できるかについて引き続き検討する．本プログラムは学科独自の特徴となり，他大学との差別化を図れるものと考える．

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

・受託研究による健康教室，体力測定の実践
・定期的に若手教員を中心とした研究に関する勉強会の実施
・継続的に研究が実施できる時間の確保，環境整備に取り組む
■研究費　科研費採択：0件（応募3件），継続：2件，受託研究：1件
■その他　研究論文　：9編，口頭発表：4回，共同研究：6件

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・受託研究について
受託研究は6年目を迎えた.本受託研究は学科における事業および研究という位置づけである.学科教員および学生が中心となり，高梁市民を対象とした健康教室ならびに体力測定を実施している．例年通り，大きなトラブルもなく実践できたことは評価できるが，参加者の減少については次年度の課題である．

・研究活動全般について
科研費採択の目標は未達成であったが，各教員が個人研究，共同研究により成果をあげている.学科内共同研究も継続しており，論文公表できたことは評価できる．研究を通して知的探究心を学生と共有でき，研究成果を学生教育に還元できたものと考える.若手教員を中心とした定期的な勉強会実施は，目標達成に向けての努力として評価できる.研究に向き合う時間の確保は達成できていない．他業務の効率化等，更なる検討が必要である．

・その他
年2回のResearchmap更新を徹底できた.研究倫理に関して教員だけではなく，大学院生，学部生に対しても徹底できた．

〈次年度への課題〉

・若手教員を中心とした勉強会を次年度も継続して実施する．
・次年度も国内外に多くの知見を発信できるよう，継続的に研究を行える時間の確保，環境整備を取り組む.科研費等の資金獲得者の申請書記載内容を共有し，教員間で確認し合いながら申請書のブラッシュアップが行える環境を整える．

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

①地域貢献(連携:高梁市健康づくり課)
以下，健康教室・体力測定を実施（*参加者，学生・教員スタッフは延人数表記）
・高梁ヘルスアップ講座　　開催回数：20回，参加者:344名，スタッフ:166名
・高梁健幸フィットネス講座　開催回数：44回，参加者:241名，スタッフ:217名
・高梁シェイプアップ教室　　開催回数： 9回，参加者: 31名，スタッフ: 50名
・出張体力測定　　開催回数：22回，参加者:283名，スタッフ: 58名
②地域貢献(連携:高梁市教育委員会)
・地域運動部活動推進事業として中学生における部活動の練習計画，指導補助を実践

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・2016年度より，高梁市民を対象とした健康教室（4講座）をフィットネススタジオ，フィットネスラボにて展開してきた．例年通り，大きなトラブルもなく実践できたことは評価できるが，参加者の減少については次年度の課題である．高梁市民を対象とした運動指導の実践は，学生の現場経験の場としての教育効果が高いだけではなく，地域の方とのコミュニケーションを深めることができる.今年度，健康教室や体力測定に例年よりも多くの学生を動員することができたことは評価できる．

・高梁市内の中学校では，単一の学校では大会などに参加できない競技が存在している．
地域運動部活動推進事業として中学生における部活動の練習計画，指導補助を実践できたことは評価できる．

〈次年度への課題〉

・次年度も引き続き健康づくり課と連携し，高梁市民の健康寿命延伸に貢献する．参加者が継続して運動できる環境がないことから解決に向けて継続的に行政と議論していきたい．
・本学科で実施している取組，成果，課題について，市民への周知が十分ではない．次年度は市民を対象とした成果報告会を実施する．
・高梁市内の中学校では，単一の学校では大会などに参加できない競技が存在している．
継続的に実施できるシステムの構築について行政と連携し，引き続き検討する．

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・海外で活躍している既卒生と数回オンラインで繋ぎ，留学などに興味がある学生を対象とした場を提供できた．
・運動指導に関する日本と海外の違い等についてオンラインディスカッションを実施した．
・在校生1名が短期留学していたことから，留学成果報告会を実施した．

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・海外（オーストラリア）で活躍している既卒生と留学などに興味がある学生を対象としたオンラインの場を設けられたことは評価できる点である．また，海外でヨガの運動指導をしている既卒生とは日本と海外の違いについて興味深い話を拝聴した．
・基礎演習Ⅱ，演習Ⅱ講義の一環として留学成果報告会を開催した．リアクションペーパーの結果から，留学を希望している学生がいること，留学に興味をもったという回答もあり短期留学を促進できたものと思われ，一定の成果が得られたものと考える．

〈次年度への課題〉

・留学に関しては語学留学，専門性を高めるための留学，アスリートによる留学等，多岐にわたる.特に専門性を高めるための留学に関しては，具体案を模索する．そのためにも留学経験者に加えて，既卒生がどの程度海外で活躍しているかを把握し，経験談を話しできる場づくりが必要である.引き続き，既卒生の「声」に関してはオンラインなどを通して実施したいと考えている．

保健医療福祉学部の自己点検・自己評価

学部長　　中瀬 克己

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

入学者対策：新たな学部・学科・専攻の設置や高梁市の支援をアピールしたオープンキャンパスの工夫（3年生・保護者が主な参加者）、高校訪問（看護学科では高梁市・高梁市医師会と連携した訪問）・高校での進路ガイダンス・大学見学の受け入れ（1,2年生が主な参加者）の推進により教員・在校生による直接的な働きかけの機会増加を図り学生確保に努めた。同時に、学科ホームページ・ブログやInstagram、X(旧Twitter) 等のSNSを介した各学科・専攻の特色や在校生を含めた学生生活や国家試験対策・懇切な学生支援の紹介に力を入れた。それぞれの学科で複数の資格取得が可能である、多様なカリキュラムがあるという特徴も紹介して、学生・保護者への訴求に努めた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・2024年度入学予定者　入学定員140名　入学予定者68名　充足率49%　(昨年度53%)
　　編入生定員10名　入学予定者10名　充足率100%（昨年度100%)

学部全体での入学定員充足率は前年度一旦増加した53%より再度減少し49%となった。看護学科編入生の定員充足率は100%で昨年度同様目標を達成した。学科別では作業療法学科は2年連続して増加していたが今年は減少し、看護学科は前年は減少したが今年は増加した。また、理学療法学科は3年連続して増加した。作業療法学科、看護学科は定員充足率が50%を下回った。

〈次年度への課題〉

入学者対策：新たな学部・学科・専攻の設置を活かし、「看護師」養成大学であることの周知や新たな学科・専攻の特長が魅力と認識できるような説明の一層の工夫を行う。これらを、オープンキャンパス、高校訪問・ガイダンス、高大連携による見学等、HPやSNS等による発信などの多様な機会に一貫性を持って取り組む。その一環として在学生による発信を強化し高校生への訴求力を高める。その基礎として在学生の大学生活での満足度を高めるため教育の充実に一層取り組む。また、高梁という学生が学び暮らす街としての魅力を明確に伝える。そのため「高梁市と吉備国際大学があなたの学生生活を支えます！」という看護学科のキャッチフレーズも参考に各専攻でその特徴を踏まえて統一性を持って訴える。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

教育面の対策：各学科の掲げる3つのポリシー（学位授与方針、教育課程の編成・実施方針、入学生の受入れ方針）に基づき、学位授与方針に一致した力を身につける事ができるよう各学科で教育課程の編成・実施を工夫した。退学者対策、資格取得に向けた教育に具体化された

退学者対策：昨年度に引き続き退学者ゼロを目標に、早期発見・予防と一層のきめ細かな対応を行った。ゼミ単位での少人数指導、5年目学生へきめ細かな個別指導と合わせての学生相互支援による学習効果の強化、転学科等を検討する学生へ履修上の工夫の指導、休学中の学生保護者との定期的連絡や復学に向けた面談などを強化した。また精神保健上の理由で修学に支障をきたす学生が増えているが、健康上の支援が必要な学生へのほっとルームの早期利用を推奨した。特記すべきこととして理学療法学科では再入学生を1名受け入れ卒業できた。今後退学者に対する一つの選択肢として提示できる可能性がある。

資格取得に向けた教育：国家試験合格率100%を目標に3学科で連携を更に強化した対策に取り組んだ。国家試験対策を1年生から取り組み、4年生まで系統的に行えるようにした。2学科では4年生秋期は月曜日から金曜日まで1限から4限に集中して行えるよう取り組んだ。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

各学科とも学科のカリキュラムポリシーによって教育を行うことができ、3つのポリシーに記載された事柄は着実に実施できた。

・退学者10名（前年11）、除籍者0名（1）と前年より減少した。理由は３学科とも似ており就学意欲低下、進路変更、心身の不調、成績不振、経済的理由等であった。前年は４年次の退学が6名であったが本年は１年次の退学が6名と多くを占めた。
・転学科やそのガイダンス受講者も複数おり、転学科希望の理由は学習ニーズの相違、学業不振、体調不良等で退学理由と似ていた。
・理学療法学科再入学生1名が新カリキュラム下で卒業することができた。

国家試験合格率
看護師：新卒87.9%、既卒37.5%、合計78%（全国平均：新卒93.2%、合計87.8%）
保健師：新卒100%　既卒100%、合計100%（全国平均：新卒97.7%、合計95.7%）
理学療法士：新卒100%、既卒16.7%、合計81.1%（全国平均：新卒95.2%、合計89.2%）
作業療法士：新卒100%、既卒33.3%、合計80%（全国平均：新卒91.3%、合計83.8%）
・保健師、理学療法士、作業療法士の新卒国家試験合格率100%を達成することができた。

〈次年度への課題〉

【教育活動】
・教育はポリシーにそって着実に実施する。
・講義、アクティブラーニング、実習等の学習ニーズに応じた方法を活用して、学生の能力及び満足度の向上に努める。
【退学者対策】
・各学科専攻での状況を踏まえた数値目標を定め、対策に取り組む。
・教員間での情報交換を強化し連携して、個々の学生に応じた学生支援を充実させる。
・学生の変化を早期に把握し、転学科ガイダンス等情報を伝え必要時には保護者と連携し支援を行う。転学科先の候補となる学科長とも密に連携する。
【資格取得に向けた教育】
・国家試験合格率100%をめざす。
・1年次から計画的に取り組み、4年次まで日々の講義から国家試験対策を行う。
・学科・専攻間の連携を継続する。
・大学のサポートを受けた既卒者の国試合格率は高く更に積極的に提案してゆく。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

科学研究費の取得については昨年度の申請での審査結果がA，B評価であった研究者に対して、学内研究費の補助による研究の推進を支援して、次年度（令和6年度）の採択に結びつける努力を行った。各学科内あるいは学科間の連携を深め、査読誌への投稿を推奨した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・教員各自で自覚をもって研究活動に取り組むことで成果を上げた。
・企業との共同研究契約が新規に２件あり、社会実装につながる成果であった。
文科省科研費の取得状況は減少した。一方、論文発表数は一昨年度41編・昨年度35編と増加した。
科研費：15件（代表6件，分担9件）前年18件
論文：41編（査読あり37編、査読なし4編）前年35件

〈次年度への課題〉

・学部が変更となり、学科間の交流機会の減少が懸念される。本学大学院での交流を始め学内外の研究者と積極的な学術交流を図る必要がある。
・科研費の獲得に向けて積極的に挑戦していく。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

それぞれの学科で高梁市の事業をはじめ岡山県内の市町村の活動に、講師の派遣や委員会委員としての派遣など行った。高梁市への貢献として、出前講座（高等学校）、まちなかゼミナール、高梁市介護予防事業、高梁市認知症サポーター養成講座、ゲームジャム高梁・ICTクラブ高梁、ワークシェアリング就労支援プロジェクト、地域連携教育協力にかかるプログラムを精力的に実施した。在宅医療、介護推進、看護師確保対策活動に参加した。また、介護認定審査会・行政不服審査委員会・情報公開及び個人情報審査委員会・認知症サポーター連絡協議会などの、各種委員会の委員を引き受けた。また岡山県看護協会と連携して高梁支部副支部長をはじめ、各種委員会の委員を引き受けた。
一般社団法人全国大学実務教育協会の園芸療法士の認定校としての申請を行なった。
グリーンヒル順正にて月１回の園芸活動を実施した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・各教員の専門性を活かした多様な地域連携・地域貢献活動を行った。
・演習授業を通して地域課題解決人材の育成に取り組んだ。
・学生が授業を通じ認知症サポータ養成講座を受講し資格を取得した。

〈次年度への課題〉

・地域連携・地域貢献活動に継続して取り組む。
・地域連携・地域貢献に寄与する授業を通して各学科・専攻における3つのポリシーに合致した人材育成の充実を図る。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・「グローバルスタディ入門」「国際貢献・地域理学療法学」等の授業履修により、国際的な視点での学びを深める。
・学内での国際交流行事（アメリカ・カナダ研修団の訪問、インターナショナルフェア）へ参加。
・フィンドレー大学から作業療法学科への短期留学の実現に向けて検討を行った。
・英文での国際誌に13編の発表があり、国際学会での発表が1題あった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・授業履修により国際的な知識を深めることが出来た。
・研修団に対し、学生らによる英語を活用した学科の特色に関するプレゼンテーションが実施できた。
・フィンドレー大学からの短期留学受入に向けて、プログラム原案作成を検討した。
・講義内に経営社会学科を中心とする留学生との交流及び講義協力依頼を行ったが相手方都合により実現できなかった。

〈次年度への課題〉

・「グローバルスタディ入門」「国際貢献・地域理学療法学」等の授業履修機会を継続する。
・プログラム作成、日程調整などをを進め学生の希望に応じた、短期留学体制を整備する。
・学内での国際交流行事への参加を推進する。
・留学生との交流授業を進める。

看護学科の自己点検・自己評価

学科長　　竹﨑 和子

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

・学校訪問：学部学科紹介（総社高校・総社南高校・矢掛高校・興譲館高校・井原高校
新見高校・共生高校・方谷学舎高校・高梁高校・城南高校）
・大学見学：学部学科紹介（神辺高校・吉備高原学園高校）
・高校ガイダンス：模擬授業（広島県立福山明王高校）
・オープンキャンパス：「高梁市と吉備国際大学があなたの学生生活を支えます！」をキャッチフレーズとして学科紹介、模擬授業、演習、在校生との交流
学科作成の動画紹介（在校生キャンパス紹介、入学試験対策等）
・看護学科のブログを活用した情報発信

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・2024年度入学予定者　学部定員60名　　入学予定者24名　充足率40％　（昨年度38%）
編入生定員10名　入学予定者10名　充足率100％（昨年度100%）
学部生充足率80%は未達成　編入学充足率100％は達成できた。
・看護学科ブログ33件：授業、演習、オープンキャンパス、授業報告会等に関するタイムリーな情報を発信できた。

〈次年度への課題〉

・看護学部看護学科への学部変更により、「看護師」養成大学であることを拡く周知する。
・入学定員充足率　学部80%　編入学100％を達成する。
・入試広報室、教務課と連携して高校ガイダンスを計画的に実施する。
・高梁市、高梁市医師会と連携した高校訪問を継続する。
・オープンキャンパスでの内容を検討し、高校生、保護者に対して看護学部看護学科の魅力、高梁市奨学金制度等を発信し入学生確保に繋げる。
・教育と学生が連携し看護学科ブログ、Youtubu等を作成し、情報発信を充実する。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

・国家試験全員合格（看護師・保健師）を目指して看護学科教員が一丸となり、ゼミ単位指導、集中講義、模試等を計画的に実施した。
・キャリアサポートセンターと連携し就職試験対策を充実させ、就職率100％を目指した。
・退学者0を目指して、チューターを中心に学生、保護者との連携を図り修学を支援した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・国家試験対策として、模試結果を基に今年度導入した調べ学習・ペア学習方法による指導を行った。学生全員が受験に臨み、自己採点結果は昨年と比べて平均得点は12.2点高かった。
国家試験合格率
看護師：新卒87.9%　（昨年86.8％）　既卒37.5%（昨年０％）新卒+既卒78%（昨年82.5%）
全国平均　新卒93.2%　新卒+既卒　87.8%
保健師：新卒　100％（昨年93.3%）　既卒100％（昨年100％）
全国平均　新卒97.7％　新卒+既卒　95.7%
・キャリアサポートセンターと連携し、就職率95.8 %（2024年3月22 日現在）である。
・成績不振学生のGPA1.5以下の学生1名に対して、保護者と連携し修学継続を支援した。
・退学者3名（昨年度0名）　理由は就学意欲低下、進路変更、心身の不調等であった。
除籍者0名（昨年度0名）
休学者1名。理由は心身の不調の為であり、2024年4月復学に向けて調整している。

〈次年度への課題〉

・国家試験（看護師、保健師）全員合格100%を達成する。
・1年次から計画的に国試対策に関する学生指導を行う。
・講義、アクティブラーニング等の学習方法を活用して、学生の学習ニーズに応じた教育を実施する。
・授業評価を参考にして、授業内容を検討し教育の質の向上に繋げる。
・GPA評価を参考に、成績不振者に対してチュータを中心として早期学生指導を強化する。
・退学者、休学者0名を目指して、チュータを中心に全教員が連携して、個々の学生に応じた学生指導を強化していく。
・転学科について学生に説明し必要時には保護者と連携し支援を行う。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

・科研費採択　継続2件　新規0件
論文10編（昨年度11件）、口頭発表20件（昨年度20件）、雑誌投稿2件（昨年度2件）
・各教員が計画的に研究活動に取り組む。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・教員が研究活動に取り組んだが、昨年度より総件数は減少した。

〈次年度への課題〉

・大学教員としての自覚を高め、教員間での学術交流を深めながら研究活動を推進していく。
・科研費の獲得に向けて積極的に挑戦していく。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・岡山県看護協会、高梁市医師会と連携し、県内での委員会活動、研修会講師等を推進する。
・出前講座（高等学校）、まちなかゼミナールへの参加を継続する。
・高梁地域と連携し、認知症サポーター養成講座、高梁市在宅医療、介護推進、看護師確保対策活動に参加する。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・岡山県看護協会高梁支部支部長、高梁地域内病院の看護研究指導、研修会講師等各教員が専門性を活かし、業務に支障のない範囲で地域貢献活動に取り組んだ。
・出前講座2件、まちなかゼミナール2件の参加
・学生が老年看護学授業を通じ、学生が認知症サポータ養成講座を受講し資格取得を達成した。

〈次年度への課題〉

・地域連携・地域貢献活動に継続して取り組む。
・認知症サポータ養成講座を継続し、大学と高齢化が進む高梁地域との連携を強化する。
・高梁市役所、備北保健所と連携し、高梁地域の子育て支援活動について検討予定である。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・「グローバルスタディ入門」授業履修により、国際的な視点での学びを深める。
・短期留学が可能な学内体制を整備し、学生支援に繋げる。
・学内での国際交流行事への参加を推進する。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・「グローバルスタディ入門」授業履修により、講義、GW,プレゼンテーションを通じて、国際的な知識を深めることが出来た。

〈次年度への課題〉

・「グローバルスタディ入門」授業履修により、国際的な視点での学びの意義を深める。
・学生の希望に応じた、短期留学体制を整備する。
・学内交流行事への参加を推進する。

理学療法学科の自己点検・自己評価

学科長　　原田 和宏

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

・OCは全教員が参画し、人間科学部人間科学科として実施した。新専攻で養成したい人材像を説明し、在学生とのフリートークを導入した。
・大学見学は、神辺高校および吉備高原学園高校の２年生の対応を行った。
・高校内ガイダンスは、銀河学園高校および岡山商科大学付属高校に出向いた。
・大学HPの学科NEWSの発信を増やし、学生による大学Instagramの発信を増やした。
・大学パンフレットの内容に関して【専攻の特徴】、【現場での問題解決能力を身につける授業】、【国家試験対策】の記載を改善した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・入学定員40名、入学者数32名、入学定員充足率80.0％であった。
・前年度の入学定員充足率は82.5％であり、今年度はそれを下回り入学定員は満たさなかった。
・年内入試において高梁市内の高校から2名（前年度0名）が入学したことは評価できる。

〈次年度への課題〉

・OCでは、専攻の特徴をより平易に説明できるようにする。
・OCでは、在校生の協力がより効果的になるように工夫する。
・そのためには、在校生が大学生活に満足することが求められるので、授業や国家試験対策のさらなる充実を図る。
・学科NEWSの発信、学生による大学Instagramの発信を高校生に響くように発信する。
・高校内進路ガイダンス、大学見学で専攻の特徴が魅力的に感じられるように説明する。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

【教育活動】
・「豊かな人間性」「多様な社会で活躍する力」を育む教育を増やした。
・3年生に対する臨床実習技能試験（OSCE）を春期と秋期に行う体制を構築した。
・再入学生を１名受け入れて新カリキュラムの下で単位認定を行った。

【退学者対策】
・5年目の10名をLクラスと称し、春学期にオンライン面談を2度実施し、その後チームスを活用した週2回の国家試験対策を促進できた。
・転学科を希望する学生に対して履修状の工夫を指導し、転学科後に目的達成がスムーズになるようにした。
・総合臨床実習で体調不良による実習中止が2名発生したが、医師による治療を提案して回復を促した。
・精神的な不調を来たした学生にほっとルームでの面談を勧め、早期に対応した。

【資格取得に向けた教育】
・国家資格取得に向けて学科ビジョンを設けた。
・国家試験対策を1年生～4年生まで系統的に行えるようにした。
・作業療法学科との連携を積極的に図り、国家試験対策の全面的支援を請うことができた。
・国試対策では、4年生秋期で月曜日から金曜日の１限から４限、2つの部屋を活用してグループ学習が行えるようにし、学生が勉強に専念できる枠組みを構築できた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

【教育活動】
・学科のカリキュラムポリシーに沿って教育を行うことができた。
・学位授与率（83.7%）と修業年限内学位授与率（78.6%）が改善したことは評価できる。
・再入学生が新カリキュラム下で卒業することができた。

【退学者対策】
・退学者は５名（1年生3名、2年生1名、5年目の留年生1名）であった。理由は、進路変更、成績不振、除籍等であった。
・留年生における退学が1名にとどまったことは評価できる。
・転学科は１名生じた（3年生1名）。理由は理学療法よりも他学科の教育内容への関心が高まったためであった。
・総合臨床実習で体調不良による実習中止が2名発生したが、留年・退学することなく単位を取得・卒業できたことは評価できる。

【資格取得に向けた教育】
・第59回理学療法士国家試験の合格率は新卒100%、既卒16.7%、合計81.1%であった（全国平均：新卒95.2%、合計89.2%）。

〈次年度への課題〉

【教育活動】
・これからの多様な社会や医療現場での問題解決能力を身につけるための授業内容を増やす。

【退学者対策】
・目標は、年間退学者３名以内とする。
・学生の変化を早期にキャッチして共有するため、教員間での情報交換体制の充実を図る。
・臨床能力や国家試験の基礎知識の定着を推進し、学生の自信をより深めるようにする。

【資格取得に向けた教育】
・理学療法士国家試験合格率100%をめざす。
・病院や社会で活躍する理学療法士の姿を多く示し、学生のキャリア形成術を高める教育を充実する。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

科研費：7件（代表3件，分担4件）
科研費以外の助成金等：4件（助成金1件，寄付金1件，企業との共同研究2件）
論文：16編（査読あり16編）
口頭発表：14件
外部講演・講義：4件
著書：3件

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・教員各自で自覚をもって研究活動に取り組むことで成果を上げた。
・企業との共同研究契約が新規に２件あり、社会実装につながる成果であった。

〈次年度への課題〉

・引き続き教員各自で研究活動に取り組むとともに、学内外の研究者と積極的な学術交流を図る。
・研究活性化のために、科研費等の応募を増やす。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・公開講座（まちなかゼミナール）で２名の教員が講義
・高梁市ミニディへ講師派遣（２回）
・インターナショナルフェスタにおける中学生との交流に２年生が基礎演習授業で参画した。
・１年生授業で地域住民の生活課題を共有するため、住民２名を講師として招聘した。
・臨床実習指導者講習会を教員１名が受講。次年度以降の講習会講師招聘に備える。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・各教員の専門性を活かした地域貢献活動が行われた。
・演習授業を通して地域課題を分析できる人材の育成に取り組むことができた。

〈次年度への課題〉

・地域連携・地域貢献を推進するために、今年度の取り組みを継続する。
・授業を通して、地域の人たちのウェルビーイング向上に関わる身体的、心理的、および社会的な課題を発見し分析する人材育成の充実を図る。
・異業種協働のための基礎力を身につけるためのキャリア教育を推進する。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・１年生は、「グローバルスタディーズ入門」科目で国際的な視点を学んだ。
・アメリカ・カナダ研修団の訪問時に、１年生数名が交流した。
・２年生は、インターナショナルフェアに参加し、留学生の母国のライフスタイルを学んだ。
・３年生は、「国際貢献・地域理学療法学」にて元JICA隊員で現在国内企業で活躍する理学療法士を招聘し、「海外における理学療法と国際貢献」を学んだ。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・各学年でそれぞれ国際化教育を行うことができたことは評価できる。

〈次年度への課題〉

・英語でコミュニケーションを図れる機会を増やす必要がある。

作業療法学科の自己点検・自己評価

学科長　　京極　真

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

・進路ガイダンスでは模擬授業や学部学科専攻の説明を行った。これには後楽館高校（1年生）、井原高校（1・2年）、第一学院高校（1・2年生）、倉敷中央高校（2年生）、福崎高等学校（1・2年）、上郡高等学校（2年）、高梁高校（2年）、玉島高校（1・2年）が含まれた。
・神辺高校（2年）や吉備高原学園高校（2年）の高校生に対し、大学見学の対応を行った。
・人間科学部人間科学科としてオープンキャンパスを開催した。オープンキャンパス（作業療法学専攻単独希望：1年2名、2年14名、3年23名、既卒3名。複数専攻／学科希望：1年2名、2年5名、3年10名）を開催した。
・高校生や保護者向けに、Instagram、X(旧Twitter）等のSNSを通じて情報発信した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・入学定員40名、入学者数12名、入学定員充足率30％
・昨年度、入学定員充足率42.5％であったため、今年度はそれを下回る結果になった。
・その理由として、進路ガイダンスは1・2年、オープンキャンパスは3年生・既卒の参加が2022年度に比べて減少するなど、今年度の受験生に人間科学部人間科学科作業療法学専攻を直接アピールできる機会が限られたことが考えられる。
・一方、今年度は進路ガイダンスを中心に1・2年生に本専攻をアピールできたことから、次年度以降の学生確保につながる可能性がある。

〈次年度への課題〉

定員充足率100%を達成するために、以下の方針で取り組む。
・入学後の学生満足度の向上を目指し、口コミによる学生確保を強化する。
・進路ガイダンス参加者およびオープンキャンパス参加者の満足度向上を目指し、「吉備国の作業療法学専攻で学びたい」というニーズを発掘し、受験行動につなげる。
・本専攻で学べる特徴を平易に示し、受験生にとって進学せざるを得ない理由を明確にする。
・町の魅力も受験行動に影響することから、高梁市という地域で学ぶ魅力もアピールする。
・Instagram、X（旧Twitter）などのSNSを用いた情報発信を強化する。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

【教育課程に関する検証】
・3つのポリシーに記載された事柄の実現に取り組んだ。
【退学者対策】
・設定された目標は、年間での退学者数を2名以内に抑えることだった。
・チューターを中心に、学生の視点を重視した丁寧な指導を実施した。
・入学生との面談週間や、春と秋に定期的に行う学生との面談に取り組んだ。
・学生面談で健康上の支援が必要と判断された場合は、ホットルームの早期利用を勧めた。
・休学している学生に対しても、定期的に本人や保護者と連絡を取り、自宅での状況を確認し、復学に向けた面談を行った。
・退学防止策として、個々のニーズに応じて転学科等の情報提供を含めた対策を行った。
【資格取得に向けた教育】
・国家試験の対策は1年生の時から始め、4年生になると秋期間中、月曜日から金曜日にかけて1限から5限まで集中的に行うようにした。
・理学療法学科、看護学科との国家試験対策を連携強化した。
・資格取得に向けて充実した実技教育を提供した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

【教育課程に関する検証】
・3つのポリシーに記載された事柄は着実に実施できた。

【退学者対策】
・退学者は2名であった。理由は成績不振、経済的理由、体調不良であった。
・転学科ガイダンスは3名が受けた。転学科先は経営社会学科であった。転学科希望の理由は、学習ニーズの相違、学業不振、体調不良等であった。
・新入生歓迎会、卒業生お別れ会を3年生を中心に実施し、居場所づくりを行った。

【資格取得に向けた教育】
・作業療法士国家試験の合格率は新卒100%、既卒33.3%、合計80%だった（全国平均：新卒91.3%、合計83.8%）。
・看護学科、理学療法学科との国家試験対策の情報共有を行った。また、理学療法学科とは国試対策の合同実施等の対策強化を行った。
・資格取得には、保護者のサポートが必要な学生がいるため、その学生の学習状況・心身の状態を共有するため保護者面談・連絡を行った。

〈次年度への課題〉

【教育課程に関する検証】
・教育はポリシーにそって着実に実施する。
・学生満足度を向上させるために、教育の質、学生指導の質を改善する。
・授業評価の結果を踏まえて、教育の質を改善する方策を検討し、実行する。
・講義、アクティブラーニング、実習など手段を用い、学生の能力向上に努める。

【資格取得に向けた教育】
・作業療法士国家試験合格率100%を達成する。
・1年次から4年次まで日々の講義から国家試験対策を行う。

【退学者対策】
・目標は、年間退学者2名以内を目指す。
・チューターが中心となって懇切丁寧に学生指導を行い、学生満足度向上につなげる。
・転学科ガイダンスについては、学園の方針を早めにキャッチし学生へ伝えるとともに、転学科先の候補となる学科長とも密に連携する。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

・科研費6件（代表3件、分担3件）、論文15編（査読あり11編、査読なし4編）、著書4冊（単著0冊、編著1冊、分担執筆3冊）、講演・口頭発表等12件、授賞：1件

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・教員各自で研究活動に取り組み、おおむね良好な結果であった。

〈次年度への課題〉

・教員各自で研究活動に取り組むとともに、教員間で積極的な学術交流を行うことによって、さらによい結果につながるよう工夫する。
・科研費への応募・採択の増加を目指す。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・高梁市介護予防事業、高梁市認知症サポーター養成講座、認知症及び認知症支援にかかる啓蒙活、ゲームジャム高梁・ICTクラブ高梁、ワークシェアリング就労支援プロジェクト、地域連携教育協力にかかるプログラムを精力的に実施した。
・園芸療法：グリーンヒル順正にて月１回の園芸活動を実施した。基礎作業学実習では、2年生がグリーンヒル順正で「その人らしい作業」を提供した。一般社団法人全国大学実務教育協会の園芸療法士の認定校としての申請を行なった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・高梁市介護予防事業、高梁市認知症サポーター養成講座、認知症及び認知症支援にかかる啓蒙活動、ゲームジャム高梁・ICTクラブ高梁、ワークシェアリング就労支援プロジェクト、地域連携教育協力は今年度の目標を達成できた。
・園芸療法：園芸療法ゼミナール3年生2名が、年５回の園芸活動に参加した。学生の定期的な訪問活動は、利用者の楽しみとなった。一般社団法人全国大学実務教育協会の園芸療法士の認定校として承認された。

〈次年度への課題〉

・高梁市介護予防事業、高梁市認知症サポーター養成講座、認知症及び認知症支援にかかる啓蒙活動、ゲームジャム高梁・ICTクラブ高梁、スポーツ交流会、ワークシェアリング就労支援プロジェクトを継続的に推進する。
・園芸療法：現在の活動継続に加え、園芸療法士を養成するために、グリーンヒル順正との協力体制を強化する。秋期から始まるガーデンニングの科目において、数回の施設訪問を実施し、利用者様の生活の質の向上と施設のサービス向上に貢献できるように努める。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・フィンドレー大学から作業療法学科への短期留学の実現に向けて検討を行った。
・グローバル・スタディーズ入門の科目において、アメリカ・カナダ研修団が来学した際には、国際的な視点が深まるよう、課題を担当する学生を中心に研修団に対し、英語を活用した学科の特色に関するプレゼンテーションができるよう学習指導及び学習支援を行った。
・多様な背景をもつ対象者への作業療法対応の経験的学習として、前年度に引き続き、講義内に経営社会学科の留学生との交流ができるよう講義連携の協力の依頼を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・フィンドレー大学からの短期留学受入に向けて、プログラム原案作成を検討した。
・グローバル・スタディーズ入門の科目において、受講生が国際的な視点で学習し、さらにアメリカ・カナダ研修団が来学した際には国際的な視点が深まるよう、研修団に対し、学生らによる英語を活用した学科の特色に関するプレゼンテーションが実施できた。
・講義内に経営社会学科を中心とする留学生との交流及び講義協力依頼を行ったが、留学生の都合により留学生との交流が中止となった。

〈次年度への課題〉

・引き続き、短期留学の実現に向けて、日程調整、プログラム作成などの実務を進める。
・学内外問わず、国際的視点及び実践による学習機会の獲得が促進されるよう、学生へアジア太平洋作業療法学会の開催（北海道・11月）について紹介する。
・多様な背景をもつ対象者への作業療法対応の経験的学習として、講義内に経営社会学科を中心とする留学生との交流ができるよう、講義計画の打ち合わせ相談の時期を早める。

心理学部の自己点検・自己評価

学部長　　森井 康幸

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

＊両学科ともに、学生個々にプレゼンテーションの機会を設けることで、ディプロマポリシー（自ら学ぶ力、生き抜く力、可能性を信じる力）のバランスよい育成に取り組んだ。

＊学力の客観的指標としてのGPAの値は、両学科ともに、そして学部全体で2.5以上を目標に取り組んでいる。

＊心理学科では、例年通り、心理学の基礎・基本となる知識や考え方の修得を基本方針とした学力向上に力を入れ、学内の授業だけではなく、外部団体が実施する「心理学検定」での１級合格（最低でも２級合格）を目指すように取り組んでいる。

＊子ども発達教育学科では、学科閉鎖に伴い、最後の４年生を全員、希望する資格取得のうえで卒業できるように個に応じた支援に取り組んだ。

＊電子黒板や生成系GPTの活用などについての研修会を行い、それらの教育的活用について取り組んだ。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

＊学力の客観的指標として、GPAの値 2.5 を目標としてしているが、心理学科4学年の平均は2.3、子ども発達教育学科は3.2という結果であった。

＊4年生の在籍者数は53名（心理46名、子ども教育7名）で、卒業は45名（85%）、そのうち留学生は4名であった。子ども発達教育学科の4年生7名は全員、希望する資格を取得のうえ、無事卒業した。

＊退学者数は除籍者を含めて12名（すべて心理学科）であり、退学率は7.8%であった。

＊教員免許の資格取得は、高等学校公民一種ならびに中学校社会一種2名（心理学科）、幼稚園一種3名、保育士4名（子ども発達教育学科）であった。

〈次年度への課題〉

＊ICTの活用を工夫・促進するとともに、個に応じた教育をどこまで実践できるかが課題である。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

＊科研費採択・継続：1件、科研費研究分担：2件、その他の研究助成金：3件

＊学術論文：11編（単著・第1著者9編、連名1編）、編著書等：3編、報告書：2編、口頭発表：29件

＊学校現場（小・中学校）における授業改善に向けた実践的データ収集と研究交流（9回）。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

＊科研費の新規採択はなく件数は減少したが、民間の研究助成の件数は維持できている。

＊論文等の作成については前年度よりも増加しており、研究活動はコロナ禍前に戻ってきたといえる。

〈次年度への課題〉

＊科研費の獲得に向けた活動を積極的に推進していくことは急務である。

＊学部の再編により、教員間の関係性に変化が生じることが予想されるが、相互交流などにより学術交流が研究の促進に向かうことを期待する。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

＊高梁市や総社市を中心に、学校や幼稚園などの教育関係、保健所や保育関係の現場を中心に、多くの地域連携・地域貢献活動が行われた。

＊子ども発達教育学科では、例年通り、幼稚園や小学校に出向いての学生主体の連携活動が行われた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

＊教育や保育の現場との連携や貢献活動は、大学の地を実社会に生かすとともに、本学教員からすれば、研究の場になっていることも多く、専門性を活かした活動となっている。

＊ボランティア活動も含めて、学生も参加している活動においては、実践的な学びの場となっている。

〈次年度への課題〉

＊現状の地域連携・貢献活動をより活発に継続していくとともに、学生主体の活動が増加するように工夫することが課題といえる。

＊子ども発達教育学科で取り組んできた活動をどう引き継いでいくかも課題といえる。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

＊留学生への指導については、日本語が不十分なことが多く、漢字にルビをつけるなどの対策をとった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

＊漢字文化圏からの留学生にとっては、ルビは内容理解にはあまり有効ではない感じであった。

〈次年度への課題〉

＊留学生の教育に関しては、とにかくまずは、日本語能力の向上であり、日本語の授業に限らず、日本人学生との交流など、様々な場で日本語学習の機会を用意することが必要であろう。

＊日本人学生も留学生と交流する機会が必要と考える。

心理学科の自己点検・自己評価

学科長　　森井 康幸

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

＊出張講義・校内ガイダンス・模擬授業・見学等に関しては、依頼のあった全てに対応した（計15回）。

＊オープンキャンパスでは、協力学生のメンバーをほぼ全ての回で固定し、参加した高校生に安心感を与えられるよう工夫した。
また、後日、可能な限り学科からのサンクス・レターを郵送した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

＊令和5年10月入学者数は2名（留学生）、令和6年4月の入学者数は31名で、1年次入学者は33名、定員充足率は82.5%であった（4月入学のみの場合、定員の77.8%）。

〈次年度への課題〉

＊「心理学部心理学科から人間科学部人間科学科心理学専攻へ」という名称・組織の変更が、発展的改変であることを印象づける方略を検討・実施する必要がある。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

＊公認心理師基礎受験資格や教員免許状の取得希望者への細やかなサポートにより、希望者全員が資格取得できるよう取り組んだ。

＊退学の防止策として、教員間での情報共有を密に行うとともに、問題を抱えた学生には早期に保護者と連絡を取り対応するようにした。

＊「心理学の基礎・基本となる知識や考え方、研究方法をしっかりと修得し・・・」というカリキュラムポリシーの基本方針に対応して、特に２年次に集中している必修科目の重要性を繰り返し学生に伝達した。

＊学力の客観的な指標として、平均 GPAの目標値を 2.5 に設定して、全学年達成を目指した。

＊心理学の基礎知識習得の動機づけを高めるために、一般社団法人 日本心理学諸学会連合の実施する「心理学検定」の受検を促し、卒業までに1級合格を目指して取り組むように働きかけた。

＊生成系GPTの活用などについての研修会を行い、それらの教育的活用について取り組んだ。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

＊公認心理師受験基礎資格取得者は7名であった。4年次になって資格取得をあきらめた学生が14名いた。大学院に進学したのはこのうちの3名（1名は他大学院）であった。
なお、1名が資格取得に必要な科目単位を修得できず留年することになった。

＊教員免許状取得者（中学校Ⅰ種社会と高校Ⅰ種公民）は、昨年と同様2名であった。

＊退学者は11名、除籍者1名であり、両者を含めた退学率は8.2%であった。

＊令和5年度のGPAは、1年次生2.39、2年次生2.27、3年次生2.4、4年次生2.5、全体で2.3という結果であり、目標の2.5には達しなかった。

＊心理学検定の受検結果については、今年度は、4年生の2名が最高級位である特1級に追加された。1級については、3年生の3名（1名は留学生）、2年生の1名が合格した。また、2級については、1年生1名の合格があった。

〈次年度への課題〉

＊3つのディプロマポリシー（自ら学ぶ力、生き抜く力、自分を信じる力）を育むためにも、様々な場面、特に学習場面で学生一人ひとりの自己効力感を高めることにより、学習意欲を高め、積極的な学習態度を涵養するとともに、専攻全体の平均GPAを2.5以上に引き上げる。

＊心理学検定の受検者を増やすために、検定結果を加味した学修評価の導入を検討することが必要である。

＊退学者対策としては、大学に全く出てこない学生、連絡が取れない（返信等のない）学生、集団の中での行動が苦手な学生、対人関係づくりそのものが苦手な学生などへの対応が課題である。教員間の情報交換やホットルームとの連携等をより一層密にするとともに、保護者との連携強化が重要である。退学率は5%台を目指す。

＊ICTの活用を工夫・促進するとともに、個に応じた支援・教育をどこまで実践できるかが課題である。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

＊科研費採択・継続：1件、科研費研究分担：2件、その他の研究助成金：3件

＊学術論文：9編（単著・第1著者8編、連名1編）、編著書等：3編、報告書：2編、口頭発表：29件

〈今年度の結果についての点検・評価〉

＊科研の新規採択数が減少しているが、申請そのものが増えていないことに問題がある。

＊学術論文数・口頭発表数は増加した、

〈次年度への課題〉

＊科研費のみならず、各種の民間企業・団体からの研究助成金の獲得に向けた活動を積極的に推進していくことは急務である。

＊学部の再編により、教員間の関係性に変化が生じることが予想されるが、相互交流などにより学術交流が研究の促進に向かうことを期待する。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

＊高梁市教育委員会：学校ふれあい促進事業・ふれあいインストラクター
＊高梁市教育委員会：特別支援教育推進事業・特別支援教育インストラクター
＊ペアレント・トレーニング：ベーシック講座．高梁市・NPO法人color，吉備国際大学心理・発達総合研究センター（計5回）
＊岡山県備中県民局：精神発達相談員
＊岡山県備北保健所：思春期ひきこもり相談・相談員
＊高梁市健康づくり課：心理発達相談員
＊高梁市行政不服審査委員会委員
＊高梁市国民保護協議会委員
＊高梁市教育委員会，高梁市いじめ問題対策連絡協議会：委員長
＊新見市教育委員会，新見市いじめ問題対策連絡協議会：会長
＊岡山いのちの電話協会：相談員継続研修・講師
＊岡山県立高梁高等学校，スクールカウンセラー
＊総社南高等学校：スクールカウンセラー
＊学生および地域住民を対象とした1泊2日の防災合宿訓練

〈今年度の結果についての点検・評価〉

＊例年通り、高梁市教育委員会や保健所などとの連携で、教員の専門性を生かした活動が行われている。

＊学部生や大学院生の現場実習の機会となっているものもあり、本学科と地域づくりとの関係づくりに貢献している。

＊防災合宿訓練については、看護学科、高梁消防署とも連携しながら行ったが、地域住民の参加は少なかった。

〈次年度への課題〉

＊学生の自主的な地域貢献活動の取り組みの活性化も望まれる。

＊学生および地域住民を対象とした防災・減災教育を、市レベルでの連携の下で行えるよう取り組んでいく。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

＊インターナショナルフェアに、複数のゼミの教員と学生が参加した。

＊留学生と日本人学生との交流の機会を作るために、一部の授業では混合グループを作成した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

＊学科内に留学生がいるにもかかわらず、日本人学生からの積極的な関係づくりが見られない。授業内でのグループ活動もその場限りという傾向が強かった。

〈次年度への課題〉

＊留学生（他学科の学生も含む）と日本人学生との継続的な交流の機会を設定し、相互理解を深める取り組みが必要と考える。

＊本学科の学生の場合、日本人同士でも関係づくりが苦手なものも多いという、より根本的な問題もある。

子ども発達教育学科の自己点検・自己評価

学科長　　川上 はる江

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

【自ら学ぶ力】：主体的な授業を目指して，事前の予習課題，個人思考，グループでの協同学習，全体思考，まとめといった問題解決的な過程を工夫した。
【生き抜く力】：表現力，コミュニケーション能力育成のため，タブレット端末を活用した話合い活動，単元計画作成後，プレゼンをして相互評価を行った。
【可能性を信じる力】：カリキュラム全体を通して，個に応じた少し高い壁を提示し，寄り添いながら達成させることで，自分に自信が持てるように支援した。
【学力指標】：学力の客観的指標としてのGPAの値は，2.5以上を目標に取り組んだ。
【退学者対策】：精神的に不安定な学生や留学生に対してピア・サポート体制を取り，学習面や生活面で支援するように心がけた。
【資格取得】:小学校教諭希望者のために採用試験対策講座を実施する。一般的な対策・・春30回，秋30回，校種別対策・・春30回，秋30回実施した。保育士資格取得に対してはゼミで対応した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

「自ら学ぶ力」「生き抜く力」「可能性を信じる力」
学力については，在籍者7名の内留学生2名と比率が高い中，一定の成果を上げている。
GPAの平均　R2年 2.38　R3年 2.95　R4年 2.67　R5年 2.98
・学生による授業評価アンケートの平均　R3年4.7　R4年4.8　R5年4.7　満足度は高い。
【資格取得】卒業生7名（内留学生2名）小学校教諭1種3名　幼稚園教諭1種免許状取得者4名，保育士資格2名　未取得者2名　学科として取得を進めたピアヘルパーの受験者2名，合格者2名
【就職状況】卒業生7名（内留学生2名）専門職として就職決定者4名　一般企業3名
【退学者，除籍者】0名　留学生1名は体調不良で一時は卒業が危ぶまれたが，ゼミ担当教員の支援もあり，無事卒業に至った。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

・学術論文2編（単著1編　第１著者１編）講演等19回
・講演に関しては，岡山県教育委員会主催研究会，中学校区研修会，小中学校授業研修会高梁市健康づくり課主催による養成講座等で，教師や市民向けに実施した。
・研究指定校からの要請を受け，授業実践や教育活動を通して実践的研究を推進した。
・通信教育技術の環境を整え，電子黒板，タブレット端末を活用した授業について，大学にて学科を超えてFD研修を数回実施した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・学術論文，講演等の活動は充実していた。特に教育現場との連携による教育実践研究は成果を上げている。
・ゲートキーパー養成講座の講師を務める等，一般市民に向けての社会貢献も積極的に行った。
・教員養成に関わる大学教育に通信技術を取り入れることは，法的にも求められているが，昨年に引き続き推進できた。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

【学生主体の連携】
- 出前講座（読み聞かせ活動）・ゼミ学生を中心に高梁市内幼稚園で読み聞かせを実施（計6回）
- 高梁市好き好き探検隊：以前より連携していた社会教育課の事業に教員志望3名の学生が参加。
- 教員志望学生3名が市内小学校に出かけ教育活動を支援した。それぞれ2か月間週1回（3名）

【出張講義等，岡山県小中学校と連携】
1. 総社市立総社中学校内研修会（道徳科），総社市立総社中学校（計4回）
2. 総社市立総社西中学校校内研修会（道徳科），総社市立総社西中学校（計3回）
3. 津山市立弥生小学校校内研修会（道徳科），津山市立弥生小学校（計2回）
4. 道徳の授業づくり研修会：岡山県総合教育センター―専門研修講座
5. 事例検討，教育相談担当者研修会，岡山県総合教育センター
6. 令和4年度高梁市ゲートキーパー養成講座，高梁市役所健康づくり課（計2回）
7. 学校適応支援「マルチレベルアプローチ」の理論とピア・サポート活動の進め方，中央中学校校内研修会，美咲町立中央中学校
8. 不登校を生きる，総社市親の会，総社市教育委員会
9. 協働・連携のためのファシリテーション，特別支援教育コーディネーター・新任特別支援教育コーディネーター研修講座，岡山市教育研究研修センター
10. いじめをなくそう，福田南中学校「いじめ防止講座」第３学年対象，倉敷市立福田南中学校（計2回）
11. 子どものSOSを聴く，学校保健会瀬戸内支部研修会，岡山県学校保健会瀬戸内支部
12. 学校環境適応感尺度「アセス」の活用方法，矢掛中学校校内研修会，矢掛町立矢掛中学校
13. 学校環境適応感尺度(ASSESS)の見方と活用，心理検査活用リーダー研修講座，岡山県教育委員会

〈今年度の結果についての点検・評価〉
- 教育と研究のバランスは意識できている。講義内容の充実とその成果を活かした論文執筆を行った。
- 学校や地域社会と往還しながら研究することで，大学の知を実社会に生かし，さらにそれを学生教育に貢献し充実を図ることができた。
- 通信教育技術を大学教育に取り入れることは，学校教育法施行規則の改正で求められている。環境整備，研修の実施などで昨年以上に充実することができた。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

【留学生に対する学習支援】
- 留学生の教材にはルビをうち，個別支援を行い授業内容が理解できるようにした。
- 学科会議で情報を共有し，「一人も取り残すことなく卒業させること」を目標にサポート体制を取った。
- 留学生は日本語が不十分な学生で欠席しがちだったので，ゼミ担当の教師による学習面と精神面のサポートに心掛けた。

【生活支援】
- ゼミ担当を中心に，懇談しやすい環境を整え，常に連絡しやすい体制にする。
- 教員同士の連携を密にし，1人で閉じこもらないように配慮する。

〈今年度の結果についての点検・評価〉
- 留学生の学習支援と生活支援の充実を図った。ゼミ担当を中心に学科教員全員で常に声掛けを行った。また，出席が危うくなったら学科会議で共通理解をし，全員卒業という目標達成へ向けてチームで頑張った。
- 2023年9月に中国から来ていた学生が卒業，2024年には同じく中国から来ていた学生が卒業した。どちらも中国で就職が決まっている。日本語試験は両名N2を取得している。

農学部の自己点検・自己評価

学部長　　相野 公孝

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

・オープンキャンパスでは、受験生の不安を取り去るために、受験生に年齢の近い在学生との交流の機会を増加させ、学部の情報はもとより、学生生活の情報も発信できるようにした。

・明るいキャンパスライフがどのようなものかを強調できるようにオープンキャンパス等の計画を行い、新設した海洋水産生物学科を最優先し、計画中の臨海実習棟の情報も含めさらに詳しく受験生に説明できるよう努力した。

・急遽、地域創成農学科においても、海洋水産生物学科と同様に学芸員の資格取得を可能とした。しかし、受験生へのアナウンスには及ばなかった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・農学部：入学定員90名、入学者数76名、入学定員充足率　84.4％（令和5年度入学）
・地域創成農学科：入学定員50名、入学者数39名、入学定員充足率　78.0％
・海洋水産生物学科：入学定員40名、入学者数37名、入学定員充足率　92.2％
・オープンキャンパス7回実施の参加人数は、地域創成農学科83組、海洋水産生物学科176組合計564名であり、昨年171名に比べ大幅に増加したが、出願数は、残念なことに地域創成農学科において減少傾向を示した。これは、受験生に本学科の魅力を十分伝えることができなかったことによるものと考えられた。海洋水産生物学科では、AO総合選抜・指定校推薦では出願数が増加したが、一般選抜では減少傾向を示した。

〈次年度への課題〉

・外部統計によると、一部の受験生は9～12月にかけて大学の選択を行なっており、今後、この期間の情報発信が必要となる。
・学芸員の資格取得に関する手続きが遅れてしまい。オープンキャンパス期間にはアナウンスができなかった。今後、情報として発信する必要がある。
・受験生目線での学生確保活動を行う必要がある。そのためにはオープンキャンパスにおいて、受験生に年齢の近い在学生との交流を、今年度以上に増加させ、学科の情報はもとより、学生生活の情報も発信できるようにし、受験生の不安を取り去り、明るいキャンパスライフがどのようなものか強調する必要がある。
・総合選抜方式で入学する学生が増加しているため、農業、海業などに広く興味を持った学生を発掘する必要がある。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

・退学者、除籍者の防止について、チューターによる早め早めの学習支援を徹底し、退学者率 0%を目指した。教授会及び学科会議において各教員間での情報共有を密に行い、問題を抱えた学生には早期に3者面談を行い、解決するよう努力し、よりきめの細かい対応を行った。
・対面授業もほぼコロナ禍前に戻り、順調に授業を行うことができた。また、コロナ禍で用いたTeams などのツールを最大限にいかし、効率よく授業を行うことができた。
・海洋水産生物学科が開設され、醸造学科が地域創成農学科に併合されたため、両学科ともにスムーズなカリキュラム移行に心掛けた。
・実学重視の教育を中心に、就業体験や能動的取り組みに重きを置き実施した。
・資格取得について、農学部で取得できる資格についての重要性を説明し、取得のための授業の履修を行うよう勧めた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・醸造学科：退学者1名、除籍者1名、地域創成農学科：休学者1名、退学者3名で、海洋水産生物学科：休学者1名と前年度(除籍1名のみ)に比べ増加した。 きめ細やかなチューター対応を行ったが残念な結果となった。
・2023年度から地域創成農学科と醸造学科が統合し、カリキュラムの大幅な変更を行ったが、混乱なく新カリキュラムに移行できた。
・海洋水産生物学科においても、順調にカリキュラムに沿った授業を押し進めることができた。
・以前から実学重視の教育を行なってきたが、本年度は両学科において、体験型学習を通じて、農業、海業への面白さや今後の学びについて考える場を作ることができた。
・食品衛生管理者及び食品衛生監視員の課程修了者は23名、卒業生の41.1%であった。

〈次年度への課題〉

・退学者0名を目指し、さらなる細やかな指導と、教員間における情報共有を強化する必要がある。
・実習科目とそれに関連する座学科目を連携・補完させ、原理と実践の両面から学習体得することで、学生の理解度と満足度をより高めることのできる講義体系の構築を目指したが、今後さらに強く押し進める必要がある。
・学芸員の資格取得を加えて、資格の取得の重要性を理解できるように説明する必要がある。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

・農学部全体を考えて、新しい分野のプロジェクト計画とその実施を行い、研究活動の活性化を図り、新しく農水省産学連携プラットフォームへ参画を計画した。
・海洋水産生物学科は、ゼロからのスタートとなり、研究環境の構築に力を入れ、臨海実習棟の整備を行なった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・研究活動実績は、学術論文が8編、学会等発表が11題、大学研究紀要が2編、国内助成研究発表が1題であった。
・科学研究費応募は1件で、そのうち採択は0件であった。助成・受託研究は4件、学内共同研究が1件、SDGs教育研究活動が2件採択された。他大学との共同研究が1件であった。
・農林水省産学連携プラットフォーム「昆虫ビジネス研究開発プラットフォーム（iBPF）」への入会手続きを行なった。

〈次年度への課題〉

・学科の枠を超えた新しいプロジェクトの構築が必要である。
・学術研究助成基金以外の各省庁が行なっている競争的資金の獲得。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・南あわじ市からの受託研究や、地元企業との連携による新商品開発、地元住民との交流を通して、地域の問題点の抽出、その解決方法を住民と共に探った。
・海洋水産生物学科の新設にともない、より広範囲の地域連携活動を模索し、学生の地域連携活動の積極的なサポートを行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・北淡路ワインぶどう研究会においてぶどうの生育状況調査を行い、北淡路テロワールの開発に貢献するとともに、ワイン製造のアドバイスを行なった。
・学生による獣害対策検討会での発表及び 箱罠の貸出とIoT自動撮影カメラの活用による捕獲活動の協力を行なった。
・両学科共同で、「国際フロンティア産業メッセ2023」にブース出展し、淡路島の魅力を来場者にアピールした。
・第1回ひょうご豊かなうみづくり推進大会」、「３海峡クリーンアップ大作戦」、「淡路島まるやま水族館」等のイベントに両学科の学生が運営スタッフとして参画した。

〈次年度への課題〉

・現状の取り組みを継続しながら、より広範囲の地域連携活動を行う。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・留学生との交流を活発化するイベントの計画を行い、相互の文化の理解を進めた。
・他国の食文化の理解を促進する実習を行なった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・フィンドリー大学およびオカナガンカレッジの短期留学生が農学部を訪問し、交流会では多数の学生が参加し親睦を深めることができた。
・対日理解促進交流プログラムアジア国際子ども映画祭2023に参加する訪日団(中国・ベトナム・カンボジア、30名)が来校し、学内見学、実験、茶道体験を通じ学生間交流が行われた。
・くにうみ祭及びさなぶり祭において、高梁キャンパスの留学生が参画し、両学科の学生との交流を行なった。
・インドネシアのテンペ、韓国のキムチなどの発酵食品の加工実習を実施した。

〈次年度への課題〉

・今年度と同様に留学生と日本人学生との交流を活発化する計画を図り、相互の文化の理解を進めていく必要がある。

地域創成農学科の自己点検・自己評価

学科長　　村上 二朗

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

・地域創成農学科においても、学芸員の資格が取得できるカリキュラムへの変更を行った。これは、同じ農学部の海洋水産生物学科では既に本資格の取得が可能であり、入学希望者の多くが本資格に魅力を感じていることからである。
・オープンキャンパスの魅力をさらに高めるため様々な取り組みを行った。ミニ講義においては、農や食だけでなく、高校生の関心が高いと思われる環境（SDGs）に関する講義を追加するなど多様性を図った。また、施設見学や体験コーナーでは、学生主導での実験機器の説明や試食品の製造提供を行い、本学科学生の主体性や活発性を強調した。さらに、入試広報室の協力の下、著明なユーチューバーと共にオープンキャンパスの様子を配信するなど、SNSの活用も精力的に行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・令和5年度：入学定員 50名、入学者数 39名、入学定員充足率 78.0%
・令和6年度：入学定員 50名、入学者数 29名、入学定員充足率 58.0%
・令和6年度の入学者数は、昨年度の入学数と比べ74.4%となり減少している。オープンキャンパス参加者は、前年度と比べ減少しているものの83組と堅調であり、またアンケートによる評価も悪いものではなかったが、各入試への出願数増加には貢献できなかった。
・急遽、学芸員の資格取得に関するカリキュラム変更を行ったため、12月までのオープンキャンパスではアナウンスできず、本年度に関しては学生獲得にはつながっていない。
・新入生のうち1名は編入学である。

〈次年度への課題〉

・オープンキャンパス等で、学芸員資格の取得が可能であることを全面的に打ち出し入学者数の増加を目指す。また、その効果を学部/学科内で検証していく。
・海洋水産生物学科受験者の第二希望として、本学科を選択するケースが散見されることから、本学科独自の楽しさや優位性を明確化しアピールしていく。
・在学生が主体的に活躍するオープンキャンパスを実践し、高校生や保護者にとって、親しみ安く、キャンパスライフを実感できる場を提供していく。また、高校ガイダンスや出張講義等で、本学科の多様な取組を紹介し、その魅力を発信していく。
・従来からの問題である淡路島内出身学生や女子学生の比率の少なさの解消を目指し、地域密接型の活動やSNSなどを活用し志望者の増加を図っていく。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

・実習や実験科目とそれに関連する座学科目を連携・補完させ、原理と実践の両面から学習体得することで、学生の理解度と満足度をより高めることのできる講義を実践した。具体例として、本学科1回生の必修講義である「フィールド実習」と「栽培学」を連携させ、実習で栽培している作物を座学講義でより深く解説し、さらに収穫物を実際に調理し食すことで一層の興味を引き出す取り組みを行っている。
・退学者対策として、学科会議等で連続欠席者などの情報を頻繁に共有し、チューターのみならず学科教員一丸での徹底的なフォローを実践した。また、早期に三者面談を実施し問題解決に向け細かな対応を行った。
・本学科で取得できる資格に関して内容や有用性を説明し、資格取得に必要な講義の履修を推奨した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・実習科目と座学科目の連携については、学生からポジティブな評価を受けているが、今後アンケート結果などを詳細に分析し、担当教員間で評価していく必要がある。
・退学者対策に重点を置いてきたが、残念ながら3名が退学を行った。このうち2名は経済的な理由で、1名は留学生でホームシックによるものであった。また、体調不良で1名が休学している。
・食品衛生管理者および食品衛生監視員の課程修了者は15名、卒業生の36.6%であった。

〈次年度への課題〉

・前年度と比べ退学者数が増加したことから、教員間の情報共有とフォローをさらに強化し、退学者0を目指す。
・実習科目をより充実させ、また座学科目との連携をさらに推進し、学生の理解度と満足度をより高めることのできる講義を展開していく。
・食品衛生管理者や次年度から取得できる学芸員の資格に関してその重要性を説明し、取得率の向上を目指す。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

・学内外にとらわれず共同研究を推進し、また海洋水産生物学科が開設されたことから、新学科と積極的に連携し共同研究の提案を行った。
・農林水省産学連携プラットフォーム課題の新規参画を推進。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・研究活動実績は、学術論文が4編（そのうち1遍は国際誌）、学会・研究会等発表が4題、大学研究紀要が1編、国内助成研究発表が1題であった。
・農林水省産学連携プラットフォームに関しては、すでに「アグリ知識ベースによる新たな農業基盤の創出と知財化によるグローバル展開研究開」に参加しているが、新たに「昆虫ビジネス研究開発プラットフォーム（iBPF）」の参画手続きを行った。
・競争的資金プログラム（JST)1件、他大学・研究機関との共同研究2件を行っている。

〈次年度への課題〉

・海洋水産生物学科との共同研究の具現化。
・競争的資金の獲得。
・国際学会や国際雑誌での発表奨励。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・高大連携事業の一環として、島内の淡路高校の生徒（約40名）にキャンパス見学会を開催し、施設見学のみならず、本学科教員が大学に進学するメリットを解説した。
・南あわじ市との受託研究の継続、地元企業との連携による新商品開発に取り組んだ。一連の研究活動の多くは本学科学生も携わっており、大学と地域をより深く結びつけることに貢献している。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・伊弉諾神宮神殿跡から採集した酵母菌をもとに、島内醸造会社との共同開発により清酒の販売を実現している。さらに酵母菌の独自性に関する研究を行い、より希少性を高めた製品の開発が期待されている。
・北淡路ワインぶどう研究会においてぶどうの生育状況調査を行い、新規ワインの開発に貢献するとともに、製造のアドバイスを行なった。
・獣害対策に関する研究をさらに推進し、IoT自動撮影カメラなどを使用したICT技術を活用した新たな対策を導入した。

〈次年度への課題〉

・本学科では、数多くの地域連携活動を行ってきているが、その反面、活動内容やその成果に関する情報発信は十分であるとは言えない。そこで、WebやSNSを通じて、地域社会に分かりやすく発信し、本学科の意義を伝え知名度を上げていく。本学科の弱点である地元学生の少なさを解消していく上で重要な取組と考える。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・「地域創成農学概論」や「グローバルスタディーズ」などの講義で、世界の食料事情や環境問題を解説し、また海外で就労経験がある教員がその体験談やメリットを紹介することで、海外への関心を高めるよう努めた。
・本学科主催行事のさなぶり祭では、高梁キャンパスの留学生が参加し本学部学生との交流を図った。
・また短期留学生の訪問時など、海洋水産生物学科と協力し、海外留学生と日本人学生との交流を促進した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・本学の教育交流協定校であるフィンドリー大学(アメリカ)およびオカナガンカレッジ(カナダ)の短期留学生が農学部を訪問した際には、本学科の学生も多数参加し積極的な交流を通じて親睦を深めることができた。
・南あわじ市で開催されたアジア国際子ども映画祭に参加する高校生を主体とした訪日団(中国・ベトナム・カンボジアの3か国)が来校した。学内見学、実験、茶道体験を通じ、英語を母語としない国同士や年齢が異なる学生間の交流が行われ、貴重な体験となった。

〈次年度への課題〉

・本学部の留学生は少なく、交流の機会は多くはないのが状況ではあるが、次年度も引き続き、本学科のフィールド実習講義で行う田植え行事（さなぶり祭）等に、他学部/学科の留学生を招待し本学科学生との交流の場を設け、文化的な多様性の理解を深める場を提供していく必要がある。

醸造学科の自己点検・自己評価

学科長　　村上 二朗

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

・本学科は新入生の募集をすでに停止しているため、退学者対策に注力した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・担当教官による連続欠席時の早期フォローや三者面談などを行ったが、1名が成績不良を理由に退学を選択した。また、除籍者が1名あった（交通事故による死亡のため）。
・体調不良により1名が休学中であるが、担当教員が頻繁に連絡を取り、復学に向けサポートを行っている。

〈次年度への課題〉

・醸造学科の担当教員は、現在、地域創成農学科と海洋水産生物学科に分かれ所属しているが、各教員間の情報共有と担当学生へのフォローを継続・強化し、退学者0を目指す。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

・実習や実験科目とそれに関連する座学科目を連携・補完させ、原理と実践の両面から学習体得することで、学生の理解度と満足度をより高めることのできる講義を実践した。
・本学科で取得できる資格に関して内容や有用性を説明し、資格取得に必要な講義の履修を推奨した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・実習科目と座学科目の連携については、学生からポジティブな評価を受けているが、今後アンケート結果などを詳細に分析し、担当教員間で評価していく必要がある。
・食品衛生管理者および食品衛生監視員の課程修了者は7名、卒業生の46.7%であった。

〈次年度への課題〉

・本学科は令和7年度末での閉設が予定されているので、留年者をださいように計画的な単位の履修や習得を徹底的に指導していく。
・食品衛生管理者や次年度から取得できる学芸員の資格に関してその重要性を説明し、取得率の向上を目指す。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

・学内外にとらわれず共同研究を推進し、また海洋水産生物学科が開設されたことから、新学科と積極的に連携し共同研究の提案を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・旧醸造学科所属教員による研究活動実績は、大学研究紀要が1編、学会・研究会等発表が5題であった。

〈次年度への課題〉

・海洋水産生物学科との共同研究の推進。
・競争的資金の獲得。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・地元企業との連携による新商品開発に取り組んだ。一連の研究活動の多くは本学科学生も携わっており、大学と地域をより深く結びつけることに貢献している。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・伊弉諾神宮神殿跡から採集した酵母菌をもとに、島内醸造会社との共同開発により清酒の販売を実現している。さらに酵母菌の独自性に関する研究を行い、より希少性を高めた製品の開発が期待されている。
・北淡路ワインぶどう研究会においてぶどうの生育状況調査を行い、新規ワインの開発に貢献するとともに、製造のアドバイスを行なった。

〈次年度への課題〉

・本学科では、数多くの地域連携活動を行ってきているが、その反面、活動内容やその成果に関する情報発信は十分であるとは言えない。そこで、WebやSNSを通じて、地域社会に分かりやすく発信し、本学科の意義を伝え知名度を上げていく。本学科の弱点である地元学生の少なさを解消していく上で重要な取組と考える。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・短期留学生の訪問時など、地域創成農学科および海洋水産生物学科と協力し、海外留学生と日本人学生との交流を促進した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・本学の教育交流協定校であるフィンドリー大学(アメリカ)およびオカナガンカレッジ(カナダ)の短期留学生が農学部を訪問した際には、本学科の学生も参加し積極的な交流を通じて親睦を深めることができた。
・南あわじ市で開催されたアジア国際子ども映画祭に参加する高校生を主体とした訪日団(中国・ベトナム・カンボジアの3か国)が来校した。学内見学、実験、茶道体験を通じ、英語を母語としない国同士や年齢が異なる学生間の交流が行われ、貴重な体験となった。

〈次年度への課題〉

・次年度も引き続き、留学生との交流の場を設け、積極的な参加を促していく。

海洋水産生物学科の自己点検・自己評価

学科長　　堀　豊

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

・定員充足率100％を目指し、オープンキャンパスの強化とSNSやラッピングバスの活用により、新学科の認知度を高めた。
・オープンキャンパスの強化：学科概要説明の際に、なるべく新入生が実際に活動している写真を多く取り入れた。教員によるミニ講義を実施し、学科で学ぶ内容をより具体的に掘り下げた。学生が実習で利用している水槽室に案内し、水生生物飼育の魅力をアピールした。水中ドローンを実際に操作してもらい、調査の楽しさを強調した。
・SNSの活用：著名なユーチューバーにキャンパス紹介を依頼し、学生と教員が協力して学科のアピールに努めた。インスタグラムを活用し学生と教員から情報発信に努めた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・入学定員40名、R5年度入学者数37名・入学定員充足率93％、（R6年度入学者数50名・充足率125％。）
・昨年度と比較して入学者数は増加し、目標である定員充足を達成する見込みである。
・総合型選抜(AO総合)はⅠおよびⅡ期で定員を満たし、Ⅲ期での募集は停止した。
・1名が先天性疾患の治療のため休学したが、退学および除籍者はゼロであった。
・それぞれの取り組みが新学科名称の認知度向上と、新学科で学ぶことの楽しさを伝えることにつながった。

〈次年度への課題〉

・定員確保を持続するために、応募者の少ない淡路島内高校生への働きかけを強化するとともに、地域における学生の活動場面を増やし、学科名称の認知度向上に努める。
・近隣他大学の施設拡充に負けないよう、特色ある学科目の内容を充実させるとともに、海に囲まれた淡路島という地域の魅力発信に努める。
・農学部の受験者数・入学者数が多い大学近隣（近畿・中四国）の高校や予備校への広報活動を積極的に実施する（コーディネーターとの高校訪問、海洋水産生物学科在学生の母校へ学生と共に高校訪問）。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

・学科会議等で学生情報の共有に努めた。
・「海業」全般に関する基礎的な知識の習得を目標として、体験型学習を行った。
・入学後の早い時期に学生一人に一台ずつ水槽を管理させ、水生生物の採集や飼育を体験させた。また全員に海釣りの体験をさせ、釣り上げた魚の同定実習を通じて水生生物学の学習効果を高めた。
・淡路島内の魚貝類種苗生産施設を見学し、大規模な生物飼育を体感させた。
・兵庫県と連携し、調査船による海洋観測を体験させ、海洋環境を考える契機とした。
・新任の教員が多いため、相互に授業を参観し、終了後に問題点を指摘し合い、内容の充実に努めた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・学科教員が連携して学生の出席状況や課題提出状況を含めた情報を共有することで、チューター以外の教員からも学生への指導をきめ細かく行うことができた。
・体験型学習を通じて水生生物や海に関する経験値を高めることができた。
・実習では教員-学生間での一方向指導ではなく、学生から教員への質問や意見が積極的になされる双方向授業を行うことが出来た。また学生間での教え合いも自然に行われ、アクティブラーニングとしての効果はもちろん、学生間のコミュニケーションのきっかけにもつながった。
（・1年次終了時点でのGPAの平均は2.81、平均単位取得数は43.1で、76%の学生が40単位以上を取得するなど概ね良好である。）

〈次年度への課題〉

・水産物の食品加工やレジャー関係についても経験値を上げていく必要がある。
・調査船乗船については人数制限があったため、さらに機会を増やし全員が体験できるようにする。
・水族館勤務を目指す学生が多いため、海洋あるいは水生生物に関わる専門科目に対しては高い意欲を示す一方、基礎科目や教養科目に対する意識の低さが目立っている。専門学校と異なり、大学では専門以外にも広い学びが可能なこと、またこのような広い学びが卒業後の人生に活きてくることを早い段階で指導する必要がある。
・1年秋学期は学科特有の専門科目が少なかったこともあり、修学意欲の低下が見て取れた。次年度は、1年春学期の専門科目の一部を秋学期に移動し、基礎科目や教養科目も含めた学生の修学意欲の維持向上に努める。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

・学科としてゼロからのスタートであったため、今年度は主に分析、観測用の機器調整や調査船の確保等、研究基盤の整備に努めた。
・淡路島内の魚貝類種苗生産施設の利用や兵庫県の実施する海洋観測結果の共有など、講義の一環として見学を行うだけでなく、今後の研究につながるような共同研究や連携を模索した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・今年度の研究活動実績は、査読付き国際学術論文が3編、国際学会発表が1題、国内学会発表が2題、大学研究紀要が1編、国内助成研究発表が1題であった。
・科学研究費応募は2件で、そのうち採択は0件であった。
・学内共同研究が1件、SDGs教育研究活動が2件採択された。
・他大学との共同研究が2件であった。

〈次年度への課題〉

・同じキャンパスである地域創成農学科とも連携し、学科の枠を超えた新しい取り組みにチャレンジする。
・臨海実習棟の完成に伴い、現場海域における調査研究や陸上養殖関連研究などを見据えた整備をさらに進めていく。
・臨海実習棟周辺海域の環境モニタリングに着手する。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・地元自治体や漁業者、民間団体等と連携し、イベントや会議に積極的に参加した。
・大学公開講座「吉備国際大学 地域創成生涯学習講座」を開講し、大学として地域との連携・地域への貢献を図った。
・淡路島内の高大連携協力協定校である「兵庫県立津名高等学校」において、理数探究における探究活動のテーマ設定に関して支援（指導・助言）を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・11月に兵庫県が開催した「第1回ひょうご豊かなうみづくり推進大会」、同じく11月に「うず潮を世界遺産にする淡路島民の会」が開催した「３海峡クリーンアップ大作戦」、2月に地元漁業者及び桂浜水族館等と本学が共催した「淡路島まるやま水族館」等の地域振興イベントに学生が運営スタッフとして参加し、兵庫県、淡路島、南あわじ市の活性化にそれぞれ寄与するとともに、大学名、学部名、学科名の認知度を向上させた。
・展示会「国際フロンティア産業メッセ2023」に農学部2学科共同でブース出展し、本学の研究・教育や淡路島の魅力を高校生やその他の来場者にアピールするとともに、近畿・京阪神地域の大学・高専や各団体などとの横のつながりを作った。
・大学公開講座には延べ81名の参加があり、積極的な質問もしていただき、地域の住民の皆様方に新学科を知ってもらう良い機会となった。

〈次年度への課題〉

・交通の便が悪いことから、学外のイベントに学生が参加しやすくなるよう公用車や学園バスの活用を進める。
・大学、学部、学科名等のわかるパーカーやビブス等を整備し、認知度の向上に努める。
・灰ワカメ生産技術の伝承、アカモク、モズク、ナマコ、イガイの増殖等、地元からの要望が強い案件について優先的に研究に取り組む。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・地域創成農学科と協力し、海外留学生と日本人学生との交流を促進した。
・海は世界に繋がっており、海の資源を考えるうえで国際的な視点・視座は必要である。
そのためグローバルな課題や取り組みを講義の中で積極的に取り入れ紹介した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・2023年6月23日に本学の教育交流協定校であるフィンドリー大学(アメリカ)およびオカナガンカレッジ(カナダ)の短期留学生が農学部を訪問した。その際の交流会では多数の学生が参加し親睦を深めることで、語学学習の意義や意欲を再確認することが出来た。
・2023年12月15日にJENESYS事業(外務省が進める対日理解促進交流プログラム)の一環として、南あわじ市で開催されたアジア国際子ども映画祭2023に参加する訪日団(中国・ベトナム・カンボジアの3か国)が来校した。学内見学、実験、茶道体験を通じ、英語を母語としない国同士の学生間交流が行われ、これまで訪問したことのない国やそれぞれの国の文化を意識するなど、貴重な体験となった。

〈次年度への課題〉

・さなぶり祭、くにうみ祭等の留学生も参加するイベントにおいて、魚介類を含めた様々な食材によるバーベキュー等を行い日本の食材についてよりよく理解してもらう。

外国語学部外国学科の自己点検・自己評価

学科長　　畝　伊智朗

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

１．進学支援企業主催の高校内説明会（24件）、来キャンパス型の高大連携活動（4件）、出張講義（1件）を行った。今年度の特筆すべき広報活動として、伊藤奨学生、外国学科のスタディアブロード特別奨学生、学業優秀者への特別奨学生の3つの奨学生制度の受験生への周知をはかるために、入試広報室と連携して、チラシ・パンフレット、Webバナーを制作し、夏以降のオープンキャンパス、各種説明会で配布、説明を行った。

２．オープンキャンパスでは、外国学科の卒業生を招へいし、プレゼンテーション形式で大学生活から社会人生活を紹介してもらい、キャリアのイメージも受験生に持ってもらうような取り組みをした。昨年度に引き続き、在学生の留学報告と卒業生の発表の聴講は、①保護者のみ、②保護者＋受験生の2部制とし、理解を深めてもらう工夫をした。プログラムの後半のフリートークは、受験生、保護者の着席位置に教職員、在学生、卒業生が個別に赴き、様々な質問に答える形式をとった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

○入学定員：50名、令和5年10月入学生：3名、
令和6年4月入学生：24名、入学定員充足率：54％

１．高校内説明会では、対象生徒が1、2年生であり、進路に向けたの文理選択の決定に合わせて行われることが多い（本年度285名を対象にした）。また、1日の開催のうち他分野の説明に赴く生徒もおり、多い高校で3回説明会を行うこともあった。来キャンパス型の高大連携活動では、依頼側の高校においてあらかじめテーマが設定され、参加人数も10名程度である場合が多い。在学生との交流もあり、高校生が大学進学を実感できる唯一の機会でもあるので、体験型授業のほかに授業参観も取り入れて、観察して考える機会も設定した。

２．本年度（12月実施分まで）のオープンキャンパス参加生徒数は、79名（前年度同時期96名）で20%ほど減少した。オープンキャンパスでは、在学生とのフリートーク（受験生、保護者）が、満足度が高いため、そこに重点を置いている。今年度は卒業生を招へいした。ミニ講義の間は、保護者向けの説明会となり、在学生と卒業生がそれぞれ発表し、その後に保護者と大学関係者だけでしかできない質問を受け付けることをした。さらに保護者の待機時間に在校生や教員が机間巡視をして保護者に積極的に声掛け、気軽に質問ができるようにしているが、これも保護者にとって満足度が高そうである。よって、次年度もこれらに重点を置いたプログラムとしたい。卒業生による大学生活や留学経験の紹介も好評なので続けて行きたい。

〈次年度への課題〉

１．高校内説明会での本学科への依頼は、外国語・国際系の分野である。この分野は、大学卒業後の進路選択の幅が多く、最近は、語学系、観光系の専門学校、観光系専門職大学とも競合する場合がある。また、進学対象となる大学で留学を必修にしている大学が全国的に多い。しかし、留学選択にしている大学との競合を考える必要があり、高校生がそちらに流れないような工夫が必要である。。

２．オープンキャンパスでは、在学生とのフリートークや、留学の経験を話すことができる在学生をオープンキャンパスに参加してもらえるよう毎年育成する必要がある。2024年度早々にもオープンキャンパスボランティア募集を始めたい。在学生スタッフへの謝金が1,000円ということで、在学生スタッフが集まりにくい（休暇中であれば交通費で赤字になったり、アルバイトのほうにとられることもある。また、参加予定学生が来なかったり来ない予定の学生が来たりと、調整にかなり時間を取られるのが大きな課題である。オープンキャンパス参加生徒数も昨年度よりも減少していることから、広報用媒体を充実させ、生徒・保護者・高校教員に関心を持ってもらい参加者数増につながるような取組みを行う。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

自ら学ぶ力、生きぬく力、可能性を信じる力を涵養すべく教育の充実に取り組んでいる。教育の充実に関する今年度の事例として一部を以下に記す。

（１）All English科目の国際開発研究の授業で、3週間にわたり「貧困」をテーマにしてグループワークとグループ発表を実施した。まず、Poor Economicsに掲載されているPak Solkinのケースを宿題として読んでくるように指示。そのケースをもとに、4－5人のグループで、Pak Solkinが極度の貧困状態になる原因を議論し、A3版の紙に要点を取りまとめてもらい、発表してもらった。それを通じて、貧困の多面性を理解してもらった。次の週に、各グループに国（インドネシア、ベトナム、スリランカ、日本）を割り当て、その国の貧困状況、政府の貧困対応戦略、援助国・機関の取組みなどをグループで調べ、PPTスライドに取りまとめた。第3週で、各グループが割り当て国の貧困状況と政府戦略などを発表。各グループへのコメント（英語）を取りまとめ、Teamsを通じてシェアした。

（２）英語教員養成課程において、教育実習のための教科指導を強化した。３・４年生合同授業を通して、実習を終えた4年生の模範授業を体験したり、教育現場で活躍する先輩の授業を見学したりすることにより、より実践的な指導方法を学ぶことができた。また、学生の司会によるディスカッション形式で授業分析を行うことにより、より主体的に指導のポイントや改善点を考えさせることができた。

（３）アクティブ英語Ⅱの授業にて、英語でインタビューをするアクティビティを取り入れた。ペア活動として、職業についている人物を想定しインタビュー形式でオリジナルの質疑応答を作成、発表。

（４）パソコン必携化（BYOD）で学生が持参したパソコンに、フリーの2DCAD、3Dモデラーをインストールし、毎週決められた図形制作等の課題に取り組んだ。そのとき、周囲の学生のようすを見て、自分ができない場合は支援を要請し、できない学生が周囲にいる場合は支援を申し出る。（退学者・除籍者、GPAの前年度比較など）

＊外国学科の退学者・除籍者は、3月29日現在1名である。

＊GPAの前年度比較　各学年ごとの平均GPAは、1年生2.53、2年生2.52、3年生2.87、4年生2.67となっている。前年度と大きな変化はない。

＊TOEIC IPのテストを8月並びに2月に実施し、英語コミュニケーション能力の把握並びにスタディー・アブロード（留学）に向けた基礎資料として、活用している。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

今年度の事例（１）～（４）に対する点検・評価は以下の通り。

（１）難易度の高いグループワークと想定したが、All Englishであるにもかかわらず、留学生と日本人学生が連携し、質の高い議論ができた。学生相互の信頼醸成、連帯感が高まった。母国の政府が、「貧困削減戦略文書Poverty Reduction Strategy Paper」を作成し、援助国・機関と連携して、政府の重要施策として各種貧困対策を実行していることを学生が理解してくれた。

（２）より実践的な指導方法を展開することにより、学生の指導力が向上した。また、教員採用試験を受験しようとする学生も３名と増加した。（昨年度は１名）また、教員採用試験に１名が合格した。

（３）発表中はスクリプト、メモなどは一切使わないというルールであったため、かなり練習を重ね、積極的な態度で臨んでいた。

（４）教員が机間巡視をするより短い時間で講義が進行できるため、活用をしている。

（退学者・除籍者、GPAの前年度比較など）

＊外国学科あげての各種取組み、個別指導、カウンセリングが功を奏し、退学者・除籍者をなくすことができた。外国学科並びに岡山キャンパス事務室のチームワークの成果。休学している学生が1名おり、1年間見守ってきた。

＊GPAの前年度比較　前年度の学年ごとの平均GPAは、1年生2.59、2年生2.64、3年生2.62、4年生2.96であったが、本年度は、1年生2.53、2年生2.52、3年生2.87、4年生2.67となっている。前年度に比し、学年平均のGPAには大きな変化はない。

＊TOEIC IPのテストを受験しない2年生、3年生がおり、スタディー・アブロードの成果を英語コミュニケーション力で評価できない場合が多い。

〈次年度への課題〉

今年度の事例（１）～（４）を踏まえた次年度へ向けての課題は以下の通り。

（１）今年度の実施経験をもとに、このやり方をモデル化し、国際開発のコア概念のひとつである貧困の理解と具体的な対策の重要性を学生により一層理解してもらえるものに改善する。

（２）１、２年生における教職履修過程において、より実践的な指導を展開するために、現場の教員を招聘して研修を行ったり、ボランティアやインターンシップ等の学校体験を機会を増やしたりすることを検討していく。また、留学時に海外の学校において教育活動を体験できるようなカリキュラムを開発していく。
（３）（４）学生の様子を見ながら改善し引き続き授業の充実に取り組んでいく。
以上のほかにもアクティブラーニングを積極的に取り入れるなどして教育の充実に向けて引き続き取り組んでいく。
（退学者・除籍者、GPAの前年度比較など）
＊外国学科の退学者・除籍者対策を、本年度の結果を単発に終わらせないよう、一丸となって取組む。
＊GPAの前年度比較　前年度と比較し大きな変化はなかったが、学生個々の変化をみるとGPAが低下している学生もいるので、ていねいな個別指導に一層努める。
＊英語コミュニケーション能力の把握や学修成果の見える化を行うためのツールとして、8月並びに2月に実施しているTOEIC IPのテストをより一層活用するよう、2年生以上の学生にゼミを通じて周知し利用度を向上させる。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

外国学科教員の研究実績は、次のとおりである。
（学術論文）
・髙木秀明、専門日本語の習得方法についての一考察、グローカルデザイン論攷、8巻1号、(2024年)
・フォーセット ジョン、Eric Ambler and The Schirmer Inheritance; Writing For The Postwar World グローカルデザイン論攷7(1) 25-34 (2023年)
・金沢真弓、A Global Englishes Approach: Fostering Positive Attitudes towards English Use 吉備国際大学研究紀要（人文・社会科学系）第34号 (2023年)
・金沢真弓、The Importance of ‘World Englishes’ Education - how it affects Japanese learners’ attitudes towards English- 論説史料保存会　英語学論説史料第55号 372-378 (2023年)
・畝　伊智朗、紛争影響地域における住民の豊かさを測定する―コンゴ民主共和国の事例から―、グローカルデザイン論攷7(1) 5-24 (2023年)
（雑誌投稿等）
・佐藤　匡　標準偏差って何だろう　全要研のページ　SSK難聴者の明日　全難聴機関誌 No.202　2014.1　P2
（講演・口頭発表）
・池上　真由美「意欲を引き出す授業づくり」美咲町立旭学園（義務教育学校）校内研修会　指導助言及び講演　令和５年７月
・池上　真由美「コミュニケーション力を育成する多様な指導方法」美咲町立旭学園（義務教育学校）校内研修会　指導助言及び講演　令和５年８月
・池上　真由美「これからの外国語科の授業づくり」美咲町英語教員研修会　指導助言及び講演　令和５年10月
・Ian Warner「イギリスの文化・習慣と英会話」吉備国際大学まちなかゼミナール (2023年3月)
・Ian Warner「English proficiency for engaging with global issues」一般社団法人大学英語教育学会主催第50回サマーセミナープログラム(ポスター発表要旨) P.15 (2023年8月)
・Ian Warner「イギリスの映画と社会～英語で学ぶイギリスの文化～」吉備創生カレッジ (2023年11月)
・Ian Warner「イギリスの暮らしと人々」吉備国際大学まちなかゼミナール (2023年12月)
（著書・作品等）
・下山進 監修、科学の目でみる琉球王国の色とその色材～国宝・琉球国王尚家伝世品をはじめとする琉球・沖縄の染織品を中心に～、初版、一般財団法人 沖縄美ら島財団 (2024年)、分担：下山進、下山裕子、大下浩司、佐々木益、2章 調査作品と非破壊分析果、pp.109-110；大下浩司、佐々木益、2.2 沖縄美ら島財団所蔵作品および関係機関所蔵作品の色材・素材分析結果、pp.167-203；大下浩司、2.3 沖縄県立博物館・美術館所蔵および寄託作品と関係機関所蔵作品の色材・素材分析結果、pp.204-216

〈今年度の結果についての点検・評価〉

業務量過多の中、一定数の研究業績を公表できたことは良かった。

〈次年度への課題〉

教員の専門分野が多岐にわたっていることもあり、単著の論文が多いが、学科教員で研究グループを組み、共同研究を行い、その成果を発表すべく検討を進めたい。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

1）公開講座

＊11月　「イギリスの映画と社会～英語で学ぶイギリスの文化～」吉備創生カレッジ（2023年11月）担当：ワーナー先生

＊7月8日　まちなかゼミナール　「アイルランドの英語、日常会話、独自表現、発音、ゲール語(Gaelic）の背景について」担当：フォーセット先生

＊12月2日 まちなかゼミナール　「イギリスの暮らしと人々」担当：ワーナー先生

＊3月9日　公開講座 まちなかゼミナール学習観光講座（酒蔵めぐり①独立行政法人酒類総合研究所 ②賀茂鶴酒造他、西条酒造施設群の酒蔵）担当：大下(朋)先生

2）ボランティア活動

【インバウンド通訳案内サークル／顧問：大下(朋) 先生】

＊令和5年10月29日(日) 地域の客間「土屋邸」（倉敷市本町）×インバウンドサークルコラボ企画「独歩ビールで夕暮れを楽しむ会」企画・運営

＊令和5年11月1(水)-2日(木)「地域留学：持続可能な地域の暮らしと仕事を学ぶ」モニターツアーへの学生参加。地域留学の体験、PR動画への出演などに協力（倉敷市本町／(有)くま）

＊令和5年11月25日(土) DEAN&DELUCA×土屋邸コラボ企画へのインバウンド通訳案内サークルメンバーボランティア参加。集客、通訳案内、運営などに協力。

【スーパー・ボランティア・サークル（SVC）活動】

＊英語絵本読み聞かせ、総社市立昭和中学校　2023年　5～10月　８回

＊7月　高梁キャンパス地域貢献交流事業（小学生と留学生との国際交流支援）

＊8月　美咲町イングリッシュキャンプ（小学生）

＊11月 岡輝小学校バザー、五つ星学園子ども祭り、美咲町イングリッシュキャンプ（中学生）

＊2月　美咲町旭学園英語集会

＊3月　つながれ岡輝の実施支援（誘導、警備）

3）特記事項

＊高梁キャンパスの地域交流イベントで高梁中学校2年生向け講義を担当（2023年7月）担当：ワーナー先生

＊高大連携事業 English on Campusの一環として、高校生向けに「John’s Cat,James」というタイトルで講義を行った（2023年8月）担当：ワーナー先生

【園芸・スパイス研究会／顧問：大下(朋)先生】

＊令和5年7月15日(土) 高梁カレーフェスへの出店（スパ研と志知キャンパス農学部コラボカレー「夏野菜をトッピングしたスパイスカレー」、チキンティッカ、チャイの販売）

＊美咲町英語アドバイザー（池上先生）

・美咲町立旭学園校内研修講師　3回（７、８、10月）

・美咲町立旭学園英語集会指導助言　２月

＊総社市　要約筆記奉仕員養成講座講師。（佐藤先生）

＊全国要約筆記問題研究会（全要研）パソコン要約筆記全体投影の読みやすい表示条件の検討。

＊6月　日ようび子ども大学（SVC、池上先生）

＊9月　岡山南高校服飾デザイン科での民族衣装ファッションショー（留学生、SVC、その他日本人学生）　TV放映

＊3月　地域交流イベント「つながれ岡輝」で「いろいろな国の文化を知ろう！」のテーマで出演（留学生、SVC、その他日本人学生）

(その他)

＊2月27日　岡輝公民館の社会教育主事が岡山キャンパスを来訪し、地域における外国人住民との共生を目的とした、次年度における異文化交流イベントの共催の申し入れと協力の依頼があった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

コロナ禍が収束し、地域イベントなどに学科の学生（留学生を含む）の参加やイベントの準備、実施などを要請されることが多くなった。SVCやスパイス研究会のメンバー、協力的な留学生で対応した。地域の反応は好意的で、留学生の地域での共生、岡山キャンパスの知名度に貢献している。準備やイベント実施には、担当教員の指導、助言、手伝いが必要で、教員や事務職員への負担が増大している。

〈次年度への課題〉

＊地域貢献を継続的に実施するためには、コアとなる学生の育成が急務である。コアとなる学生を複数育成し、可能な限り多くの貢献ニーズに対応できる体制をつくりたい。
＊要約筆記関係に関しては、大学のPRに少なからず貢献しているので、無理のない範囲で継続（佐藤先生）
＊ただし、外国学科学生のキャパシティの課題もあるため、地域貢献に関しては「選択と集中」の戦略を策定する必要があろう。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

今年度は、外国学科の卒業必修プログラムであるスタディー・アブロード（留学）に、米国ほか5か国に15名の学生を派遣した。そのうち9名は、交換留学のステータスで派遣し、残りは自費留学であった。また、夏休みや春休みを利用し、14名の学生がオンライン留学を実施した。海外の教育提携校からは、5か国・地域（米、韓、仏、蘭、台湾）から12名の交換留学生を受け入れた。また、教育提携校の米フィンドレー大学、加オカナガン大学から、それぞれ11名、6名合計17名の研修団を受け入れ、交流イベント、ホームステイ、犬島での合宿、日本文化体験などを在学生と共に積極的に行った。

（交流会など）

＊5月　JICAによるベトナム、ハロン大学の学生とのオンライン交流会（池上ゼミ）
＊11月10日 交換留学生との交流会　１年のチューター生とスパイス研究会の有志で、オランダ、台湾、タイ、ベトナムからの留学生との交流会を開催（大下(朋)先生）
＊2月1日 交換留学生の送別会　１年のチューター生とスパイス研究会の有志で、交換留学生の送別会を開催。台湾からの留学生は餃子を日本人学生は日本の料理を作り、食を通した異文化交流の機会となった（大下(朋)先生）

〈今年度の結果についての点検・評価〉

＊一定数の学生を留学に送りだせはしたが、次年度に留学を先延ばしする学生が目立つ。英語コミュニケーション力が不足していること、新しく制定された奨学金（伊藤奨学金、特別奨学金）を得るためなどの理由が挙げられる。
＊コロナ禍において、海外留学の代替え措置として導入したオンライン留学であるが、英語コミュニケーション力の向上、経済的な事情、海外留学に向けた練習・準備のために積極的な活用がなされている。
＊研修団や交換留学生、正規留学生ほかとの交流イベントには、日本人学生が積極的に参加した。外国学科らしいスピリットが醸成されている。

〈次年度への課題〉

＊スタディー・アブロードへのモチベーション向上を図り、計画策定、準備を前広に行わせ、早めにスタディー・アブロードを履修させるよう指導を強化する。
＊英語コミュニケーションに自信のない学生に関しては、オンライン留学を積極的に進め、英語力の向上、海外留学に向けたレディネスを高めたい。
＊交換留学生・正規留学生、研修団との交流機会を増やすことにより、楽しんで学ぶ機会を増やし、学修意欲向上の一助とする。

ｱﾆﾒｰｼｮﾝ文化学部 ｱﾆﾒｰｼｮﾝ文化学科の自己点検・自己評価

学科長　　清水 光二

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

・令和5年10月の入学者：1年生2名（留学生）、3年次編入生3名（留学生）
・令和6年4月の入学者： 1年生40名（日本人30名、留学生10名）3月末の予想
（入学定員が40名のため、充足率は100％）
残念ながら今回も入学定員を満たすことはできなかったが、前年度春の入学者が13名であったことを考えれば、V字回復を果たしたと言ってもいいのではないか。特に入学者36名の内、日本人学生が28名であったことは評価すべき点である。オープンキャンパスにはこれまで以上の参加者があったが、その中の多くの生徒を実際受験にまで結びつけることができたと考える。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・入学者が増加した要因の一つだが、倉敷芸術科学大学芸術学部＜デザイン芸術学科およびメディア映像学科＞が統合して芸術学部＜芸術学科＞となったことが考えられる。芸術学部芸術学科内に置かれた一領域（コース）のアニメでは、高校生にとっては馴染みが薄いものに思われたのではないか。本学科は令和5年度より方向性をアートアニメから商業アニメに変更しているので、常時テレビや映画のアニメに慣れ親しんでいる高校生たちは、倉芸よりもこちらの方に強い関心を示してくれたのではないか。
・次に、地元であれ都心であれアニメスタジオへの就職を本学科の目標と定めたことにより（そのために東京の専門学校に務めていた教員を令和４年に確保したのだが）、動画マンとしてスタジオに採用されるにはどの程度の画力が必要かを具体的に示すことができるようになったので、高校生も今後の目標設定をリアルにイメージすることでき、安心したのではなかったか（アートアニメの場合は目標設定が極めて困難）。
・オープンキャンパスの参加者に配布するために、A4サイズで４ページにわたるパンフレットを新規に作成した。学生作品や授業風景、それに詳細なカリキュラム紹介などが可能となり、高校生の関心を呼び起こすことに効果があったのではないかと考える。

〈次年度への課題〉

・今回は学生確保の点である程度の成果が得られたのだが、本当にこのやり方が正しいのかどうかは、次回もまた同様の結果が得られるかどうかで決まってくると考える。県内の限られた需要（高校生のニーズ）を分け合うことになるため、基本的には倉敷芸術科学大学芸術学部芸術学科との差別化を常時意識しながらやっていくことになるであろう。
・地元だけでなく都心のアニメスタジオも含めた就職活動を本学科は目指しているわけだが、実際の就職実績においてその結果を見せられなければ高校側の信頼は得られないので、次年度はそのことに大いに注力したいと考える。
・令和6年の春に2D・3DCGに詳しい教員を新たに採用する予定なので、オープンキャンパス等で学科の教育内容の充実ぶりを強く紹介していきたい。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

・退学と除籍について：退学者5名（内留学生3名）・除籍者（留学生）1名（3月19日現在）
・資格について：今年度「色彩検定」の2級に1名、3級に1名が合格した。令和6年度は「色彩検定」に加えて、「CLIP STUDIO PAINTクリエイター検定」や 「アドビ認定プロフェッショナル」についても学科の取得可能な資格として学生には推奨していきたい。
・就職率について：57.7％（2月26日現在）
・令和６年度から新しいカリキュラムが始まるのだが、もちろんこれは３つのポリシーに基づいて作成されたものである。そして、令和5年度より商業アニメを志向しアニメスタジオへの就職を目指すと決めたことから、新カリキュラムはアニメスタジオやゲーム会社などの就職先を強く意識した内容となっている。

基本的には「アニメーション文化科目」「イラスト・印刷デザイン」「アニメーション制作」「3D モデリング・ゲーム」の４つの柱で構成されており、２年次から始まるゼミ指導と直結した学習計画が可能となっている。そこでは新たにイラストや３Dモデリングの授業が強化されており、高度な技術を学修することでゲーム会社などの新しい領域にも就職先を広げられるよう見直しがなされている。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・日本語学習に問題のある留学生が、最終的に日本語能力試験N2に合格できないまま退学するケースが徐々に増えている。
・履修モデルを通じて各科目の難易度や履修の順番などが分かっているはずなのだが、一部の学生にはアルバイト等自身の都合を優先して登校日を設定する傾向が見られ、学生本人の学修状況や授業運営にも支障をきたしている場合が散見される。オリエンテーション時の履修説明やゼミ担当者の履修指導が、より丁寧になされる必要があるであろう。

〈次年度への課題〉

・コロナの影響で留学生数が少ないという状況がまだ続いているが、この機会を利用して留学生指導を徹底したい。一方で絵の勉強をメインにしていると、どうしても日本語の勉強が疎かになりがちなのだが、卒業や日本での就職に必要な日本語力の重要性を改めて説きたい。
・令和4年に一人採用し、令和6年の春にもう一人、東京から実技教員を専任教員として招き寄せることになっている。どちらも都心の大手専門学校で長く働いてきた実務系の教員だが、彼らには実践的な実技教育だけでなく、東京に集中するアニメスタジオへの就職指導もお願いしたいと考えている。県内のアニメスタジオへの就職には限界があるため、どうしても都心のアニメスタジオを視野に入れる必要がある。しかし、自信がなく地元志向が強い本学の学生を東京に向かわせるのは並大抵ではなく、学生の根本的な意識改革が求められる。都心のアニメスタジオに就職した先輩の姿を自らの目で見て、後に続く者らが安心と自信を持てるような仕組み作りをすることが、次年度以降絶対に必要である。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

学術論文　4編
講演・口頭発表　5件
著書・作品等　4点
その他の研究業績　4点

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・本学科には業界に勤めていた実務教員がいつも一定数いるため、大学教員としてあるべき研究活動がなかなか期待できず、他学科に比べれば論文数等が少ないと考える。そして、一部の教員に研究活動・研究実績が偏っていることも問題である。
・教養科目のカリキュラムが改変されて、今年度で2年目となった。実は本学科には教養科目を担当する教員が多いのだが、自身の本来の専門性と担当教養科目とのズレ、さらにはアニメ専門科目の中での立ち位置の難しさ等、他学科にはない困難が本学科にはあると考える。

〈次年度への課題〉

・令和4年に採用した実務教員も、令和6年春に採用予定の実務教員もともにまだ50歳代なので、大学教員の責務として研究活動を行い論文を書くことを強く促したい。日本の大学においてアニメーションが教えられるようになってから実際まだ日が浅く、学会そのものも発展途上段階にあるという印象だが、若い教員には実技だけでなく研究面においても力をつけていく必要があることを改めて自覚してもらいたい。
・アニメ専門の教員もアニメ非専門の教員も自分の専門性だけに拘っていると、社会の多様化するニーズに対応しきれないように思う。アニメ業界自体がデジタル化への道を模索中で、複雑化する業態の変化に対応するためには、自らの従来の専門性を大事にしつつも、それに拘らない態度を持たなければ学科の存続は厳しいのではないか。これは研究活動以前の話だが、アニメ業界に直結している学科の特性からして避けては通れない問題だと考える。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・今年度も「ゲームジャム高梁2023」を、10月28日と29日の両日、吉備国際大学多目的ホールにて開催した。途中コロナ禍による中止をはさみながらも、これで8回目を迎えることになった。例年通りオンラインも含め30名以上の人々が参加し、盛会となった。最近では、香川県や広島県の学生らも参加するようになってきている。なお、学内からは作業療法学科、外国学科、経営社会学科、eSports サークルなどからの協力も得ている。
・「わたしあうまち高梁市・動画CMコンテスト」に、本学科の学生が中心となっているサークル、映像研究会が自作の作品を応募した。なお、本学科の冨田准教授が同コンテストの審査委　員長を務めている。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

主に画を描くことを学ぶ学科であるため、他学科と比べると地域と関わるための所謂「現場」というものを持たず、直接的な地域連携・地域貢献はなかなか難しいと感じている。時にアニメ動画の作成依頼を受けることもあるのだが、実写に比べた場合のアニメーション制作の労力の大変さ（人手も時間も予想以上に掛かる）をご存じないことがほとんどで、残念ながらお断りをせざるを得ない場合が多い。そうした中で「ゲームジャム高梁」は、本学科がICTクラブ高梁、岡山県立高梁城南高校、岡山Unity勉強会などの外部の関係機関とも協力して実施できる数少ない活動なので、今後も継続して関わっていきたいと考えている。

在学中に「ゲームジャム高梁」に参加した学生が、そこでの経験を活かして今年度ゲーム会社への就職を果たした。地域貢献の意味合いが強い活動なのだが、それだけでなく、学生の就職確保にもつながる可能性があることが示されたわけである。

〈次年度への課題〉

高梁市内の有志の人々で結成されているICTクラブ高梁が、実は来年度会員の転出のために活動が困難になることが予想されている。新年度2D・3DCGに詳しい教員が本学科に赴任予定なので、その欠落部分をこの新任教員で補い、活動を継続していけたらと考えている。中山間地域を多く含む中四国地方の発展のために、高付加価値のクリエイティブ産業の創出と拡大を目的としている私たちの活動だが、すぐに結果を出すことは困難なので、まずは活動の継続を目指したい。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・令和5年10月、井上博明教授が中国の成都で開かれた「世界SF大会」に参加して、各国のSF事情についての情報交換を行った。その際、中国各地の大学や日本語学校を多数訪問して、吉備国際大学とアニメーション文化学科の紹介を行った。
・令和5年12月、中国の「黄岡師範学院美術学部アニメ学科」の学生と教員合わせて21名の訪問を受けた。コロナ禍以降、初めての研修団受け入れであった。学生らには本学科で実施している3科目の授業を体験してもらい、交流を深めた。彼らの中の何人かが、令和6年秋に本学に留学してくることが期待されている。
・「黄岡師範学院」の学生については従来、1年間の科目等履修（主に日本語学習）の後に、ほぼ自動的に本学科の3年次に編入学してもらっていたのだが、令和6年度からは日本語能力試験の2級合格を条件とすることにした。3年次編入後は専門科目の単位修得に忙しく、日本語学習がおろそかになる傾向があったので、そうした状況を改善したいと考えた次第である。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

コロナの収束が期待される中で再開された国際交流だったが、関わる人々の熱い思いがとても印象的な1年であった。大学を訪問してくれた中国の学生たちも、海外に出られる喜びを素直に感じ取っているようだった。このように交流自体は順調に再開可能となったのだが、留学生の確保という点になるともうしばらく時間が掛かるのではないかと考える。コロナ禍の数年の間にいずれの国においても国内の事情が大きく変化しており、日本でアニメーションを勉強することの意味を改めて問い直しているのだろうと想像する。

〈次年度への課題〉

コロナの収束後、留学生に再度日本に来てアニメーションの勉強をしてもらうためには、日本の伝統的な手描きアニメとともに、海外では主流のデジタル作画技術についても高度なスキル提供が必要となるであろう。令和6年度には2D・3DCGを専門とする教員が赴任予定なので、留学生が求める最新のデジタル技術についてもこれである程度対応可能となったのではないかと考える。

通信教育部心理学部子ども発達教育学科の自己点検・自己評価

通信教育部長　　栗田 喜勝

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

令和2年度募集停止に伴い、従来実施していた各種の広報活動は行っていないが、教員が小・中・高校等における研修会・講習会講師として活発に活動しており、大学の知名度やブランド力の向上に貢献している。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

教員が小・中・高校等における研修会・講習会講師として活発に活動しており、大学の知名度やブランド力の向上に貢献していることは評価できる。

〈次年度への課題・向上方策〉

令和2年度より学生の募集を停止しているが、引き続き所属教員による学外活動を通じて大学の知名度やブランド力の向上に貢献する必要がある。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

(1)本学科の教育目標は、ブランドビジョンに定める「実践的な知識を自ら学ぶ力」、「多様化する社会で生きぬく力」、「自分の可能性を信じる力」の育成を基盤として、子どもの主体的な学びを援助する保育内容・教育内容に関わる専門知識を修得し、子どもへの直接的な発達支援や、保護者への子育て支援を行う実践力を身につけることであり、目標に沿った人材養成を行っている。

(2)本学科のカリキュラムは、4年制通信教育課程として、大学卒業の学位取得にふさわしい教育内容になっている。具体的には、教養科目群14科目(テキスト科目11、スクーリング科目3)は、基礎的な教養を身につけるために言語・情報関係科目群、社会・人文関係科目群、自然科学関係科目群から成っている。また、専門科目群104科目(テキスト科目71、スクーリング科目27、実習科目6)は、保育士資格・教員免許取得にかかわる専門科目に加えて、心理・保育・教育・子ども福祉について多面的に学ぶための科目が配置されている。

①テキスト科目については、科目担当教員が指定する教科書や参考書を用いた自宅学修であるが、科目単位認定試験については、対面実施により年度当初の計画通り実施することができた。

②スクーリング科目については、対面授業で行うことにより計画通り実施できた。

③実習科目のうち保育実習については、計画通り実施した。

(3)資格・免許の取得状況については、概ね学生の希望通り取得することができた。内訳としては、保育士資格取得者8名、幼稚園教諭一種免許状取得者5名、小学校教諭一種免許状取得者5名であった。

(4)退学者対策としては、ゼミ担当教員の個別指導体制により、学生が気軽に相談できる環境を整えている。取り組みの成果として学修意欲の喪失による退学は無かったが、心身の不調による退学が2名、学納金未納による除籍が4名あった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

4年間の学びを通して、保育・初等教育に関する各種の専門知識や技術を修得し、専門職者に必要な職業倫理、子ども観等を身につけるとともに、向上心を持ち自己実現を目指す態度を涵養することができており、各種の資格や免許も概ね学生の希望通りに取得できている。また、教員の懇切丁寧な指導により、退学者、除籍者とも減少していることは評価できる。

〈次年度への課題・向上方策〉

令和2年度学生募集停止となったが、在学生の教育については今後とも人格の陶冶と専門性向上によるバランスの取れた人材養成に努力する必要がある。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

1)学科の研究活動としては、(1)教員の個人研究、(2)学科教員の共同研究が上げられる。

(1)教員の個人研究

今年度の学科教員の個人研究については、著書3件、学術論文3件、講演等20件であった。

(2)学科教員の共同研究

学科教員の共同研究については、「吉備国際大学たかはし子育てカレッジ事業」に関わる研究や、高梁市における「次世代育成支援対策」に関わる研究等を行っており、今年度は地域における出前講座「親子ふれあい遊び」7回、親子を対象とした「子育て講座」1回、保育者を対象とした「子育て支援者講座」2回を実施した。親子を対象とした子育て支援活動の取り組みは、親子のふれ合い交流や子ども同士、親同士の交流を図るなど、中山間地域における地域密着型子育て支援拠点形成のモデルとして地域の子育て支援に貢献することが期待されており、令和5年度おかやま子育てカレッジ地域貢献事業補助金(岡山県指令備中局地第2006号)の交付を受けた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

本学科の特性上、所属教員の専門分野は心理系、保育系、教育系、福祉系等の多岐にわたるが、学術研究活動に精力的に取り組んでいることは評価できる。また、岡山県の補助金による地域の子育て支援事業を学科教員が協働して展開していることも評価できる。

〈次年度への課題・向上方策〉

教員の個人研究ならびに共同研究の促進を図り、科研費申請・採択を目指す必要がある。また、研究成果の学生教育への還元、地域の子育て支援活動へのフィードバックを通じて、学生の学士力や地域の子育て支援力の向上を図る必要がある。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

(1)子育て講座の実施

平成22年7月に高梁市内の子育て家庭に対する支援を目的として、岡山県備中県民局、高梁市、高梁市内の子育て支援団体等、12団体の協働により大学内に設置された「吉備国際大学たかはし子育てカレッジ実行委員会」による様々な活動を例年展開している。本年度は昨年度に引き続き新型コロナウィルス感染拡大に伴い、年度当初に計画されていた種々の活動を自粛せざるを得ない状況であったが、感染防止対策を徹底して、高梁市内各地域（川上、落合、成羽）の保健センター、児童館、認定こども園において、高梁市子育て支援センターならびに母親クラブと連携してアウトリーチ型の親子ふれあい活動を7回実施した。

(2)各種ボランティア活動等

1)高梁市内・岡山県内等の保育園・幼稚園・小学校・中学校等におけるボランティア活動の実施、読み聞かせ会、出前講座等

2)順正学園ボランティアセンターにおけるフードドライブへの協力等

(3)各種委員等

学科教員が委員を受託している各種委員会については次の通りである。

高梁市教育委員会、高梁市保育者育成プログラム検討委員会、岡山県保育士養成協議会、中四国保育士養成協議会、岡山いのちの電話協会スーパーバイザー・トレーニングリーダー養成委員

〈今年度の結果についての点検・評価〉

高梁市内各地域における出前講座(親子ふれあい活動)は、参加親子に好評で定着してきている。また、高梁市内外の各種委員会や団体から委員の委嘱を受けて活動に取り組んでいることは評価できる。地域の各種団体と連携して種々のボランティア活動に今後とも引き続き積極的に取り組む必要がある。

〈次年度への課題・向上方策〉

「吉備国際大学たかはし子育てカレッジ実行委員会」による様々な活動の中で、「吉備プレーパーク」を例年数回学内の広場を活用して実施しているが、設備上の事情により次年度以降、学内でのプレーパークの実施は難しいので、他の事業による地域の子育て支援の充実に努める必要がある。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

異文化・国際事情の理解を深め、国際化・グローバル化時代の様々な国際問題の理解や取り組むべき課題に関する知識・洞察力を養うために、「外国語(英語Ⅰ,Ⅱ)」をはじめ、「多文化理解」や「国際社会学」等の授業科目を配置し、国際化教育の推進を図っている。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

授業科目の中に、「多文化理解」や「国際社会学」等の科目が配置されていることは、国際化の推進に資する取り組みとして評価できる。

〈次年度への課題・向上方策〉

令和2年度より学生の募集を停止しているが、国際化に資する授業科目の未履修学生には履修指導を行うとともに、国際化の理解を深めるよう自己学修を促す必要がある。

社会学研究科の自己点検・自己評価

研究科長　　姜　明求

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

教員一丸となって定員確保のために大学のホームページ、公開講座・講演、researchmap、学科授業(学内進学)などを通じて情報発信をした。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

教員一丸となって定員確保のために出前講座、公開講座、講演、学科授業(学内進学)などを通じて積極的に情報発信をした。

入学者は前期課程8名(66%、留学生7名、日本人1名)で、前年度も66%。8名の内、学内進学は5名(留学生)、社会人(日本人)が1名、研究生2名(留学生)である。後期課程の入学生は0名(0%)であった。前年度も0名(0%)。

前期課程の8名の入学(春4名、秋4名)は一定の評価ができる。特に、社会人1名(日本人)の入学は評価できる。しかし、結果は不満足であり、前期・後期課程共に定員確保の目標を達成することができなかった。これは深く反省すべき点である。在学生は、博士前期課程が16名(66%、日本人2名、留学生14名)、後期課程が0名(0%)である。

〈次年度への課題〉

博士前期課程(12名)・後期課程(4名)の入学定員100%を目指す。定員確保は大きな課題(前期・後期)であり、特に、後期課程の入学生の確保がより大きな課題である。

次年度も、教員一丸となって定員確保(前期・後期)のために出前講座、公開講座、講演、学科授業(学内進学)などを活用して定員確保につながるような情報発信をしていく。特に、学内進学の院生増加のために授業中に社会学研究科の魅力の情報発信をしていく。また、社会人の確保にも全力を尽くす。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

社会学研究科の3つのポリシーに合わせて、社会のニーズに応える教育及び院生の満足度が高くなる学習体制、研究指導体制を構築した。また、日本語教育(留学生)に力を入れるともに、懇切丁寧な研究指導をした。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

懇切丁寧な論文指導と留学生の日本語学習支援など教育の充実を点検した結果、効果が見られたことを高く評価することができる。研究環境の提供、スポーツ大会の開催など院生個々の関心や興味に注意を払った教育改善は院生の動機づけと授業満足度の向上につながった。また、留学生の日本語能力の向上にもつながった。

①専門科目(24単位)及び演習(8単位)の32単位を取得し、修士論文の審査に合格した者に対して修士学位(社会学)を授与した(留学生6名)。対象の全員が修了できた。また、院生が自主的に学習し、プレゼンテーション能力の向上のための授業を行った。授業アンケート調査では春の教員の平均値が4.98、GPAの平均値が春学期3.85(2023年)であった。懇切丁寧な研究指導と自主的に研究できる教育環境の充実が院生の学習満足度の向上につながった。

②退学者を防止するために、各教員が院生の修学状況を把握し、個別面談の実施、教員間で情報を共有しながら、懇切丁寧な指導を行なった。退学者ゼロ%の目標が達成できた。

③日本語教育の充実は留学生の日本語能力の向上につながる効果が見られた。日本語能力試験N1に2名とN2に4名の合格と共に修士論文の完成ができた(6名)。また、就職率は100%(日本企業4名、中国企業2名)。

④社会の多様なニーズに対応するために不開講科目は引き続き隔年開講して専門教育の充実を図った。

⑤社会学研究科論叢25号を発行し、OG2名、OB3名が投稿した。OG、OBの投稿は研究科のブランド力の向上にもつながったと考えられる。

〈次年度への課題〉

建学の理念、社会学研究科の3つのポリシーに合わせて、人気社会学研究科=ブランド力の向上につながるような取り組みを引き続き行う。

次年度も、日本一面倒見の良い研究科を目指して、懇切丁寧な研究指導(主指導教員と副指導教員2名)と留学生の日本語学習支援と、学習満足度の向上のために研究環境の改善の取り組みを全教員が引き続き行う。また、退学者ゼロ%を目指して全教員が情報を共有し、個別面談を実施して問題の学生を早期発見し、懇切丁寧な指導を行う。これは面倒見の良い社会学研究科の取り組みであり、引き続き行う。さらに、情報発信と研究科のブランド力の向上のために大学院論叢26号を刊行する(OBとOGの投稿)。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

教員各自が科研などの研究費の申請と、著書・論文・学会発表を目指した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

教員の研究成果は以下の通りであった。

科研費採択・継続　2件、助成金　0件、受択研究　0 件、外的資金　0件
論文　　7　編(英文　2編)
学会発表　　3　回

時間と様々な活動が制限される中、研究の業績はおおむね評価ができる。ただし、全教員が年に1編の論文、あるいは著書を公表することが叶わず、目標を達成することが出来なかった。また、科研の採択、競争的資金などの獲得においてはより一層の努力が必要である。これらは反省点として指摘できる。

〈次年度への課題〉

社会学研究科において科研の採択、競争的資金獲得は課題である。次年度も、教員各自が教員各自が科研の採択、外部資金獲得のためにより一層の努力をすると共に、教員各自が研究力レベルアップと、社会学研究科のブランド力を高めるために論文、著書の公表及び学会発表が行える時間の確保、環境整備に取り組む。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

各教員が教育・研究の専門分野を活かして、講演、公開講座、行政の委員などの社会(地域)貢献活動を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

各教員は教育・研究の専門分野を活かして社会(地域)貢献活動を行った。特に、公開講座(まちなかゼミナール)、高梁市民を対象にする高梁健康スポーツ講座+高梁筋力アップ講座を行った。また、地域連携・地域貢献事例報告(健康寿命延伸のための取り組み)を行った。このようなことは社会(地域)に大きな貢献であり、一定の評価ができる。ただし、社会(地域)貢献活動の回数が少なく、高く評価することができない。

〈次年度への課題〉

次年度も、情報発信とブランド力の向上のために公開講座、ボランティア活動などの社会(地域)活動には全教員が積極的に取り組む。このような活動を通じて大学の持つ知の社会への還元と共に、地域社会に貢献できる人材育成の充実を図る。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

研究・学習を通して異文化・国際事情などの理解、地域住民との交流を図り、国際化を目指した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

社会学研究科の在学生は留学生が多く、授業を通して異文化の理解の促進、また、広島西教寺のボランティア活動を通じて日本文化の理解と共に地域住民との交流を図った。

このような国際化の取り組みは評価ができる。留学生の国別にみると、中国5名(男)、ベトナム2名(女)、インドネシア7名(男3、女4)となっている。

〈次年度への課題〉

次年度も、引き続き、授業を通して異文化・国際事情などの理解の促進、留学生と日本人学生との交流(相互の文化の理解)、地域住民との交流などを図り、国際化に取り組んでいく。また、国際社会で活躍できる人材の養成に取り組む。

保健科学研究科の自己点検・自己評価

研究科長　　京極　真

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

・入試は、（前期）課程がⅡ期からⅣ期、（後期）課程が（博士）Ⅰ期で実施した。
・ホームページやパンフレットを通じて、（前期）課程および（後期）課程を紹介した。
・TwitterなどのSNSを利用して広報活動を展開した。
・学術誌や学会等において、学生募集の案内を出すなどの広報活動を実施した。
・EメールやZoomなどを通じて、受験生からの相談に対応した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・（前期）課程：入学定員6名、入学者数1名、入学定員充足率16.67％（昨年度の充足率16.7%）
・（後期）課程：入学定員3名、入学者数3名、入学定員充足率100％（昨年度の充足率0%）
・学部大学院一貫教育制度のよる科目等履修生の受入：0名

〈次年度への課題〉

・入学定員充足率を100%達成することを目標とする。
・受験生が積極的に受験を決意できるように、研究科の独自の魅力を積極的に訴える。
・保健医療福祉学部と協力して、学部から大学院にかけての一貫した教育体系のもと、科目等履修生の受け入れを充実させる。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

・3つのポリシーにそって、講義、演習、研究指導を実施するとともに、研究計画発表会、中間発表会、博士論文事前審査会、学位審査を実施した。学位論文の審査は、ポリシーにそって厳格に実施された。
・理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則の専任教員要件に対応する教育学に関連する科目を開講した。
・院生との連絡ノートを作成し、相談体制の強化を行った。
・退学予防策として、懇切丁寧な研究指導体制を構築した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・（前期）課程の修了生は1名、（後期）課程の修了生は2名であった。
・（後期）課程は1名が博士学位論文を提出する予定だったが、要件を満たすことができず辞退となった。
・教育学に関連する科目は、（前期）課程から1名、（後期）課程から3名が受講した。
・連絡ノートを活用し、院生からの要望を把握することができた。
・退学者は0名だった。

〈次年度への課題〉

・研究指導には、1人の主指導教員と2人の副指導教員を配置し、細かく充実したサポートを提供し、学位論文の完成を目指す。
・学位審査は、1人の主査と2人の副査が厳正に行い、学位の価値を高めることに注力する。
・授業では多様なメディアを利用し、講義やアクティブラーニングなどの手法を融合させ、大学院生の研究能力と技能の向上を図る。
・TA（教育助手）を活用して、大学や大学院の教育方法について学ぶ機会を提供する。
・院生とのコミュニケーションノートを継続して使用し、相談体制を強化する。
・引き続き、退学者数をゼロにすることを目標とする。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

・科研費15件、論文41編（査読あり37編、査読なし4編）、著書7冊、講演・口頭発表等50件、授賞1件
・各教員が大学院生とともに、研究活動に取り組んだ。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・研究活動は、おおむね良好な結果であった。
・各教員が自覚をもって研究活動に取り組み、成果を公表した。

〈次年度への課題〉

・来年度も、今年度と同様に、教員それぞれが自身の研究活動に取り組む一方で、研究科内での積極的な学術交流を促進し、より良い成果を目指すための工夫をする。
・研究の活性化を図るため、科研費などの競争的資金の獲得を目指し、その応募を積極的に推奨する。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・地域連携・地域貢献として、岡山県看護協会、高梁市医師会、認知症サポーター養成講座、高梁市在宅医療、介護推進、看護師確保対策、まちなかゼミナール、高梁市ミニデイ、高梁市介護予防事業、高梁市認知症サポーター養成講座、認知症及び認知症支援にかかる啓蒙活動、ゲームジャム高梁・ICTクラブ高梁、スポーツ交流会、ワークシェアリング就労支援プロジェクト、園芸療法に取り組んだ。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・各教員の専門分野を生かした地域社会への貢献活動が盛んに展開された。
・教員や大学院生が将来的に地域連携・地域貢献につながる研究活動に取り組んだ。

〈次年度への課題〉

・地域との連携や地域への貢献をさらに進めるために、今年度の活動を来年度も引き続き行う。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・大学院生の国際的な活躍を目指し、学位論文に関連する英語論文の執筆支援を行った。
・英語での論文を基に議論を行い、国際的な最新の動向についての教育を提供した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・英語で論文を執筆し、それを学術誌に投稿するなどの活動を行った。
・国際的な動向を考慮に入れ、将来の研究に期待されることについての理解を深めた。

〈次年度への課題〉

・英語での論文執筆支援を引き続き実施する。
・国際社会で活躍する研究者を育成するために、英語論文の読解を通じて世界の研究動向に対する理解を深める機会を提供する。

（通信制）保健科学研究科の自己点検・自己評価

研究科長　　京極　真

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

・修士課程の入試は第1期から第3期にかけて実施された。
・ウェブサイトとパンフレットを使用して、当研究科を紹介しました。
・Twitterなどのソーシャルメディアを利用して広報を行った。
・学術雑誌や学会などで、学生募集の告知を行うなどの宣伝活動を展開した。
・EメールやZoomを活用して、受験生からの相談に応じた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・入学定員15名、入学者数11名、入学定員充足73.33％
（昨年度の充足率：理学療法学専攻20％、作業療法学専攻10％）

〈次年度への課題〉

・入学者数が定員の100%に達成されることを目標とする。
・広報活動を強化し、通信制の利点を強調して、本研究科の特長を広く知らしめる。
・大学院生の確保に向けて、口コミを強化するために、在院する大学院生の満足度の向上に努める。
・受験生が積極的に受験を決意するよう、研究科の独自の魅力を積極的に訴える。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

・修了生は理学療法学専攻が10名、作業療法学専攻が5名だった。
・教育学に関連する科目は、理学療法学専攻から8名、作業療法学専攻から6名が受講した。
・退学者は0名であった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・修了生は理学療法学専攻が10名、作業療法学専攻が5名だった。
・教育学に関連する科目は、理学療法学専攻から8名、作業療法学専攻から6名が受講した。
・退学者は0名であった。

〈次年度への課題〉

・丁寧な研究指導等を通じて大学院生の満足度向上に努める。
・（通信制）保健科学研究科理学療法学専攻、および（通信制）保健科学研究科作業療法学専攻は来年度から、（通信制）保健科学研究科理学療法学・作業療法学専攻へと改組されるため、新しい体制で良質な研究指導が行えるように連携を強化する。
・研究指導体制は、1人の主指導教員と2人の副指導教員によって、細かくかつ充実した内容となるようにし、学位論文の提出に向けて取り組む。
・学位審査は1人の主査と2人の副査が担当し、厳格に実施することで学位の質を向上させる。
・授業では多様なメディアを活用し、質の高い通信制の教育を提供する。
・退学者数をゼロにすることを目標とする。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

・科研費15件、論文41編（査読あり37編、査読なし4編）、著書7冊、講演・口頭発表等50件、授賞1件
・各教員が大学院生とともに、研究活動に取り組んだ。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・研究活動は、おおむね良好な結果であった。
・各教員が自覚をもって研究活動に取り組み、成果を公表した。

〈次年度への課題〉

・来年度も、今年度と同様に、教員それぞれが自身の研究活動に取り組む一方で、研究科内での積極的な学術交流を促進し、より良い成果を目指すための工夫をする。
・研究の活性化を図るため、科研費などの競争的資金の獲得を目指し、その応募を積極的に推奨する。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・地域連携・地域貢献として、岡山県看護協会、高梁市医師会、認知症サポーター養成講座、高梁市在宅医療、介護推進、看護師確保対策、まちなかゼミナール、高梁市ミニデイ、高梁市介護予防事業、高梁市認知症サポーター養成講座、認知症及び認知症支援にかかる啓蒙活動、ゲームジャム高梁・ICTクラブ高梁、スポーツ交流会、ワークシェアリング就労支援プロジェクト、園芸療法に取り組んだ。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・各教員の専門分野を生かした地域社会への貢献活動が盛んに展開された。
・教員や大学院生が将来的に地域連携・地域貢献につながる研究活動に取り組んだ。

〈次年度への課題〉

・地域との連携や地域への貢献をさらに進めるために、今年度の活動を来年度も引き続き行う。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・授業や研究指導の中で、国際的な最新のトレンドに関する知識を学生に提供した。
・英語での論文を基に議論を行い、国際的な最新の動向についての教育を提供した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・国際的な動きを考慮に入れ、将来の研究において期待される内容に関しての理解を深めた。

〈次年度への課題〉

・国際社会で活躍する研究者を育成するために、英語論文の読解を通じて世界の研究動向に対する理解を深める機会を提供する。

心理学研究科の自己点検・自己評価

研究科長　　三宅 俊治

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

入試広報室による募集・広報、大学ホームページ上での研究科の案内、それに学園内推薦入試に有利な心理学検定受検の案内、などを行った。また、学園内推薦入試(6月)・第Ⅰ期入試(9月)・第Ⅱ期入試(11月)・第Ⅲ期入試(2月)・第Ⅳ期入試(3月)の計５回の入試を実施した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

博士(前期)課程の入学定員：15名に対し、入学者数は４月入学が6名、10月入学が1名（留学生）、計7名であった。入学定員充足率：46.7%。博士(後期)課程は、入学定員：2名、入学者数：0名、入学定員充足率：0%。これは、昨年の入学者数、定員充足率と比較して、秋学期入学者数が1名増加して、充足率は6.7% 向上した。引き続き、入学者数や定員充足率の向上に努めたい。

〈次年度への課題〉

本学の学部4年次生に向け、心理学研究の面白さ、心理的支援の社会的重要性などを理解させ、大学院進学に関心を持たせるように普段の授業で説いていくことを心がけたい。また、九州保健福祉大学の臨床心理学科にも、今年以上に積極的に博士(前期)課程への入学生の募集を働き掛けたい。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

今年度開始時には、博士(前期)課程は1年次生が6名、2年次生が6名の計12名が在籍。博士(後期)課程の在籍者はいなかった。博士(前期)課程の1年次生6名のうち3名が退学。1年次生は残り3名と、秋学期入学者1名の計4名となった。教育効果の1つの指標としてGPAが位置づけられるが、博士(前期)課程の1年次生3名の平均GPAは3.69で非常に高かった(範囲は3.48～3.87)。秋学期入学者1名は、3.00であった。2年次生6名の平均GPAは3.13でかなり高かった(範囲は2.88～3.56)。これらはいずれも高い値を示していて、教育効果は上がっていたと考えられる。本研究科の公認心理師コース修了者は公認心理師受験資格が得られるが、令和5年5月に行われた公認心理師試験には前年度(令和4年度)修了者6名のうち、5名が合格した。令和5年度修了者は6名であったが、公認心理師受験資格者は5名いた（1名は心理学コースのため、公認心理士受験希望ではない)。3月3日に行われた公認心理師試験の結果は、合格者4名、不合格者1名であった（合格率80%）。次に、ディプロマポリシーに関連して、修了者6名のうち、地方公務員1名、障害・発達支援関連施設（福祉分野）に2名、一般企業に1名の計4名が内定している。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

１年次生4名(1名は秋学期入学者)、2年次生6名の計10名のGPAは、今年度の単年度に限ればいずれも3以上を示していて、教育効果は高い水準を維持しており、充実した教育課程を展開できたと考えられる。今後も、院生一人ひとりに対して懇切丁寧な教育、指導を心掛けたい。なお、公認心理師試験では、令和4年度修了で公認心理師試験を受験した6名のうち5名が合格し合格率は83%（令和5年9月）、令和5年度修了者については、3月3日が試験日で3月29日に合格者が発表され、受験者5名のうち合格者は4名で、合格率は80%であった（全国平均は、76.2%）。一昨年より、公認心理師の合格者数や合格率が向上するように、修士論文の提出時期を約1か月早める対策、受験者相互の勉強会の勧告などを行ってきた。こうした受験対策を講じた効果が現れるように、次年度以降も受験者には発破をかけたい。なお、博士（前期）課程に入学した6名のうち、3名が退学したが、これは極めて由々しきことである。退学理由は、大学院の教育課程に馴染む自信が無い者2名、公認心理師受験を目指して入学したが、学部における基礎科目の単位数が満たない者1名であった。

〈次年度への課題〉

令和5年に行われた公認心理師試験（令和4年度に修了した受験者6名中5名が合格）の合格率は、83.3% で全国平均以上であった。令和5年度修了者のうち受験者は5名、合格者4名で合格率は80%であった。合格率において全国平均（76.2%）を上回っていたものの、100 % には至らなかった。公認心理師の受験対策として、修士論文の提出時期を従来の2年次の1月20日から、12月10日に早めて、受験対策に充てる時間を増やすように年間スケジュールを改めて、今年度で3年目となる。こうした対策の実効は一応認められる。また、院生同士の受験に向けた勉強会の立ち上げているが、こうした試みを次年度も強く促したい。退学者対策に関して、学部における公認心理師受験基礎科目の単位数の不足で退学した者が1名いたが、これの対策に関しては自己確認できるチェック表を作成し、大学院受験時に確認できるようにした。また、大学院の教育課程に適応できない者については、2名の出身大学である九州保健福祉大学の進学指導とこれまで以上に連携し、今後、このようなことのないように連絡を密にしていきたい。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

研究科の授業担当者の研究関連成果については、 著書：著書(共編・共著・分担執筆)：3編、研究論文：10編、書評・解説・報告等：2編、学会発表（学会シンポジウムの発表も含む）：30編、科研費採択・継続：3件、 助成金：4件、であった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

第2回中期目標の「研究力」の項で掲げた目標、すなわち「大学院担当教員は、年間に１回以上の学会発表、１編の論文作成をノルマとして課す」という点と今年度の取組結果を照合すれば、大学院担当教員10名の平均で見たとき、研究論文数及び、学会発表は目標を達成しているといえる。

〈次年度への課題〉

第2回中期目標の「研究力」の項で掲げた目標、「大学院担当教員は、年間に１回以上の学会発表、１編の論文作成をノルマとして課す」という点は、ある程度達成できていると考えられる。従来のような論文の公表や、学会発表だけに満足せず、院生の教育効果も含めた共著論文の作成や、国内外の研究者との共同研究を活性化できるように普段の会議等を通して促していく。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

学校ふれあい促進事業（高梁市・市立松山高校）、教育相談（岡山県・高梁高校）、母子保健事業＝乳幼児健診（高梁市・健康づくり課）、子どもの心とからだの総合相談（岡山県・備北保健所）、ペアレント・トレーニング講座（高梁市・NPO法人color）、学校における心理教育授業（倉敷市真備東中学）、少年院におけるコンサルテーションおよび保護者支援（法務省岡山少年院）、児童養護施設におけるアートセラピー体験（岡山聖園子供の家）、岡山いのちの電話相談（岡山いのちの電話協会）、思春期・ひきこもり相談（岡山県・備北保健所）、心の健康相談（岡山県・総社南高校）で地域連携活動を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

地元高梁市を中心に15件の地域貢献が教員単独もしくは共同で行われ、その成果は広く地域の教育・保健（医療）・福祉分野で認められつつある。大いに評価できると考える。

〈次年度への課題〉

地域貢献と、それに努める教員の本来の研究的関心に割く時間とのバランスを考慮して、これからも地域貢献を漸増する方向で活動していくことが期待される。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

秋学期入学として、留学生1名を受け入れた。海外における学会発表、海外の研究機関との共同研究などなかったが、研究論文では英文執筆が1編あった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

秋学期に、中国からの留学生が入学してきた。また、10編の執筆論文のうち、英文が1編あった。人的交流、英文論文の執筆など、少しずつ中期目標に向かっていると言える。

〈次年度への課題〉

第2回中期目標の「研究力」の項で掲げた目標、「学外（国内外）の研究機関との共同研究を進める」という点は、前年に比べ今年度は向上した。学外（国内外）の研究機関との共同研究を進めるには、論文発表や学会発表を通して、国内外の研究者とのコミュニケーションを促進することが重要である。論文の公表や、学会発表だけに満足せず、国内外の研究者と学界をリードしていくという気概と自覚を再認識できるように、会議等を通して促していく。

（通信制）心理学研究科の自己点検・自己評価

研究科長　　三宅 俊治

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

(1) 大学ホーム・ページにおける通信制・心理学研究科博士（後期）課程の紹介。
(2) 通信制・博士（後期）課程のパンフレットの発行。
(3) 通信制事務局の行っている説明会。
(4) 通信事務、あるいは入試広報室による各種の大学院説明会。
(5) オープン・キャンパス時や普段の土曜・日曜日における面談。
(6) 受験資格や教育課程に関する問い合わせに対するメールによる回答書の送付。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

今年度は、2月11日（日）の入試を経て、2名が合格した（3/26現在）。そのため、定員3名に対する充足率は、66.7%であった。昨年度は0名であったので、かなり改善された。
次年度は、入学定員が充足されるように努力したい。

〈次年度への課題・向上方策〉

上記の学生確保に向けた取り組み(1)～(6)を、さらに充実させ、定員充足率を高めたい。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

本年度は、コロナの扱いが5類になったため、夏季スクーリングについても冬季スクーリングについても、駅前キャンパスで対面でそれぞれ行われた。在籍している特別研究生2名のうち、4年次生は夏季・冬季のスクーリングに参加、いずれの時期でも活発な議論が行われた。もう1名の特別研究生は、5年目を迎えて、多忙を理由に夏季・冬季のスクーリングを欠席した。5年次生については、勤務先の国立大学において、3年前に就任した副学部長の重責や、ゼミ生の卒論、留学生の指導、修論の指導、地域貢献など、夥しい業務の遂行を強いられ、後1年を余した教育課程で、博論の進捗が期待できないことから、退学届を提出した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

特別研究生の4年次生は、勤務先の短期大学での教育業務を遂行しつつ、学術誌への投稿論文の準備が進んであるように思われ、進捗は緩慢であっても研究が進められてていると評価できる。一方、特別研究生の5年次生については、勤務先の業務過多につき、退学もやむをえない者と思料する。

〈次年度への課題・向上方策〉

来年度に5年目を迎えてる特別研究生については、引き続き、研究を推進して、学術誌への投稿、掲載を目指す。入学してくるであろう新入生2名については、懇切丁寧な指導を心がけ、成果が上がるように取り組むつもりである。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

担当教員5名の成果として、科研費採択・継続：1件、助成金：3件、 著書(共編・分担執筆)：3編、研究論文：6編、学会発表：19編、書評・報告・解説：1編が、産出された。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

第2回中期目標の「担当教員は、年間に1回以上の学会発表、1編の論文作成をノルマとする」を、平均的には超えている点で、一応の評価はできる（担当教員数：5名）。

〈次年度への課題・向上方策〉

基本的には担当教員の自覚を高めることであり、折りを見つけて研究に傾注するよう促していきたい。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

研究科の性格上、在籍していた院生が、特に地域貢献を行ったわけではなかった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

夏季と冬季の年間2度のスクーリングが主な教育課程のイベントであり、地域連携活動が行われなかったのは、研究科の性格上、やむを得ない。

〈次年度への課題・向上方策〉

次年度に向けた方策は、特に考えていない。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

通信制・心理学研究科の担当教員は、通学制・心理学研究科の担当教員と重複するので、担当教員に関連した国際化の推進については、通学制・心理学研究科の欄を参照していただきたい。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

研究科の性質上、特筆するものはなかった。担当教員に関連した国際化の点検・評価については、通学制・心理学研究科の欄を参照していただきたい。

〈次年度への課題・向上方策〉

研究科の性質上、特にしるすことは少ない。ただ、在籍する院生の研究内容に関して、海外の学術誌や学会などで積極的に発表するように指示は続けたい。

地域創成農学研究科の自己点検・自己評価

研究科長　　相野 公孝

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

・定員充足を実現できるよう課題研究や卒業研究指導を通じていかに研究が楽しいかを伝え、大学院進学の動機付けとした。また、社会人も視野に入れた学生確保の取り組みを行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・博士課程前期 0人、後期課程 0人と不本意な結果となった。
・就職率が良く、大学院進学者が極めて少ない状況である。特に、社会人においては、理系研究への興味及び学位取得意欲の減退が著しい状況であった。

〈次年度への課題〉

・引き続き研究の楽さ、重要性を発信するとともに、社会人の再教育の場としても考慮に入れる必要がある。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

・きめ細かい指導をさらに推し進め、学生の学習意欲を高めるともに、学生の日常にも気を配り、学習意欲の持続を確保した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・高度な専門分野を持った人材としての養成が順調に進んでいる。研究において、酵母における遺伝子レベルでの分類とその諸性質についてのデータ収集を行った。その結果、新知見も多く得られ、これまでの情報とともに整理し修士論文としてまとめることができた。
・きめ細かい指導と、学生とともに考え、論議し、研究を進めることを心がけたため、学習意欲は低下せず、退学者は0人となった。

〈次年度への課題〉

・今年度と同様に、学生に寄り添った指導を継続する必要がある。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

・新しい分野のプロジェクト計画とその実施を行い、研究活動の活性化を図り、新しく農水省産学連携プラットフォームへ参画を計画した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・研究活動実績は、査読付き学術論文5編、学会等発表6題、大学研究紀要が1編、国内助成研究発表が1題であった。助成・受託研究は4件、学内共同研究が1件、SDGs教育研究活動が2件採択された。

〈次年度への課題〉

・学科の枠を超えた新しいプロジェクトの構築が必要である。
・学術研究助成基金以外の各省庁が行なっている競争的資金の獲得を考える必要がある。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・地元企業との連携による新商品開発、地元住民との交流を通して、地域の問題点の抽出、その解決方法を住民と共に探った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・酵母の遺伝子レベルでの分類を行っており、伊弉諾神宮で採取された酵母の分類同定を行った。有望な4菌株を選抜し、遺伝子解析を基にした分類において、これまでの清酒用酵母と異なった遺伝子構成を有することが判明した。本結果により他の清酒との差別化を図ることができる。

〈次年度への課題〉

・現状の取り組みを継続しながら、より広範囲の地域連携活動を行う。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・学部の国際交流イベントに積極的に参加した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・フィンドリー大学およびオカナガンカレッジの短期留学生が農学部を訪問し、交流会では多数の学生が参加し親睦を深めることができた。
・くにうみ祭及びさなぶり祭において、高梁キャンパスの海外留学生が参画し、学部生とともに交流会に参画した。

〈次年度への課題〉

・今年度と同様に留学生と日本人学生との交流を活発化する計画を図り、相互の文化の理解を進めていく必要がある。

(通信制)連合国際協力研究科の自己点検・自己評価

研究科長　　末吉 秀二

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

1. 広報活動
   - ・リスティング広告（Google）
   - ・国際開発ジャーナル　通信教育特集
   - ・国際協力キャリアガイド
   - ・協力隊を育てる会ニュース
   - ・研究科ホームページの拡充（スクーリング等を写真付きで紹介）
2. 入学前Web相談およびオンラインによる入試の実施

〈今年度の結果についての点検・評価〉

入学定員7名、入学者4名、入学定員充足率：57%

〈次年度への課題〉

・入学定員充足率100%を目指す。
・今年度の広報活動およびWeb相談、オンライン入試を継続

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

・夏季および冬季スクーリングの実施
・共通選択科目に15科目（保健、感染症、人口、文化人類、環境等）を設置
・オンライン（Teams）による懇切丁寧な教育・研究指導
・定期的なゼミの開催

〈今年度の結果についての点検・評価〉

概ね満足のいく結果であった。

〈次年度への課題〉

今年度の取り組みの継続

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

修士論文の学術雑誌への投稿奨励

〈今年度の結果についての点検・評価〉

学術雑誌への投稿はなく、今後の課題となった。

〈次年度への課題〉

今年度の取り組みの継続および修了生へのフォローアップ

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

南あわじ市津井地区で「地域調査法特論」のフィールドワークを実施し、地方紙「かわら版」に記事を掲載

〈今年度の結果についての点検・評価〉

概ね満足のいく結果であった。

〈次年度への課題〉

今年度の取り組みの継続

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

アラブ首長国連邦・モンゴル・トンガを調査対象とした研究の実施（今年度の修了生）

〈今年度の結果についての点検・評価〉

概ね満足のいく結果であった。

〈次年度への課題〉

今年度の取り組みの継続

留学生別科の自己点検・自己評価

留学生別科長　　松原　孝

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

別科の定員は春入学・秋入学共に80名ずつ(全8クラス)であるが令和4年度にキャンパスを集約したため、教室と教員の数に配慮し、春60名定員(3クラス)、秋40名定員(2クラス)で稼働している。令和5年度の春入学生は61名（留年者2名を含む）、秋入学生は32名であった。一学年5クラス(1クラス20名定員)で考えると定員充足率は93%となった。
春入学生に対しては、大学の先生の講義を受ける機会を作ったり、例年通り進路ガイダンスを行うなどして学部進学のモチベーションを維持できるよう努めた。また設置校への進学者を増やすべく、秋入学生から別科入学前に面接試験を実施し、大学進学の意思確認等を行うようにした。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

令和4年度秋入学生28名中、17名が吉備国際大学に進学(編入2名)、内部進学率61%となった。また令和5年度春入学生61名中、吉備国際大学への進学者は42名(編入7名)で、内部進学率は69%となり、前年度より約30%増となった。89名中、6名が専門学校へ進学、15名が就職または特定技能、8名が退学(除籍)・帰国であった。春入学生は前年度同様に入学当初進学希望者が少なかったが、大学で学ぶ価値や意義を多方面からアプローチし、最終的に進学者数を維持することができた。

〈次年度への課題〉

吉備国際大学の留学生別科として大学への進学率100%を目指す。この数値を実現するために、前年度同様に各学部の先生方にもご協力をお願いし学部説明会を実施し、さらに学部生との交流の機会を増やすためにも先生方だけではなく学生部・留学生課との連携を強め、楽しく希望に満ちた学校創りを目指す。
また前回の課題で達成できなかった別科入学前の現地セミナーの実現、そして引き続き別科入学時の面接試験を実施するなど、学部進学が有望な学生の確保に努める。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

【退学者対策】

前年度に引き続き、教員間で学生の出欠状況などを共有し、連絡なく欠席した学生には電話やメッセージまたは家庭訪問をし、常に繋がりを持ち、学生の変化に気がつくよう取り組んだ。また面談なども実施し、家庭や経済状況を把握し、計画的に支払いをするよう指導。教員は学業のみではなく生活面でも、アルバイト情報を提供するなどしてサポートした。

【資格・免許・検定等】

別科では入学時の日本語能力のレベルによってクラスに分かれ、年2回のJLPT受験を目標の一つに学習している。試験慣れするため、またモチベーションアップのためにも、JLPT模擬試験を定期的に実施。その他、授業内でも模擬試験や模擬問題をくり返しこなし、受験対策をした。

【その他】

学習需要や社会の変化に対応すべく、またそれらの理解の増進に資するよう、教育セミナー等へ参加する。
臨機応変に現場の状況に対応する柔軟な思考力、協力しあって仕事をするコミュニケーション能力を培い、体制の整備・充実を図る。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

【退学者対策】

令和4年度秋入学生の退学除籍者は6名、令和5年度春入学生の退学者は2名となった。前年度は春秋共に19%であったが、今回は秋入学生が21%、春入学生は3%と春に関してはかなり減少した。大学に進学するメリットを伝え続けていたのもあると思うが、別科の学費の減免を廃止し、学部の入学時の学費を減免したことにより、退学除籍者が減少し進学志望者が増加したように思う。

【資格・免許・検定等】

JLPTに関して、令和4年度秋入学生は合格率37.5%、令和5年度春入学生は合格率23%となった。入国日の関係で一度しか受験できない学生も多数。下のクラスはN5レベル相当で、一年でN3相当に能力を上げるのは困難。JLPT対策より基礎力のアップに注力したため、合格率にも影響した。

【その他】

外部の教育セミナー等への参加は一部の教員のみとなったが、現場での教育体制は整いつつあり、科内や大学とのコミュニケーションも円滑に運び、それが学生の満足度や充実感向上に繋がった。

〈次年度への課題〉

【退学者対策】

退学や除籍になる学生の兆候を早期につかむためにも、引き続き日常のコミュニケーションや定期的な面談を実施し、信頼関係を築くよう努める。また経済的な理由で除籍者を出さないためにも、別科入学時に学費を全額納入できる、もしくは経費支弁が確実な学生またはアルバイトをするのに十分な日本語能力を有している学生を選抜できるのが理想。

【資格・免許・検定等】

年2回のJLPT受験を必須とし、合格を目指す。長期休暇で日本語能力が落ちないよう、学習を持続できる工夫をする。具体的には学内でも模擬試験を定期的に行い、年間を通して日本語力が低下しないように努めたい。成績を可視化するなどして、モチベーションが上がるよう対策を講じる。

【その他】

令和6年4月に日本語教育機関認定法が施行されるなど日本語教育に対して変革のときである今、教授する側もさらにアンテナを張り体制を整える必要がある。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

大学がある高梁市の伝統文化を留学生が学び受け継いでくれればと、高梁市の教育課と婦人会の方たちの協力で「備中松山踊り」の体験会を実施し、希望者は本番にも参加した。その他ボランティア活動に参加するなど、地域貢献活動を促した。
また地域連携に取り組むきっかけ作りとして、岡山市国際課主催の多文化共生推進ネットワーク会議に出席し、コロナ禍以降の入国緩和に伴う影響や岡山市多文化共生社会推進プランについて意見交換し、各団体と情報共有を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

日本文化に関心がある学生にとって松山踊りの体験会は好評で、特に浴衣を着て踊るという行為は、自国の民族ダンスとの共通点もあるからか、印象深かったようだ。地域の方とも文化を通してお互いに交流を深めることができた。

多文化共生推進ネットワーク会議で案内があったフォーラム「多様性を尊重した多文化共生のまちづくり」に参加し、各国の生の声を聞く機会に触れた。外国人材の受入体制が進んでいるドイツの調査報告や各国のパネルディスカッションなどがあり、多文化共生社会の構築には岡山県においても今後どのような施策をとっていくか、地域との連携の必要性を改めて感じた。

〈次年度への課題〉

次年度も年中行事として備中松山踊り体験会を実施し、今年度の反省点を踏まえてより円滑に地域の方との交流ができるよう、準備を入念に行う。そして体験を通して日本文化だけではなく、学部のある高梁に関心を持ってもらい、進学後は地域や地域の方との関りを自ら持てるよう自主性を養っていく。また実際に地元のイベントやボランティア活動にも協力、参加するなど、学校(留学生)も地域(行政や民間団体等)と連携し多文化共生のまちづくりの発展に貢献していきたい。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

別科は現在、インドネシア、スリランカ、ネパール、ベトナムの4カ国の留学生が在籍している。授業の座席やグループワークなどは同国同士にならないように配慮し、共通語が日本語になるように工夫している。またグローバルな人材育成のためには、異文化背景を持つ仲間と共存することで多様性を受け入れ、広い視野を持ったグローバルマインドを養う必要がある。そのためにも授業だけでなく他国の学生とコミュニケーションが図れるよう、全員参加のイベントを定期的に実施した。また留学生の英語力を活かし、日本の児童と英語でコミュニケーションを取るアルバイトなども経験できた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

授業や休憩時間だけでなく特にイベントなどでは国境を越えて交流することができるので、異国の文化や習慣に触れるきっかけになる。相手の文化や習慣を理解することはグローバルマインドの基本であり、仲間との協同作業を通して自国以外の国のことにも興味を持つことができたのではないかと思う。また学校外の活動の場面(アルバイト等)では、自国のことを日本に伝えるなど、グローバル人材として活躍する機会もあり、国際化の推進に貢献できたのではないかと思う。

〈次年度への課題〉

日本語だけでなく日本の習慣を習得することで、日本の社会に順応する力もつき、グローバルな人材が育つと考える。国際人としての教養や適応力を身につけさせるためにも、入学前から自国で日本の生活習慣等を学ぶことができる仕組みづくりをしていきたい。具体的には動画など視覚的に伝えるコンテンツを作成し(日本人学生にも協力していただけると有難い)、海外の日本語学校などでも事前教育を実施していただき、入国後のトラブルを削減できればと思う。

令和5年度 自己点検・自己評価委員会総会 外部評価

※各内容について５段階評価（5点：非常に良い　4点：良い　3点：普通　2点：やや劣る　1点：劣る）

１．令和5年度 吉備国際大学の自己点検・自己評価

	評点平均	コメント
（1）建学の理念・教育目標の具現化について	4.5	・建学の理念をより具体的にするべく３つの力のブランドビジョンとして示されたことは素晴らしいことだと思います。 ・三つの力の設定が適切になされている。 ・ブランドビジョン＝教育目標で全教職員で共有し、ステークホルダーに周知させるコンセプトは秀逸である。 ・教職員、学外に対して周知されている。
（2）学生確保について	4.3	・高校訪問、進学ガイダンス、出張講義、高校単位での見学会など学生確保に向けて努力されていることが伺えます。 ・学生確保に向けての方向性が適切である。 ・学生広報スタッフによるインスタグラムへの情報発信は効果的だと考える。 ・オープンキャンパス参加者などの増加がみられる。
（3）教育の充実（教育改善・向上）について	3.5	・大学をあげて学生支援が行われていることがよく分かりました。 ・国家試験合格率がすばらしい。 ・学生主体、学生自身の手で創るイベントを増やすことが活性化につながると考える。 ・退学・除籍者数の減少がみられる。
（4）教育の充実（学生支援の充実）について	4.0	・大学をあげて学生支援が行われていることがよく分かりました。 ・きめ細かい対応がすばらしい。 ・留学生支援を強化し、留学生が生き生きと活躍できるようにすることが、特色づくりにつながる。 ・学生と理事長、学長との意見交換会等を通して意見要望に対応している。
（5）教育の充実（キャリア支援の強化）について	4.0	・各キャンパスで実施されたガイダンスやイベントへの参加人数が少ないような気がしますが…。 ・ていねいに、基本に忠実な対応がなされている。 ・教育全体にキャリア形成を目指す取り組みは発展させて欲しい。 ・就職・進学率の向上対策に重点的に取り組んでいる。
（6）教育の充実（図書館の活用）について	3.5	・購入図書の選定において教員や学生からの推薦希望を受け付けられていることはいい取り組みだと思います。 ・現実的な取り組みがなされている。 ・ラーニングコモンズの機能と課題研究のつながりを強めるとよいと考える。 ・図書の充実に努めている。
（7）教育の充実（学修環境の整備）について	3.5	・計画的に学修環境の整備に取り組まれていることは評価できます。 ・楢井サッカー場の人工芝更新と撤去された人工芝の再利用は朗報。 ・外灯のLED化は、学生の安全・安心のためにすすめるべき。 ・学修環境の充実に努めて下さい。
（8）研究推進について	3.3	・大学、学部単位での産学官連携研究を推進していただきたい。 ・科学研究費補助金の新規採択率の向上を期待したい。 ・地域連携研究は進めて欲しい。小・中・高との連携もできるとありがたい。 ・研究の向上、推進に努めて下さい。
（9）大学運営（持続可能性の追求）について	3.5	・SDGｓ達成や環境マネジメントの推進にも大学として取り組まれてることを知りました。 ・SDGｓへの紐付けが進むよう期待したい。 ・高校でもSDGs活動への取り組みを行ないたいと考えている。 ・環境意識等の向上に努めて下さい。
（10）大学運営（職能開発の強化）について	4.0	・教職員の資質向上と能力開発に努められていることは評価できます。 ・地道な活動をしておられる。 ・地域連携・地域貢献・国際化についての研修と重視することはよい。 ・教職員の資質と能力の向上に努めて下さい。
（11）大学運営（人権・安全への配慮の充実）について	3.5	・課題としてあげられているとおり、差別のない環境づくりに取り組んでほしいと思います。 ・多様な学生への配慮が見られる。 ・多様性を体現する大学を目指してほしい。 ・労働環境の向上に努めて下さい。
（12）大学運営（法人部門との連携の円滑化）について	4.0	・様々な組織により意思決定がなされチェック機能が働いていると感じます。 ・安定している。 ・経営部門と教学部門との連携は大切、学校運営のキーだと思う。 ・法人本部との連携が取れている。
（13）大学運営（財政基盤の確立）について	3.5	・中期財務計画に基づき推進されている。学生定員充足による学納金収入の増加に期待します。 ・大学運営の重要な基盤であり、適切な対応をされている。 ・学生定員充足がかなえば、全てがうまくいくか。 ・財政基盤の安定・確立を目指して下さい。
（14）大学運営（適正な会計処理の実施）について	3.5	・経理担当者は各種研修会に参加され、常に情報を得ることに努力されていることが分かりました。 ・適正になされている。 ・組織的なチェック機能の確立と持続が鍵か。 ・適正な会計処理が実施されてると思われます。

	評点平均	コメント
（15）内部質保証について	3.3	・課題から改善へと繋がるよう努力されたい。 ・体制が整い、動き始めている。 ・課題と改善へと繋げるための改革のエンジンとはいかなるものなのか。プロジェクトチーム的なものか。 ・体制の確立に努めて下さい。
（16）地域連携・地域貢献の推進について	3.8	・公開講座の開催や出張講座、地域の高校生への支援など大学の持つ知の社会への還元がなされている。もっと市民へPRして参加者など募るべきなのでは。市広報誌への掲載も可。 ・地道に進めておられる。自治体、産業界との連携協力協定が待たれる。 ・地域連携、地域貢献活動の状況の一層のアナウンスが必要だと考える。 ・今後も連携・貢献に努めて下さい。
（17）国際化の推進について	3.3	・市民と留学生の交流の機会がもっとあればと思う。インターナショナルフェスタで中学生を招待したのはいい取り組みだと思います。 ・安定している。 ・留学生と高校生の交流もお願いしたい。 ・国際交流等の充実に努めて下さい。

２．令和５年度 学部・学科・研究科の自己点検・自己評価

	評点平均	コメント
社会科学部	3.8	・両学科共に、地域貢献活動に活発に取り組まれている。有難いことだと思います。 ・国際大の特徴を引き出す努力をしておられる。 ・地域課題を目標とする活動を伸ばしてほしい。高校へノウハウの伝授をお願いしたい。
経営社会学科	3.8	・地域連携・地域貢献をより強めていただきたいです。 ・学生満足度の高まりが評価できる。 ・経営学と社会学を結びつけて実社会に伝える新カリキュラムは興味深い。
スポーツ社会学科	3.5	・市民を対象とした健康教室への参加者が減少しているとのこと。市としてもPRしていかなければと感じました。 ・地域貢献の取組が優れている。学生確保に期待する。 ・各種資格試験、教員採用試験への支援体制は力を入れてほしい。
保健医療福祉学部	4.0	・保健師、理学療法士、作業療法士の新卒国家試験合格率100％達成をもっとPRしてみては。 ・教育の充実の取組がきめ細かくなされている。 ・理学療法士、作業療法士の国家試験合格率100％はすばらしい。広報につなげてください。
看護学科	3.5	・「高梁市と吉備国際大学があなたの学生生活を支えます！」のキャッチフレーズいいですね、学部への変更期待してます。 ・国家試験全員合格への取組が充実している。 ・国家試験の合格率が分かり易く、大切。ここに注力。
理学療法学科	4.0	・市内高校から2名（前年度0名）が入学したとのこと、今後増えればと思います。 ・「豊かな人間性」「多様な社会で活躍する力」の視点がすばらしい。 ・何といっても大きいのが、資格取得に向けた教育が成功。持続するためのシステムを。
作業療法学科	3.8	・資格取得に向けて、保護者への面談までされていることは素晴らしい取り組みだと思います。 ・学生確保に期待したい。 ・何といっても大きいのが、資格取得に向けた教育が成功。持続するためのシステムを。
心理学部	3.3	・多くの地域連携・地域貢献活動が行われたとのこと。有難いです。 ・ていねいな教育がなされている。
心理学科	3.8	・市教育委員会とも連携して様々な地域貢献に取り組まれている。今後もお願いします。 ・地域に根ざした活動をされている。 ・人間科学部人間科学科心理学専攻へ変えた意味から、発展的前向きに考え、教育内容を向上させる。
子ども発達教育学科	3.5	・出張講義の多さには驚きです。 ・ていねいな教育がなされている。
農学部	3.5	・学生確保に向け、精力的に活動しておられる。 ・地域と連携した取り組みで、特色をさらに打ち出すとよい。
地域創成農学科	3.5	・学芸員の資格取得が可能となるなど努力しておられる。 ・地域と連携した取り組みで、特色をさらに打ち出すとよい。
醸造学科	3.3	・地道な活動をしておられる。 ・地域と連携した取り組みで、特色をさらに打ち出すとよい。
海洋水産生物学科	4.0	・新学科として、上々のすべり出しをしておられる。 ・地域と連携した取り組みで、特色をさらに打ち出すとよい。
外国語学部外国学科	3.5	・教育内容の充実に努めておられる。 ・高校と留学生との交流を希望する。何が特徴かを明確に打ち出す必要。
アニメーション文化学部 アニメーション文化学科	4.0	・学生確保に向け、冷静に判断しようとされている。 ・実践的なカリキュラムでの教育は期待できる。
通信教育部心理学部 子ども発達教育学科	3.3	・大学の知名度やブランド力の向上に努力しておられる。 ・退学者、除籍者とも減少していることは評価できる。
社会学研究科	3.5	・ていねいな研究・指導を継続しておられる。 ・日本一面倒見のよい研究科に退学者ゼロ％を目指すことはよい。

	評点平均	コメント
保健科学研究科	3.5	・ていねいな研究・指導を継続しておられる。 ・丁寧な指導、誠実な対応が可能性を広げる。退学者ゼロは評価できる。
（通信制） 保健科学研究科	3.5	・ていねいな研究・指導を継続しておられる。 ・丁寧な指導、誠実な対応が可能性を広げる。退学者ゼロは評価できる。
心理学研究科	3.5	・教育成果が出ている。 ・退学者の要因をさぐり、状況を改善することが求められる。競争的資金への応募で研究の活性化を図ることはよい。
（通信制） 心理学研究科	3.5	・入学者増が実現した。
地域創成農学研究科	3.0	・入学者の確保に期待したい。 ・社会人の再教育の場という発想はよい。
（通信制） 連合国際協力研究科	3.5	・継続に努めておられる。
留学生別科	3.5	・サポートがしっかりしている。

総評およびご意見・お気づきの点

多忙な中、大学自ら自己点検、自己評価され日々努力されていることに感銘を受けました。また、大学として、地域連携・地域貢献に取り組まれていることに感謝いたします。大学の「知」が当地にあることは大変有難いことです。教員の皆さんや学生の皆さんが地域へ出ていろいろな場面で活躍していただいていますが、大学と市民の距離感が遠いといった声もあります。市民との交流の場が増え、市民にとって大学が身近な存在になればと思っています。市としましても、大学があることについての恩恵を市民へもっと周知する必要があると感じています。今後も産官学の連携を密にして、学園文化都市づくりを推進していかなければと感じています。どうぞよろしくお願いいたします。
18才人口の減の影響は大きいと思いますが、その中でも、工夫、改善を重ねられておられることに敬意を表します。市、市教委とも同様の課題を抱え苦慮しておりますが、今後益々に大学との連携を強め、この難局を乗り切っていきたいと思います。よろしくお願いします。
全体として丁寧に学生の面倒をみてもらっていて、好印象を持った。受験生は分かり易いものに魅かれる傾向にあるので、ブランディングの延長で、焦点化したアナウンスが効果的かもしれない。

輝け、自分。羽ばたけ、未来へ。

吉備国際大学

Kibi International University